328
381/3

始

328-38/3

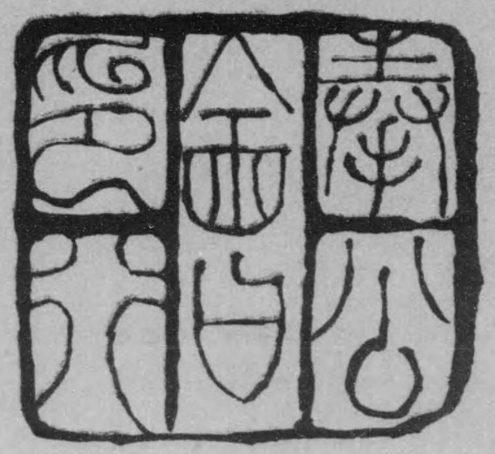
帝國圖書館藏

現代伊太利の發展

蜷川新著

奉公時事叢書第二編

大正
5. 7. 3
内交



本書は王宗岱氏が其の英佛獨伊の原書に基き其の英佛獨伊の原書に基きたる王宗岱氏自身の著書にして英佛獨伊の原書の要旨を摘録したるものなり

王宗岱氏の人となりは英佛獨伊の原書に於ける通り

本書は王宗岱氏が其の英佛獨伊の原書に基きたる王宗岱氏自身の著書にして英佛獨伊の原書の要旨を摘録したるものなり

本書ハ王室ヲ尊ビ天皇ヲ敬シ文武ヲ重ンジ十人ヲ中和ニ致ス

王室ヲ尊ビ天皇ヲ敬シ文武ヲ重ンジ十人ヲ中和ニ致スハ、語ハ其意ニ基カシムル

ヤ、語ハ其意ニ表徴ヲ以テ其意ヲ表ハシ、語ハ其意ニ基カシムルヤ、語ハ其意ニ

代ハ王室尊崇自然ノ勢ニ出テ、文武ハ人ノ中和ニ出ツ、王室ヲ尊ビ天皇ヲ敬シ文

武ヲ重ンジ十人ヲ中和ニ致スハ、日本国民ノ義務ニシテ、人ノ中和ニ致スハ、語

ハ其意ニ基カシムルヤ、語ハ其意ニ表徴ヲ以テ其意ヲ表ハシ、語ハ其意ニ基カシ

ムルヤ、語ハ其意ニ表徴ヲ以テ其意ヲ表ハシ、語ハ其意ニ基カシムルヤ、語ハ其

意ニ表徴ヲ以テ其意ヲ表ハシ、語ハ其意ニ基カシムルヤ、語ハ其意ニ表徴ヲ以テ

其意ヲ表ハシ、語ハ其意ニ基カシムルヤ、語ハ其意ニ表徴ヲ以テ其意ヲ表ハシ、

語ハ其意ニ基カシムルヤ、語ハ其意ニ表徴ヲ以テ其意ヲ表ハシ、語ハ其意ニ基カ

シムルヤ、語ハ其意ニ表徴ヲ以テ其意ヲ表ハシ、語ハ其意ニ基カシムルヤ、語ハ

其意ニ表徴ヲ以テ其意ヲ表ハシ、語ハ其意ニ基カシムルヤ、語ハ其意ニ表徴ヲ以

テ

奉公時事叢書發行趣意書

本會は曩に奉公叢書の發行を企て、漸く其緒に就くを得たり、然るに今復た奉公時事叢書の公刊を敢てせんとす、或は多岐に互るの嫌なきにあらすと雖も、奉公叢書は主として公刊の機會を得さる精深の研究、眞摯の編著を印行して、以て學界に貢獻せんとするものなるが故に、本會の尤も意を効さゞるべからざる時事問題には、或は直接に觸るゝを得さるの憾あり、是れ奉公時事叢書の發刊を企つる所以なり。

奉公時事叢書は、主として時事時勢に關し、尤も緊切なる

ものを公刊するものなりと雖も、然れども、努めて有益なるものを錄して價値なきものを採らず、希くは上は廟謨を贊け、下は民情を悉し、以て奉公の實を擧けんことを期す、是れ奉公時事叢書の發刊を企つる所以なり。

大正五年三月

奉公會

序

伊太利と我が邦とは、三百年前の昔しより、既に特殊の關係を有して居る、即ち西暦一千五百八十五年七月二日、我が國九州大名大友、大村、有馬等の使者がヴェニシア共和國に使して、日本文を以て其の國のドーゲ(統領)に國書を呈し、其後又一千六百十三年(即ち慶長十八年)に、奥州の國守伊達政宗は、其の侍支倉六左衛門を羅馬に派遣し、當時の法皇パオロ五世に日本文を以て書面を呈して居る、此の二箇の書面は日伊の古き關係を示すものとして、現に今ま羅馬の法皇宮殿内に保存されて有る。

今の伊太利は、其の外交政策、其の移民政策、其の財政政策、其

の內政政策、其他敎育學藝等に付て、異常の發達を遂げ、二十年前には此國は非常なる貧國であり、又五十餘年前には未だ一國民をさへなさなかつたものが、今日に於ては、歐洲の一大强國となつて居る、即ち之れを研究することは、愈々益々國民的向上を欲する國民の爲めに、好乎の參考となる可きものたるは疑ひなき所である。

今の伊太利人は多く南北米に移住する人民である、而して我が國民も、同じく此の方面への移住を國民的利益とするものであつて、從つて此の二國民が、若し互に相了解し、相提携して、移住地の開發に盡したならば、實に相互の爲めに利益であり、且つ又世界的文化の爲めに有效であるに相違ない。

余は、現代の伊太利を研究することは、我國の爲めに有益と信ずるものである、即ち外國人の著書、新聞及實地の見聞に據り、聊か此の國を研究し、茲に此の小册子を編んだ次第である。

大正五年四月

著者識

參考書

本書を編むに付て參考せる外國人の書物又は論文は左の如くである。

英人の書

1 Henry Wickham Steed, The Hapsburg Monarchy.

2 G. H. Perris, History of War and Peace.

3 E. Terry. The world-wide Economic War.

獨人の書

4 Prince de Bulow, La Politique Allemande.

伊人の書

5 prince Giovanni Borghēse, L Italie Moderne.

佛人の書

6 Albert Dauzat L'Expansion Italienne.

7 UnTemoin Histoire de la Guerre italo-Turque 1911-1912.

8 Charles Vellay, Les Lettes d'Influences dans L'Adriatique.
9 Henri Austruy, A L'Italie.
10 Ernest Lemonon, La France et L'Italie.
11 無名士 , La Marine italienne et le Dodecanese.
12 Statistique Annuelle de Geographie. Humaine comparee. (1913)
13 Fustel de Coulanges, La Cite Antique.
14 Champaguy, Etudes sur L'Impire Romain.
15 Charles Dupuis, Lo Principes D'equilibre et le concert Europeen.
16 De Renty, L'Europe Noire.
17 Le Matin, Le Temps.
端典人の書
18 Christian collin, De la Decadance et du relevements des peuples.

現代伊太利の發展目次

第一部　伊太利の人民

一、伊太利人……一
二、伊太利の人口……九
三、外國出稼民……一二
甲、出稼民の數及其の職業……一三
乙、出稼人の本國に齎す効果……二一
丙、伊太利出稼民の非全化性……二八
丁、出稼民の出稼方面と其の努力の發展……三二
戊、伊太利出稼民と愛國心……三六
癸、出稼民と外交問題……四三

第二部　伊太利の外交政策

四、伊太利の統一……四八
一、概論……四八
二、伊太利統一の歴史……五五
甲　伊太利統一の國民的精神……五五
乙　カブールのクリミヤ戰爭利用政策……五六
丙　サルヂニヤと佛國との同盟……五九
丁　奈翁三世の單獨講和と統一の頓挫……六五
戊　伊太利王國の建設……六八
癸　普伊二國の同盟及普國の單獨講話……七三
庚　羅馬府の占領……七五
五、伊太利の亞弗利加に於ける失敗と英獨佛露……七六
六、伊太利と佛蘭西との關係……八一

七、伊太利と三國仝盟……九一
八、伊太利の東方政策……九五
甲、伊太利の東方政策一般……九五
乙、アドリヤ海に於ける列國の競爭……九九
丙、小亞細沿岸の島嶼と伊太利との關係……一〇四
九、伊太利領土の擴張……一〇六
甲、トリポリ占領の原因及占領に至る經過……一〇六
乙、トリポリ出征と伊太利人の準備……一一二
丙、トリポリの占領と國內の議論……一二八
丁、トリポリ問題に對する外國の態度……一三五
戊、トリポリの占領と墨人の救濟……一四〇
癸、伊土戰爭の結果……一四三
庚、戰爭の損害及經濟界に及ぼせる影響……一四七

甲、新領土上の新事業……一五一
壬、戰爭と愛國心及國民主義……一六一
十、伊太利と這回の大戰爭……一六八

第三部　伊太利の內政

十一、伊太利と羅馬法王……一七三
甲、法王の地位……一七三
乙、今日の羅馬法王……一七五
十二、伊太利の民主主義的國政と國家主義的事業の統一……一七九
甲、民主主義的國政……一七九
乙、國家社會主義的事業の統一……一八三

イ　鐵道國有……一八三
ロ　電話國有……一八四
ハ　保險官營……一八五
ニ　其他の社會的事業……一八七
十三、伊太利の軍備……一八七
十四、伊太利の經濟的發展……一九三
甲、陸運、海運、郵便、電信……一九三
乙、工業……一九六
丙、商業……二〇〇
丁、金融及財政……二〇一
戊、農業……二〇四
十五、伊太利の敎育……二〇八
甲、基本敎育……二〇八

乙、中等教育……二二三
丙、高等教育……二二四

第四部　伊太利の學術技藝

十六、伊太利と科學的發明及發見……二二八
甲、微菌學上の發見……二二九
乙、電氣工業上の發明……二三〇
丙、無線電信の發明……二三二
十七、伊太利の美術……二三五
甲、繪畫……二三五
イ　ナープル派……二三五
ロ　ヴエニシア派……二三七
乙、彫刻……二三七

丙、建築……二三八
十八、伊太利の音樂……二三〇

第五部　伊太利の社會雜事

十九、伊太利の國語問題……二三四
甲、伊太利語の發達……二三四
乙、演劇に依る國語の普及……二三八
丙、新聞紙に依る國語の普及……二四〇
二十、伊太利の家族……二四三
廿一、伊太利人の遊戯……二四四

結論

現代伊太利の發展目次終

現代伊太利の發展

法學博士　蜷川新著

第一部　伊太利の人民

一、伊太利人

國際間の一國民として、伊太利は、如何なる地位に居るものであるか、と云つたならば、米獨の發展にのみ眩惑しつゝある我が邦人の中には、或は、それは、問題にならずと云つて、取り合はぬものさへあるであろう、乍然今の伊太利は、歐洲の大國の一である、其の近來の軍事、財政、經濟、外交、領土、文化、其他の点に於ける發展は、決して看過すべきものではない、而して伊太利人は、此の新興大國を形成する、由緒あり、抱負ある一大國民である。

伊太利人を說かんと欲するならば、先づ筆を其の遠祖と稱せらるゝ、古への光輝ある、羅馬國時代の羅馬人に遡つて下さゞるを得ない、極めて古い文句ではあるが、「羅馬は一朝にして起らず」、然り凡ての國、總ての世の文明は、各時代の繼續せる人民の努力の報酬である、併し乍ら、若し唯だ單に努力のみと云つたならば、其は完全なる言ひ表はし方と云へないのである、天運、地利、氣候、或は人種、或は外界との關係と云ふが如きものは、決して文化發展の爲めに見逃すことの出來ない現象である、之れを古への羅馬に就て見ても、亦た是の理に漏れないのであつて、其の氣候の溫暖であつたことや、其の地理的地位の良好であつたことや、或は敵國民襲來の虞れの其當初に少なかつたこと等は、其の發展の爲めに洵に天運と云ふべきものであつた。

古への羅馬の軍隊は、他に比して比較的强ひものであつた、而して其の强兵たりし所以のものは、其の訓錬の賜物に歸せられて居り、其の訓錬に就ては、二つの要素がある、即ち一は、羅馬に於ける家父權の絕對無限なりしこと、二には、軍隊に對する國民義務心の堅實なりしこととであつた、當時の羅馬の國民は、其の祖國と云ふ觀念が洵に熾烈であつた、而して家族は、即社會組織の單位であつた。

之れを古への羅馬に就て見るのに、西曆紀元前第五世紀の頃に於ける羅馬は、尙ほ國として、未だ憐れなるものたるを免れなかつた、四五〇、〇〇〇平方吉羅の土地に、一五〇、〇〇〇人の住民を有するに過ぎなかつた、歷史家の云ふが如くに、羅馬は當時、一の貴族共和制の國であつて、其の生活狀態と云へば、未だ交換經濟時代の域を脫しなかつたのであつた。

當時羅馬に於ては、羅馬法の指示するが如くに、一家に於ける家父は、一家に對する絕對の權力を持し、之れを以て一家に臨み、一家を統治し、家族に對し恰も國王の如くに、生殺與奪の權利を有して居つた、當時の家父は、即ち一家の王侯である、ヒユステル、ド、クーランジユの「古代市」に依れば、希臘羅馬の家族觀念は我國の其れと甚た似て居るのである。

當時羅馬の青年は、其の家父に率ひられ、神聖にして剛健なる軍事的訓

錬を受け、進んで兵役に從事し、敵國との交戰ある時は、其の生を國に捧けて奮戰したものであつた、男子若し其の齡十六才に達する時は、其の父は其の子を携へて之れを軍隊に入れ、四十六歳迄は軍隊に籍を置くのであつた、當時の羅馬は立派な軍國主義國であつて、羅馬人が理想的軍隊を有して居たことは、決して偶然ではなかつた事が、之れに由つて知らるゝのである。

如斯軍隊に對する服從觀念と、家父權下に於ける家族の統一との、有力なる二制度を有して居つた羅馬人は、外敵に對しては、好く協力同心し、其國威を維持する点に於て、洵に嘆賞すべきものがあつた、是を以て、羅馬人は、初めには、三万乃至四万の軍隊よりは、準備しなかつたものであるに拘はらず、征服に次ぐに征服を以てし、遂に、全伊太利半島を領有するに至つたのである。

羅馬の制度は、外部に對して發展するが爲めには、頗る成功したが、內部に於ては、漸く其の短所を顯はすことゝなつた、即ち益々異民族を包容し來り、戰勝の結果として、貴族と平民との區別が、益々明瞭となり來るに從て、其の弊は益々顯著となり、初めには、同一の祖先を有すとの堅き信念の下に、建設されたる小羅馬共和國も、征服に征服を重ねて、新領土の多數の人民を包括することゝなつたが爲めに、次第に此の信念は崩潰し來つた、其の初め羅馬に於ては、羅馬人のみ、獨り專ら、羅馬の公務に盡瘁して居つたが爲めに、自然、一切の權利は彼等ローマ人の享有する所となつたのであつたが、羅馬も一般の原則に基き、領土擴張に伴ふ國費の膨張は防ぐ可らずして、其の經費は一般人民の負担する所となり、又其の兵備に到つては、多大なる領土の急速なる擴張は、純粹羅馬人の人口の增加率と比例を保つ能はずして、茲に國防上の大問題に逢着することゝなつた、「セルビュスー、チュリウス」が、羅馬國防の必要より、新附の人民を以て、之れを軍隊に編入するに到るや、引き續き、ローマ人と全一の權利亨有、各人平等の議論は、新附人民の口より叫はるゝに至り、此聲は何れの地方にも波及して、萬人の警戒する、內爭の端を發するに到つたのである。

是時に當り、平民等は共同團結の力に依るにあらずんば、其の目的を到達し得ざるを悟つた、是に於てか、有史以來、彼等は最初の平民團結を形成した、然るに此の方法は、成功の最初のものであつた、即ち先づ彼等は、初めには彼等階級より、二人の執政官を出し、且つ護民官、參事會員を選出し、尙ほ負債に因る、奴隷制度を廢止するに成功したのであつた、是れ正さに一つの進化である。

之れよりして漸次、國民全体は、自已の力に對する自信を有するに到つた、是に於て彼等は、社會生存の競爭に對し、逐次に訓練せられ、人民の社會上の地位の向上を圖るに至つた、紀元前四百五十年、彼の有名なる十二銅表は、刑事上及民事上、共に市民の平等を認めた、而して其れより五年の后、羅馬人と新附の民との間に、從來禁止せられたる婚姻は有効なりと認められ、漸次に新附人民の地位は昂められ、而して羅馬市民以外より、終に帝位に登るものあるに至つたのである。

羅馬は斯くして一面に發展し、斯くして他面に漸く國民性墮落し來つた、而して後、終に大羅馬國は滅亡し、國内は北方の蠻人に荒畧せられ、過去の文化全く壞滅し、民は四散し、國は四分五裂、之れより久しく伊太利の人民は、外國人に征服せられ、其の安全を期する所がなかつた、然るに一千八百五十年代より、奈翁三世の援助と、カブールの苦心と、ガリバルジーの勇奮とに由り、漸く勢ひを回復し、十九世紀の中葉に至り、終に伊太利國民として一大國家に統一せられ、此の伊太利統一の賜物に由り、人民は茲に確實に其の安息所を得、爾來伊太利人は、一大勢力をなし、中頃クリチピー等の爲めに、其の對外政策を誤つて、貧窮したが、近來に到り、侮る可らざる世界的一大强國となるに至つたのである。

今若し伊太利人に關して、伊太利現在の國境上から之れを見たならば、容易に其の範圍を定め得るけれども、伊太利人の意義を若し更らに廣義に解釋したならば、現在の伊太利國民以外に、更に大なる範圍に及ぶのである、是れ所謂「イルレダンチズム」の起る所以であつて、今の伊太利人の中には、全歐洲に於ける全伊太利人種を、一國民の旗下に集結せしむるのみならず、

更に古への大羅馬國を再建せんとさへ唱へたものもある、獨逸人種の熾んなる勃興以來、羅典人種は、總て皆な一時は、恰も衰亡するかの如くに唱へられたこともあつた、乍然此の十年以來、特に確かに復活の樣子が見へて居る、從て此の新鋭の氣運ある伊太利人の研究は、世界の形勢に注目するものゝ爲めに、甚だ必要な事たること云ふ迄もない。

今の伊太利人の大部分が、果して古への羅馬人の、純粹なる直系卑族であるや否やは勿論疑問である、乍併、彼等は羅馬人の後裔を以て自ら任して居り、其の過去の盛大と文明とに對して、大なる自負心を有して居るのである、此の心、是れ即ち、彼等が發展をなす原動力である、宜なる哉、今の伊太利人の中には、學術界に於ても沒す可らざる天才が居る、大陸海軍國たる國民的大抱負がある、其の近來の外交は又甚だ巧妙である、其の財政經濟は近來甚だ豊富である、其の人口は大ひに增殖し、其の人民は又頻りに海外に發展する、彼其統一を遂げて、より今日の盛大を來す迄に、僅かに五十年を經過したるに過ぎないのである、曾て「メッテルニッヒ」が、「伊太利は單に土地の名稱にして、國民の名稱にあらず」と侮つた此の國が、今は實に世界的一大國民を形成し、其の勢力は益々世界の各地に發展しつゝあるのである、邦人たるもの、唯た單に獨逸の發展のみに眩惑せずして、ラテン系統たる此の新興國民に就ても、之れに注目し、之れを研究し之れを參考となす可きである、外國に眩惑するのは、是れ外國崇拜の弊である、我等が外國を研究するのは、外國に眩惑し、外國を崇拜するが爲めではない、列國の形勢を理解して、我等が向上の參考に供せんと欲するに過ぎないのである。

二、伊太利の人口

伊太利の人口は、目下三千六百五十万人(一千九百十三年の數)を算ふるのである、而して此人口は、毎年數十万人つゝ增加して行く。

伊太利人口の增加率に付て之れを檢するのに、一九〇一年乃至一九一〇年には、三・七万人宛增加したのであつたが、一九一一年には少しく降つて、三十五万七千人增加したのである、其の人口の增加率は、歐米の白人種

の何れの國に於けると仝しく、稍や減少の傾向を示して居るけれども、それにしても、尚ほ增加しつゝある事は明かである。

序に茲に歐洲人口增加率の遞減して行く事實を參考に掲けて見れば、實に左の通りである。

人口千人に對する出產率

年度 ＼ 國名	英國及ウエールス	獨逸帝國	佛國	伊太利	墺地利
一八八一年—一八八五年	三三、五	三七、〇	二四、七	三八、〇	三八、二
一八八六年—一八九〇年	三一、四	三六、五	二三、一	三七、五	三七、八
一八九一年—一八九五年	三〇、五	三六、三	二二、三	三六、〇	三七、四
一八九六年—一九〇〇年	二九、三	三六、〇	二一、九	三四、〇	三七、三
一九〇一年—一九〇五年	二八、一	三四、三	二一、二	三二、六	三五、六
一九〇七年	二六、五	三二、三	一九、七	三一、五	三三、八
差	七、二	四、七	五、〇	六、五	四、四

備考　即ち英國が最も甚しいのである、是此英人が之れを憂慮して居る理由である。

此の半世紀間に、伊太利に於ては、其の初め死者の數は、千人に對し三十人であつたものが、近時に至り二十人に減して來た、蓋し是れ伊太利の衛生が進歩した結果である。

伊太利の軍隊では、肺患に罹るものが甚だ少いのであつて、其の比は、千人に對し、一、七三である、然るに佛では六、七二であつて、西班牙では七、三二、英では二、五〇、獨では一、九一である。

伊太利は、又人口の密度が、比較的歐洲中、高ひ國に屬する、即ち、白耳義、和蘭、英國の次に位して居るのであつて、獨逸之れに次ぎ、瑞典、墺匈、佛、丁、蘭の順序となるのである。

伊太利は其の人口の數の点に於て、歐洲諸國中正さに上の下位に居る、今試みに、歐洲諸國の人口の數を擧けて見れば、即ち左の如くである（一九一三年末調）

現在の交戰國		現在の中立國	
英	四六、一八五、〇〇〇	西班牙	二〇、四〇〇、〇〇〇
佛	四〇、〇〇〇、〇〇〇	瑞典	五、六四〇、〇〇〇
露	一七〇、三一〇、〇〇〇	和蘭	六、三一〇、〇〇〇
伊	三六、五〇〇、〇〇〇	羅馬尼	七、六〇〇、〇〇〇
白	七、八〇〇、〇〇〇	希	四、七〇〇、〇〇〇
塞	三、一〇〇、〇〇〇	葡	六、三一〇、〇〇〇
獨	六七、八一、〇〇〇	丁	二、九一〇、〇〇〇
墺匈	五三、一〇〇、〇〇〇	瑞西	三、八四〇、〇〇〇
土耳古	二〇、六〇〇、〇〇〇	那	二、五〇〇、〇〇〇
勃	四、八〇〇、〇〇〇		

如斯に伊太利は其の人口の点に於て、其の未來の發展性を有して居るのである。

三、外國出稼民

甲、出稼民の數及其の職業

近時に於ける伊太利の、政治上及經濟上重要なる一現象は何であるかと問ふものがあつたならば、そは外國出稼が、其の中の重要なるものゝ一であると答ふ可きであろう。

伊太利の出稼問題に關しては、伊太利政治家實務家及學者の研究、常に絶へざる所であつて、其れが爲めに、此の出稼問題研究を目的として知名の學者が、各地特に米國に渡航せる者甚だ多いのである。蓋し米大陸は、實に伊太利出稼民の爲めに最も重要なる勞働場所であるが故である。

然らば伊太利出稼民の數は果して幾干であるかと云ふのに、最近四十年間に、著しい增加率を示して居つて、其の數の最近統計を擧げて見れは、實に左の如くである。

年度	數	備考
一八七八年	九六、〇〇〇	
一八九〇年	三五二、七八二	十二年にして斯く增加した
一九〇六年	七八七、九七七	最高は此年度に在る
一九〇七年	七〇四、六七五	以上遞減し來る
一九〇九年	六二五、六三七	

以上は、最近の統計の示す所であるが、以上表示の如くに、一九〇六年を以て最高となし、漸次に減少の傾向を表はして來た、一九一一年以來の總計は、未だ之れを調へないけれども、比較的減少して居る樣子である、蓋し是れ獨逸の例に於けるが如く、見樣に依りては、伊太利國內の整頓進歩を示して居るものである。

而して此れ等は常に永住的のものであるかと云ふのに、左樣ではなくして、其の出稼民の大部分は、一時的のものに屬し、其の希望する若干の資金を貯ふれば、之れを携て彼等は錦衣歸國するを一般とする、是れ國民主義を持する國民として、其の本國を慕ふは當然な事である、日本では移民が外國に永住せすして、富を得て歸鄉するのを不都合の如く云ふものがあるが、斯る說をなす人こそ甚だ不合理である。

若し又、妻帶者と否とによりて、伊太利出稼民の區別を立てゝ見ると、其の內の八割は、獨身者であつて、殘りの二割が夫婦者又は親子である、獨身者は其の慰安の少き所から、多く一時的渡航者であつて、若干の資金が貯蓄せらるゝか、又は其の仕事の景氣が惡るいと云ふと、本國に歸還するのである、併し乍ら、妻帶者又は家族同伴者たる出稼民に至つては、外國に永住するものが多いのである、蓋し安泰を求むる人情上、自然に然るべきである。

如斯、伊太利に於ては、年々多數の出稼が外國に出る所から、今や海外在住者の數は頗る多數に達して居る、統計によれば、過去四十年の間に於て、一八七一年には、四五五、〇〇〇人なりしものが、一八八一年には、一、〇三二、〇〇〇人となり、一九一二年には、更に增加して、五、五五、七〇〇、〇〇〇人となつたのである、今や伊太利は、世界の中で最も多くの出稼民を出して居る國である。

伊太利人の出稼先は、多くは北米であつた、然し二十世記の初めからは、南亞米利加にも彼等は續々と出掛くるに至つた、之れを統計に徵するに、一八七一年度に於て、亞米利加大陸に於ける、伊太利人は、全出稼人の四割七分四厘を占めて居たに過ぎなかつた、然るに、一八八一年には、五割六分一厘

となり、一九一二年には、八割に達した勢である、之れに由て觀ても、如何に亞米利加方面に、伊太利人が多數移住發展して居るかゞ分るのである、而して又南米に於ては、現在外國に在る伊太利人の、殆ど半數を占めて居る、一九一二年に於ける、大体の出稼人數を、茲に試みに掲げて見れば、左の如くである。

一ブラジル	一、五〇〇、〇〇〇
一アルヂチンン	一、〇〇〇、〇〇〇
一北米(特に合衆國)	一、八〇一、〇〇〇
一亞細亞	一二、〇〇〇
一濠洲	七、〇〇〇
一亞弗利加	一九一、〇〇〇
一歐羅巴	九〇〇、五〇〇
(內譯)	
一佛	四〇〇、〇〇〇
一獨	一八〇、〇〇〇
一端	一六〇、〇〇〇
一墺	八〇、〇〇〇
一歐土耳古	二〇、〇〇〇
一其他	六〇、〇〇〇

今若し、此の四十年間に於ける、增加の率を見るならば、一目にして、其の數五倍となりしを知るなる可く、其の極点は、實に一九〇〇年乃至一九一〇年の時代であつたことが分る、又是の時代に於ける、伊太利の商工業の發達は、著しきものであつたことも、仝時に考慮するを要するのである、即ち伊太利に於ては、人民も貨物も、共に海外又は國外に發展したのである。

伊太利民族は、其地勢の示すが如く、山と海とを有する國民であつて、自然に彼等は冒險的氣質を有して居る、伊太利移民の多き理由は、主として出稼の必要と云ふことにあるけれども、彼等の冒險性も亦其の一である、

何れの國民に就て見ても、山又は海の如何は、其の國民性を好く說明して居るものであつて、伊太利出稼民の五分の四は、獨身者であるのを見ても、此の國民は其の青年に達するや直ちに海外雄飛に志す民族であることが分る、彼等は海外に出でゝ働くのを好むのである、乍然彼等の愛鄕心は頗る强くして、彼等にして、相當の富を得たならば、彼等は錦衣故鄕に歸るのを樂しみとする。是は、愛國的國民として當然の事であるが、歐洲人の中には其の鄕國を憎んで、國外に出るものも尠くはないのである。

伊太利の農夫、或は勞働者は、國內に於ては、其の收益が頗る薄いのである、其れ故に彼等にして、國外に出稼する時は、國內に居つた時よりも、比較的多くの收入を得る事が出來るのである、給料の如きも、伊太利に於ては一般に非常に低廉であり、特に農業に關する賃金の廉いのは非常なものである、加之、中部伊太利は、土地は豪農に兼併せられ、且つ一帶に、山地多く、而して此等の山地地方は岩石多きが爲めに、假令、少し計りの資本及勞力を投じても、收支は到底償はないのである、加之、他面に、伊太利に於ては、年々三十五万計りの人口が增加して行くのであつて、勞力は過剩である、然かも佛國と異り、資本は欠乏して居り、適當に耕すべき土地はないと云ふ有樣である所から、勢ひ伊太利人は、海外に出稼せざるを得ないのである、殊にシシリー島の一部に於ては、土地荒蕪にして、從て其の地方民は、其の鄕國を去らざる可らざる苦況に存在するのであつて、此等は多くは米國に移住するのである。

之れに反して北部の各州、及サルジニヤの出稼民は、多くは歐洲各地に若干期月間の勞働に行くのである、是れ蓋し地理上及職業上の關係然らしむるのであつて、此等は農業以外の職業者が多いのである。

南亞米利加方面への農業的の移民は、多くは一定時より一定時に至る間の出稼者であつて、其の移民期節には多數の農業勞働者が、伊太利の船に依り送り出さるゝのである、然して其の行く先きは、主としてブラジル及アルジェンチン共和國である。

移民の職業別に付て之れを見れば、農業が最大多數であつて、大工之れ

に次ぎ、他は雜業である、而して智能的職業に到つては、實に小數であつて、技師、教師、辯護士、醫師、產婆等を合するも、少數に過ぎない、又繪師、彫刻師、寫眞師の如きも甚少數である、季節的短期の職業に關する出稼民は、歐羅巴に出掛けるのが主である、北部伊太利からは、佛蘭西、獨逸、瑞西、及アドリヤ沿岸に、數ケ月間の職業を求むる爲めに、多數の出稼人が出て行くのである、其の內殊に佛蘭西に行くものは、コニ地方の秘密出版物商人、バルソナの硝子職人、バルダオストの旅硏師、ベリユーヌの椅子職人、ピエモンの大工及土方、ノバルの漆喰職人、マッサ及カララの大理石職人、等である、又ミランの商業使用人、リギュリーの下婢及ホテルの番頭、マギオレ湖地方のカッフェー店のボーイ、(之れは又瑞西にも多く行く)等がある、彫刻小像の小商人は、多くはナポリ人で、又旅音樂者は、大抵カゼルトの人である。

其他種々の一定の職業者があるが、其中でイブレ地方の坑夫は、多くブリーの山間地方に出掛け、又絹職人は、チュリン地方の者である、而して葡萄の盛に出來る地方からは、出稼人は全くない。

アオスト谿谷地方の住民の中には、佛蘭西人の如くに佛語を使用する者があるが、此等の人民は多くは佛蘭西に出稼に行くのである、又ジュネーヴや、ラウザンヌに行くものもある、蓋し此等地方は瑞西の中でも佛語の行はるゝ所であるからである。

以上は、大体職業方面から見たのであるが、若し又男女の性により、出稼人を區別すると、女は大約男の四分の一に該當する、而して季節的職業の大部分は男子の職業である、但しホテルのボーイは別である、併し乍ら、十五歲以下の年齡によりて、男女を比較すると、男よりも女の方が遙に多いのである。

乙、出稼人の本國に齎す効果

出稼人の本國の爲めに齎す効果に關して調へて見ると、種々の点から見て、海外移住と云ふことが、伊太利の爲めに大ひに利益を生じつゝあることは、爭はれない事實である、即ち伊太利は、之れに依りて、其の富を增し、其の文

化を進め、又其の權威を增しつゝあるのである、伊太利財政の救はれたのは全く移民が主たるものである。

之れを箇人箇人に付て云ふと、伊太利の出稼民は、各地各邦に於て、決して大なる成功者とは云はれない、大部分の出稼民は、慘憺たる境遇に在つて、異境の地に放浪し、戀しい其の故郷に歸ることも出來ない有樣に陷つて居るものも甚だ多い、乍然伊太利出稼民にして、其の事業成り、其の本國に歸るとなると、兎も角、多少の資金を貯へて居るのであり、又彼の季節的出稼民に至つては、其の季節が終ると、多大の利益を收めて、伊太利に歸鄕するのである、伊太利の出稼民と、歸國人との比較對照から計算すると、伊太利の出稼民の半數は、貯蓄を得て歸國するものである、其の額は數十億フランに達すと云はれて居る。

出稼民が、幾干ばかり、祖國を濕すかは、兎に角、出稼に行く伊太利北部地方と、出稼をしない北部地方とを、比較して見ると、明白に知らるるのである、伊太利出稼民の本國に齎すものは、唯だ單に資金のみではない、之れが爲めに、秩序、幸福、財產權等に對する、特に進步觀念に對する思想が、非常に增大し、之れが爲めに不良の舊慣を打破するの觀念自ら生し來るのである、其の重なる比較として、一般に云はるゝのは、アオストの北方のヴアルドート地方の村々と、其れに隣接せる村々との比較である、本來瑞西人の方が、伊太利人に比較すると、有福であるのであるが、此地方に於ては、反對の結果を來して居るのである、蓋し其の理由は、此地方のヴアルドート人は、外國に出稼するもの甚だ多いに拘はらず、附近のヴアラサン人は、地方に鎖居して、毫も外國に出ないが爲めである。

社會上、道德上、並に智能上、伊太利の進步は、出稼民によりて增大されて居ると云ふことは過言ではない、殊に伊太利の北部地方に於ては、此事が、著しく判明するのである、伊太利の北部と南部とは著い差があつて仮令無學者でも、北部の人は、外國人に對して親み易く、思想の開けて居るのは、全く出稼の効果である、之れを西班牙人に比較して見ると、西班牙人は、退嬰的であり、迷信的であり、且つ頑固であつて、又外國人を經護する氣風がある、之れ

に反して、伊太利北部、例へばロンバルヂア人の如きは、開放的で、活潑で、且つ親愛的である、此点は仝じ羅典人でも、大部違ふ所である、之れは出稼民が、季節的にもせよ、又比較的に永續的にもせよ、兎に角、外國に出て其の見界の廣ひと云ふことが、一つの原因をなして居ると稱せられて居る。

歐洲の各國人は、伊太利に多く行くけれども、西斑牙に出掛けることは甚た少いのである、蓋し此事は、地理、氣候、及交通、旅舍等の設備の關係もあるが、一つは西斑牙人の性質が面白くないことにも因るとせられて居る。

伊太利人は、蹠食である、從て伊太利人は、何處へ行つても、生活することが出來、又、衣服の如きは、外國に出掛けた方が、寧ろ廉にして美てあるものも得らるゝと信じて居る、然るに西斑牙人になると、之れと全然反對であつて、先づ生れると、其の國、其の土地、其の町、其の家、其の居室を尊ぶのである、尊ぶと云ふよりも、寧ろ彼等は他を恐怖する心からして、現在に變更を加ふることが、彼等にとりては大事件なのである、然かも、彼等は、其の過去の盛大を追慕し、外國を輕蔑すること少々でない所から、益々外國に出つるのを好まなくなるのである、之れが此の國の停滯して居る一つの原因である、又其の殖民地を失つた原因である、之れに反して、伊太利人は、自國が英國、獨逸、佛蘭西に對し、物質上の点に於て、未た及ばぬことを自覺して居る、此の自覺が、即ち今日の伊太利の物質的發展を助けしむる一の原因であるに相違ない、實際伊太利人の未た劣つて居ることは、爭はれない事である。

國民が自ら自國の或る欠点を了解し、外國に比して、或る点に於て及ばざる所あるを知り、之れを補はんとするのは、大切な事である、蓋し自信と自惚とは、同じものではないからである、乍然、古き國には、自ら棄つ可らざる特長がある、好く此の特長を維持し、而して好く其の欠点を補ふの國民にして、初めて眞に偉大なる國民となることが出來るのである、西斑牙の振はさるは如何んせん、此事を能く解し居らぬ爲である、之れに反し英佛獨の偉大なるは、好く此事を解して居る所に生ずる、今の伊太利人には、國民的自覺がある、併し久しく外國人に屈し、尙は未た英佛獨に及はない所のあるのは、其の大國民たるの確信に、從來欠けて居つたが爲めである、今や、伊太利は之れを悟つ

て來た、而して有識者は、頻りに國民の自信を說ひて居るのである、日本國民の如きも、此点に注意せざれば、危い哉と云ふべきである、日本の如き古き且つ完全なる國民と、歐米に於ける新に成れる國民とは、万事比較にはならないのである、日本人が國民的自我自尊を有するは當然である。

出稼と云ふことは、又一面より見れば、一國勢力の平和的擴張とも云ふことが出來る、從て輓近、伊太利人の年々數十万人に達する出稼民は、世界の各地に於て、種々なる点に、重大なる利害關係を生ずるに到つた。而して此の利益の半面には、又種々の、國際間の困難なる事件に遭遇することもあつた。

乍然、伊太利の移民に關する利益は、決して些々たる國際上の困難と比較には無らない、豈に獨り伊太利のみに限らんやで、古來の歷史を詳く調へて見たならば、隨處に吾等は、其の實際を知るのである、其の最も緊切なる實例としては、英國の過去及現在である、又仝しく近時の獨逸に就ても、充分に移民の利益が示されて居るのである、米國の獨逸化の如き其れである。

伊太利の出稼民は、最近稍や沈滯の狀態にある、乍然トリポリや、又人口減少せる西班牙には、大ひに發展をなして居る、又、人種の不統一なる点を以て、國家としての其の重力を疑はれて居る彼の墺匈國にも、又、西比利亞方面に其の自國民の多數を送り出した彼の露國にも、續々として出稼民を出して居る、之れを要するに、伊太利出稼民は、世界の各地に勞働の需要さへ見出せば、直に押し掛けて行くのであつて、此点に於て伊太利出稼民は、各國各地に於て、頗る重大視されて居る、

尙ほ出稼の爲めに、伊太利の航海業が、著しく進歩した事は、出稼民の伊太利に與へたる効果の一つである、例ば一九〇六年には、九十万噸なりしものが、一九一二年には、百三十九万八千噸に昇りしことであつて、正さに是れ五割五分の增加である、此等は、南米に到る伊太利人の爲めに、主として發展したものである、日本でも、亞弗利加や南米に、我國人を主客として、往來する航路の發展せんことを望まざるを得ない、歐洲に大戰酣なれとも、國人に此の機會を捉へるの意氣なきは遺憾である、而して今の日本人は、支那人をのみ經濟上の顧客と定め込んで居る、我國の政治家、經濟家は、餘りに眼界過小なるの

觀がある。

丙、伊太利出稼民の非仝化性

移民の被同化性に付て調へて見ると、獨逸人は、歐洲に於ても亦海外に於ても、最も同化され易い國民であつた、換言すれば、社會的歸化の最も早ひ國民であつた、故に此の社會的歸化の早い國民は、又早く異鄕に於て事業上の成功をなす事が出來る人民である、併し一方、其の移住したる社會に於ける、獨逸國民としての、政治的重力は、從來反比例して居たのである、アロ二州の獨人や、露國の獨人や、北米の獨人やは、此の生ける証據であつた。

英國人は、英語國民たる米人とさへ、遽かに仝化しない國民である、其の他の國語の國民とは、殆んと同化しない人種である、ノルマン人を放逐したのも、此性に基する、神聖仝盟と仝一行動を取らなかつたのも、此の性質である、世界の各地に、自國語のみを以て押通ふそうとして居るのも、此の性の致す所である。

「伊太利出稼民も亦、同化され難き國民の中に數へられて居り、彼等は英國人にも、獨逸人にも、殆ど絶對的に、同化せられずして、又スラヴ種族や、回々教國民にも、仝化されないのである」、伊太利出稼民の、英語或は獨語を使用することを厭忌することは、想像以外であつて、彼等仝士は、英語を理解して居ても、決して之れを用ひないのである、倫動に於ける伊太利人の町を歩ひて見ると、恰も伊太利に行つた樣な心地がせらるゝのである、或る伊太利出稼民が、歸國の途次、米國を旅行し、一切英語を用ひなかつた所が、或る片田舍に於て、偶ま病氣に羅り、其の地方の醫師が、伊太利語を話せなかつたが爲めに、初めは、無言で診斷を受けて居たが、遂に苦痛に堪へ切れずして、流暢なる英語で、容体を述ふたと云ふ話がある。

而し此の伊太利人も、ラテン民族には、同化され易ひ氣質を持つて居る、此事たる、主として人種上の關係と歴史的の關係に外ならないのである、而して、佛語や、イスパニヤ語は、彼等好んで之れを用ひ、又之れを學ぶのは、彼等の爲めに容易である、然し此事は、唯だ單に英獨二語に比較して然りと云ふに過

ない、伊太利出稼民は佛語の國、又はィスパニャ語の國に出稼しても、決して彼等は個々別々には、生活しない、必ず彼等は、全國人仝士團結して、各々相聯絡し、相救助し、出稼民の人數が殖へるに從ひ職業別に依つて、團結を緊切にするのである、而して何處迄も伊太利風なるものを、存在させるのである、彼等の中には、又或る場合には彼等仲間の、酒保、料理屋、雜貨屋、などが出來るのである。

但し外國に於ける、伊太利出稼民は、必ずしも常に、仝じ形式を持つては居らない、乍併、一般的に云へば、彼等は、數個の小團躰を形成し、而して、彼等一個人としては、彼等は重きをなさぬけれども、堅き團体を形成して、之れ依つて一の重力をなすのであり、特に當初より團体的出稼である場合には、一層其の特色を發揮するのである、此の性質は、日本人や支那人のみの性質ではなくして、人類としては斯くあるのが當然である。

北米合衆國に於ては、伊太利出稼民は、大陸の西部及東部の諸都市に於て、多數集團しては居るけれども、全体の人口が多いが爲めに、伊太利出稼人の數は左のみ問題にはならないのである、是に於て彼等は、土着勞働者が、一般に厭忌する職業に向つて一齊に走り、而して斯くして、彼等の威力、彼等の勢力を作くるのである、一般に米人は、歐洲東方移民や、スラヴ移民よりも、伊太利人を好む風がある。

南亞米利加に於ては、彼等の移住は、全然必要なるものと認られ、彼等の地位は、既に動かすべからざる、深き根底を造つて居る、即ち、アルゼンチン共和國に於て、彼等は既に、全人口の六分の一を算へ、農業從事者總人員の實に百分の六十五と云ふ多數を占めて居る、此事のみを以て、既に伊太利出稼民の地位を說明するには、充分である、故に彼等は、從來の西班牙人の勢力を事實に奪ひ取つて、從て又彼等の國語の使用を、擴むることが出來るのである、乍併、舊來の西班牙の勢力は、決して彼等の爲めに一掃し去れない、茲に於て、南米に於ては、自然の勢として、西、伊、兩國語が、行はれつゝあるのである、南米には、此際日本語も、重要なる語となる樣にしたいものである、佛蘭西は自國語を南米に於て、西伊兩國人の間に、普及させようと努めて居る、佛蘭西の植民學

校では、今や西班牙語は青年に奬勵されて居るのである、日本人も亦、西班牙語を學んで彼地に渡り、而して後ち、多數の力に依り、日本語を彼地に擴めると云ふ用意が必要であるかと思はる。

丁、出稼民の出稼方面と其の努力の發展

佛國に到る伊太利出稼民は、多くは期節的出稼民である、佛國が其の御蔭を蒙むる事は、少々ではない、殊に佛領ローレンに於て、佛國人の爲めに、危險と見做せれたる、獨逸移民が、續々仝地に入り込んで來るのに對し、最も重要なる反對重力を形成して居るものは、實に此の伊太利出稼民である、之れあるが爲めに、佛領人たるものは、獨乙移民に對する危惧の心を輕ふするを得とさへ云はれて居る。

實質に於て之れを見るに、ローレン州の大工場に使用せられて居る、半永久的出稼民の中で、最も多いのは、土耳古人及其の附近の人種、並に獨乙、伊太利の両國民である、而して其の中、伊太利人が、最も其の職業上優秀なるものとせられて居る。

方面を換へて、瑞西に於ける、伊太利出稼民の事を調へて見ると、抑も、瑞西は、一定の國語を有せず、國土亦狹少であつて、國際間に何等重大なる勢力あるものとは認められては居ない、乍併、經濟的方面から觀察して、瑞西に於ける經濟上の勢力如何は、其の國自身の經濟上に影響する所、決して少くない、瑞西に於ては、其の用語は、多く佛、獨の二ヶ國語であつて、伊太利語も亦使用されては居るが、南方の一部分である、獨と佛との瑞西に對する實際的關係を比較して見ると、獨乙の方が今日に於ては、深い關係を瑞西に有して居る、然しながら、伊太利出稼民の、此國に於ける非常なる員數から、して、羅典人種の勢力を維持して居る、而して其のラテン人種の、代表的國家は、常に佛國である所から、過去の佛國の勢力は、依然として維持されて居ると稱されて居る、瑞西に於ける過去の佛國の勢力は、本來甚た大なるものであつて、一千八百年の初め迄は、瑞西は佛國の領土であつたのである、其處に最近、獨乙か割り込み來つて、之れが爲めに、次第に佛國の勢力は、縮少されんとした、時に伊太利の

統一後に於ける、伊太利出稼民は、續々と此國に來つて其の數を增した、瑞西に出掛けて行つた伊太利人は、最初は、佛獨何れかの言葉を使用せねばならない、然るに伊太利人は、多年の關係上、佛語を話すことは、其の好む所であるが爲めに、遂に佛語の勢力は、茲に維持せられ、又佛國の勢力も、從つて維持されて居る次第である。

又若し現在の瑞西に於ける、獨乙語の使用せらるゝ範圍内を見るなれば、其の地方は、次第〳〵に瑞西の國家的持質を失ひ、漸次に獨乙化されて行きつつあるを知ることが出來る。

瑞西が其の國内に、獨乙勢力の樹立を許すは、瑞西から見れば、自國の特色を滅却し、國家的自殺行爲に外ならないのであるが、併し小國の悲しさ、如何んともし難ひ事である、ボロギヤ大學教授、「ギオルチオ・デルベチオ」氏は、此事に關し、左の樣な事を唱へて居る、「瑞西の獨乙化さるゝのを防ぐ、唯一最良の方法は、瑞西に於ける文書上の言語として、又學校用の言語として、伊太利語を採用するにあり」と、此の言の如きは、伊太利の爲めには、誠に虫の良い、云ひ草であるが、本來固有の國語なき瑞西には、佛、獨、伊語の行はるゝに至ることは、地勢上、人種上免れ難い事である。

又アドリヤに付て、之れを見るのに、アドリヤ海の東岸に於ける、伊太利出稼は、特種の重要なる地位を占めて居る、古來ヴェニスの移民地たりし、ダルマチア沿岸地方は、嘗ては、全然伊太利語を使用し、伊太利の文明が普及されて居た所であつた、然るに十九世紀になつてから、伊太利人は、スラヴ民族の爲めに、次第々々に此方面に於て壓迫せられ、全地方の町村に於ては、久しく非常に伊太利の勢力を失墜して居たのである、此点は、伊太利人の、スラーヴ人種に對する敗北であつた。

然るに此の十五六年以來、伊太利の地位は、又變化して來た、即ち一千九百年以來、伊太利王國の東方に向つての活動は、頗る目覺ましく、而して墺太利領に於ける、從來の伊太利民族に加ふるに、新に其の出稼民を以てして、伊太利の勢力を、アドリヤの對岸に、着々堅固ならしめんと努めて居り、而して又、一方力を盡して、伊太利人の間に、全伊太利主義の思想を傳播して居る、之れが

爲めに、伊太利語の使用は、漸々此等地方に盛大に趨き、此等地方は着々として、伊太利人の支配を形成せんとし、墺太利は、亦之れに對し、頗る之れを重要視して居り、両者の關係は爾來決して、圓滿ではなく、人民間の衝突は、屢々新聞紙に報道せられた、墺伊の關係を說くに當つては、多く看過され易いアドリヤに於ける、伊太利出稼民なる一問題を挿むは、必要なることである。

斯くして、伊太利の勢力は、昔時の夫れを回復して、東方に擴張されんとし、又一層廣く、南方に擴まらんとして居る、一千九百十二年の、バルカン戰爭が爆發した際には、墨山及アルバニアの諸港は、伊太利人の智能と、伊太利人の資財とに依つて、活動し得たのであつた、即ち此等地方の諸港に入り込みし、伊太利勞働者及設計家は、先づ海上に於ける一切の事業を開發し、經濟上に於て大に活動したのである、將來伊太利が、如何にアルバニアに於て、其の勢力を伸ばすであろうかは、識者の刮目して眺めつゝある所である。

戊、伊太利出稼民と愛國心

伊太利の出稼民は久しい間、恰も日本に於けるか如く、一定の形式なく、各自及び各地方の、自由に放任してあつた、十九世紀の終り頃から、伊太利政府は、移民各自の利益を、犧牲にしても、尙ほ伊太利全体の利益に着目せさる可らずとの見解よりして、種々の法令を制定した、其の目的とする所は、「伊太利主義」なる國民的特質を失はしめず、且つ共同的精神を失はしめさらんとするに在つた、蓋し伊太利の出稼民が、多數になるに從つて、勢ひ外國に於て、其の土地、其の國風に同化せられ、之れが爲めに、祖國を忘れ、母國尊崇の觀念に反くか如き、傾向を生する虞れがあるからである、又本國に歸ることを忘るるが如き非愛國的の人民を生する憂かあつたからである、移民が外國に歸化し外國に同化して仕舞ては、本國の爲めに何等の利益もない事は勿論である。

伊太利政府は、是に於て移民局なる、一特種官廳を新設し、諸地方に其の支廳を置き、別に、統計課を設置した、而して各出稼人は、移民局に對して、旅行免狀を請求し、之れを受取る事を要件とし、而して歸國の際は、又夫れ〳〵手續を履むを要すとしたのである。

移住國の希望を重んじ、原則として、書くこと、及讀むことの不能なる人民等には、旅行免狀は下附せざることに規定されて居る、乍併實際は、此の規定は適用されて居らぬ如くである、即ち統計に從ふと、南米に於ける、全出稼民の約七割は、初等教育すらない下等民である、北米に於ては、無教育者は比較的少數である、蓋し這は、北米では、讀書力の無い勞働者は移住を許されず、又過去に於ては、學者は何れの職業にも、採用されないと、一般に噂されて居たからである、前に述べた樣に、伊太利移民は、一個人としては、毫も勢力は有しないのであるが、伊太利出稼民なる、一集團としては何れの國に於ても、勢力を有して居る、若し夫れ、伊太利出稼民は、中等教育を終つた者が多數を占むる樣になつたならば、其の効果は、蓋し恐るべきものがあるであろう。

又以上の如く、政府は、法令及官廳を設けて、出稼を規律して居るが、民間に於ても、種々の協會が設立せられ、其の協會は、出稼民の事務を取扱つて居る、而して、各會の間には、密接なる關係が結ばれて、互に移民の事を、相研究しつゝある、其の根本目的は、出稼民の爲めに、伊太利出稼民を需要する土地の、諸般の事情、殊に、職業及其の國の缺乏又は要求を調査するに在つて、其方法も、或る時は著書により、又或る時は、講演をなすのである、又一旦外國に出掛けた者には、精神上並に物質上の援助を與へ、又諸種の事情の爲めに、本國に居殘り出稼の出來ない人々の爲には、相當の補助をなすのである、又一方其の從事すべき仕事が、發見せられ得ぬか、又は仕事のある迄遊んで居るに、充分なる貯蓄を有しないか、又は初等教育だも無い人に付ては、成るべく出稼をさせない方針を取つて居る、此等協會の事業は、誠心誠意を以て行はれて居るので、之れが爲めに、外國に於ても、伊太利出稼民は、今日は決して厭忌されて居ないのである。

外國に於て、伊太利移民は、相互の子弟の爲めに學校を建てゝ居るが、其の學校の教育は、母國に對する愛國心を養成するのが、第一の目的となつて居て、其の上、伊太利に關する智識を與へるのを、其の主要目的として居る、又一方出稼民の間には、會合の機會が少い爲め、學校教育によりて、眞の智識的家庭の趣味をも、味はせ樣とするのである、日本に於ける忠君愛國主義が、移民の發

展の爲めに、害をなすから、之れを廢止せしめようと云ふような卑屈な論客は、伊太利人の移民精神に鑑みて、三考四考其の誤りを正す可きである。

此等出稼民の大部分は、從來不統一なりし所より、地方の俗語を語り、完全な伊太利語を話し得る者は、誠に少ないのである、又全然話せない人もあつた、蓋し此等の人は、多く無學者である、之れでは、伊太利の爲めには、利益は尠いのである、北米合衆國に於ては、之れが爲めに、伊太利學校は、隨處に設立せられ、內容又既に完備して居る、乍併、南米殊に、ブラジル及ひアルゼンチンに至つては、未だ斯る完備の域に達せず、又學校の數も少ないのである、而し伊太利朝野の識者は、此の点に注意し、之れが改善に付て、漸次其の歩を進めつゝある、出稼人の爲めに、學校の無いことは、本國との愛國思想的連絡を採る点に於て、重大なる關係を有するのみならず、折角出稼しても、學校のないが爲めに、其の子女の教育の上に、心を苦しめ、大ひに其の當初の意氣を衰へさせ、遂には、其の事業を捨てゝ、歸國するに到るものがある、斯る人にして、若し其の地に留るとしたならば、勢ひ外國人の學校に、其の子弟を入れねばならない、乍然斯くすれば、本國なる觀念は、如何にして、子弟に之れを吹込むことが出來ようか、祖國觀念を失つた移民は、本國に利益なく、畢竟其れ丈け祖國の損失である、其れ故に伊太利が、此の点に付て、苦心慘憺して居るのは、適當の事であり、又賢明なるものと、云ふべきである、桑港に於て、曾て米國人の學校に日本人を入れて呉れなかつた事は、却つて日本人の幸であつて、斯る事に付て米國と爭ひ、終に哇布在住日本人の轉航禁止を甘諾した如きは、確かに愚策と云ふものである、當時の當局も過つて居るが、海外海內の日本人も亦過つて居たのである。

伊太利移民の、國粹觀念を維持するが爲めに、移民協會及ひ、其他の有志は法律上に、重要なる改革を行はんと企てた、即ち外國に移住したる伊太利人は、伊太利の國籍を失はずして、尙ほ其の移住國の國籍を取得せんとすることである、此の案は國籍法の一般主義に合はぬ所から、遂に政府の認むる所とならなかつたが、未成年者には、二重國籍を認め、成年に達して後自由に國籍を擇むの權を認め、又外國に於て、外國の國籍を取得したる者も、歸國さへすれ

ば、直ちに再び容易に、伊太利國籍を取得し得る事を認めた。

外國に住む、伊太利人は、最近、益〻其の團結心を鞏固にし、數多の大團体を形成して居る、而して、種々本國の爲めに、又彼等相互の爲めに各々働いて居る、乍然、伊太利の學者中には、伊太利の移民に付て、悲觀的な事を云つて居るものもある、彼等は曰ふのに、南米に行つて居る伊太利人は、多くは無學文盲の徒であつて、且つ其の生活も、實に慘怛たるものであり、尙ほ不規律千萬にも、彼等は其の鬚や、頭髪を伸ばした儘に、放任して置き、伊太利の國威を損すること甚しと云つて居るのである、併し此等は、要するに、愚なる体裁論である、又或る學者は、之れに附加して云ふには、伊太利人は南米に於て其の人數の多いにも拘らず、何等の勢力なく、何等の特權をも主張し得ない、洵に意氣地なきものであると、憤慨し、且つ外國殊に、アルゼンチンに行つて居る、伊太利人の兒童は、其の本國を知らず、自ら得々として、自分はアルゼンチン人であると、公言して居るが如き有樣であり、又日常の言葉も、アルゼンチンの國語を使用し、極端なものになると、伊太利倶樂部内に於て、アルゼンチン語、即西班牙語を常用して居るのである、而して、アルゼンチン政府は、餘りに彼等を好遇しては居らない、否な彼等の法律上の對遇は、甚た酷遇と云つて、宜い位である、是れ實に伊太利民族の爲めに、悲歎す可きことであると述べて居る、伊太利の有識者から見又其の國民主義から見たならば、實に其の言理ありである、伊太利移民に、祖國觀念を吹き込み、伊太利人の品位を向上せしめんと、努めて居る、伊太利の朝野は、實に我國に於ける、外國崇拜の不見識の徒の爲めに、好手の鑑みである、我が移民問題を論じようと云ふ人は、須く先つ伊太利の移民觀念を研究す可しである。

癸、出稼民と外交問題

出稼民は、大なる利益を、伊太利の爲めに齎すけれども、又一方には、伊太利と諸外國との間に、時としては、困難なる外交問題を惹起すこともある。

地中海沿岸に於ては、チュニス問題に關して、伊太利は、佛國と、先づ衝突した、二國は之れに關しては、條約を締結して、両國政事上の問題は、一先づ落着した

けれども、經濟上の複雜な問題に至つては、尙ほ殘つて居るのである、現在、チユニスには、十四万人の伊太利人が居住して居る、其の大部分は、耕作者又は農業勞働者である、之れに反して、佛國は僅かに四万人の自國人を有するに過ぎない、然かも、其の四万人の內の大部分は、官公吏である、而して、此の多數の伊太利人の住するチユニスは、明確に佛國の殖民地となつて居る、乍然伊太利が、チユニスを占領する能はざりしは、一千八百七十八年に於ける、伯林會議に於て、伊國全權の外交拙劣であつた結果であつて、如何んともし難いのである、彼のビスマルクの願使に甘んじた、クリスピーは、チユニスに付て、述へて曰く、「チユニスとは、佛國兵によりて保護せられたる、伊太利の殖民地である」と、一寸其の文句は、面白ひけれども、乍然是れ負け惜みたるに過ぎないのである、伊太利は、一九〇二年に、モロッコ占領の代償として、佛國から、トリポリの占領を承認せられた、斯くして問題は解決した、トリポリの占領は、佛國に採つても亦有利であつた、蓋し之れが爲めに、シシリー島、及カプレラ島の出稼民は、從前チユニスに出掛けたものであるが、爾來トリポリに移住する樣になり、之れが爲めに、競爭者の數を減少せしめ、所謂「伊太利禍」を免るゝ事が出來たからである。

土耳古に於ける伊太利人の出稼、及トリポリ、並に多島海地方への出稼は、一九〇八年に至り、一の爭議問題を惹起した。

又瑞西に對しては、例のイルレタンチズムの主張をなすことからして、種々の問題を惹起さしめた事もある。

之れを經濟上から見ても、質樸にして、節儉なる伊太利勞働者は、外國に於て特に手工業者に對しては、恐るべき競爭者である、是故に、國に依つては、其國人は、大に伊太利移民に對して、反抗を試み、時としては、政府が之れに力を貸す事もあるのである。

最近の實例としては、北米合衆國、ブラジル、及ひアルゼンチンに對して、爭議が持あがつた事がある、アルゼンチンの如きは、健康及衛生上の規定を、遵守しないと云ふ理由に基ひて、一時、伊太利移民の入國を拒絕した、但し間も無く爭議も無事解決した、蓋し若し、伊太利出稼民が、アルゼンチンに入國せな

いとなると、アルゼンチン自身が困難するからである。

伊太利人自身も亦、出稼民に關しては、尙一層面倒な規則が、設けらるゝとも差支へないと云つて居るし、又、若し北米合衆國が、伊太利人の入國を拒絶することありとも、伊太利人は少しも困らないと云ふことを、多數の伊太利人は、公表して居るのである、併し斯る事實は未だ生じない。

兎も角、徒らに、國際間の問題を惹き起しては、次第〳〵に伊太利出稼民の行き場が困難となるに到る所からして、伊太利は切實に殖民地の必要を感じて來た、其處に少くとも、一部分の民を移住させると云ふことは、伊太利發展の自然の勢ひ上、已むを得ない事である、遂に伊太利は、トリポリに手を伸ばしたのである、國際間の問題は、單純に個人道德の理論のみでは、解決困難にて、一國の自存が主要である、一國は其內の數千萬人の生活の爲め、必要なる場合には、外國の利益を害しても、斷して之れを行はさるを得ない、若し之れを不可としたならば、自然の恩惠に依る、人口增加率の多い國家は、人民過剩の爲めに非常なる苦境に陷り、天の惠福を享け得さるに至るのである、世界の各地に於ける、人類の數の公平なる分布と云ふ事は、世界を一般に文化に導かしむる所以であつて、人口の多き國は、天より此の使命を受けたるものと云つて好いのである、是故に、多大の明地を占領して之れを獨占し、他の國民の、之れか開發を妨けるのに對しては、人口の多き國は、斷して其の不法の排斥を排斥して、進む可きものである、這は暴慾ではなくして、開發の理想である、日本は伊太利と共に、此の理想の現顯をなす可き、天命を受けて居る國家である、先年我か國外交の當局が、所謂紳士的約束と云ふものを米國と締結して、日本人の米國移住を自ら制限し、加之、既に入り込める國民の爲めに何等の保障をも得なかつたのは、此の天職を忘れたる、自屈の行爲であつた。

第二部　伊太利の外交政策

四、伊太利の統一

一、概論

伊太利の統一は、伊太利國民の國民的元氣の復活と、外國の援助とに依つて成つたものである、即ち他力と自力との結合して成れる結果である。

國民思想の普及增大に重大なる關係のあつた彼の佛國革命や、又彼の奈翁一世の統一的戰爭やは、伊太利人の爲めに「祖國」なる觀念を起さしめたる遠因であつた、然かも此の觀念を伊太利に實顯せしむるが爲めには、外國の援助が必要であつた、而して統一に憧憬せる此の伊太利民族を、先づ最初に助けたものは、實に全く佛國であつて、次ぎに彼れを援けたものは、即ち普國である、伊太利人は此の二國の爲めに、援助せられ、墺太利人を伊太利より逐ひ、之れが爲めに、伊太利に於ける墺太利領土は、著しく減殺せられたのであつた、

併しながら、若し伊太利人の統一的輿論が、不斷に堅實に繼續されて居なかつたならば、又若し其の効果を收むるに充分なる計畫が、不斷に確實に運らされて居なかつたならば、彼の如き迅速と一致とを以て、統一の大業は出來なかつたのであろう。

勿論奈翁三世の援助に付ては、伊國人たるものは、其の國の存續する限り、永遠に忘る可らざるものである、是れ確かに奈翁三世が維那條約、即其の叔父大奈翁の事業を覆へした條約を、其の力に依つて伊太利の爲めに破壞したものである。

之れを奈翁三世以前の、伊太利の事情に付て見るのに、彼の佛蘭西の七月革命の報、一度び伊太利に傳はるや、伊太利半島に於ける數箇の小獨立國は、其の影響を受けんことを虞れ、國王は各々其の全力を盡して、之れを防遏せんとし、之れが爲めに、日も尙足らざる有樣であつた。

續いて彼の有名なる、一八四八年の二月革命は起り、其の伊太利に及ぼせる反動は、仲々に大きかつた、之れより伊太利人は、益々其國民主義を確持する

に至り、伊太利統一運動は、益々其の努力を増し、遂に佛國に援けられて、墺太利軍と、ソルフェリノ、及マゲンタに於て、伊太利人は佛人と共に墺國人に對して惡戰苦鬪した、佛のナポレオン三世は、本來伊太利より墺太利人を驅逐し、伊太利に聯邦を形成せしめ、自己は此の聯邦の上に勢力を握らんと欲したのであつて、プロシヤは之れに反し、羅典民族が益々相結合するは、汎獨主義の爲めに、頗る不利なりとし、佛の墺太利に對する援助を悅はなかつた、乍然、勢ひ既に熟したる伊太利統一の運動は、如斯小妨害に會して止まる可くもあらず、遂にビルフランカに於ける、奈翁三世と、墺帝フランツ・ヨセフとの仮條約に依て、縱令其の結果は伊太利の爲めには、不滿足であつたにせよ、之れが爲めに統一の端緒を得、此の仮條約は、ヅーリッヒ條約に依り確定した、此平和條約は、連盟國たる伊太利を出し拔き、單獨講和をなしたものである、延て伊太利人の爲めに、充分の滿足を與へず、反て奈翁三世は、伊太利人の反感を買ふた、乍併本來此の條約は、奈翁三世か佛國の爲めに政策を基礎としたものである、故に統一の爲めに功勞あり、且衆望あるサルジニヤ王を伊太利の盟主とはせずして、羅馬法王を以て其の統一を圖らしむるにあつた、サルジニヤの宿望は、即ち水泡に歸した、茲に於てか、統一を其の生命として働ける、カブール伯は憤慨の餘り、直に其の職を辭した、乍然、伊太利統一の國民的精神は、之れが爲めに毫も挫けなかつた、奈翁の援助に依賴せる伊太利統一の事業が、奈翁の意見により、佛國の利益を主眼として、不完全なる統一に終つたのは、國際政策の見地より已むを得ない事である、此事に關し、伊太利人以外の國民にして、奈翁の不正を罵るのは、罵るものゝ誤りである。

本來奈翁三世は、其の叔父大奈翁の如くに、自ら伊太利半島の盟主たらんとする決心を有して居たものである、自國の隣りに漫然大强國を作り、之れをして佛國の爲めに、危險物たらしむるが如き、至愚なる奈翁ではない、彼れの計畫は、佛國の爲めに、決して不可ではなかつた、乍然、彼れが其の計策を、意の如くに實顯せしめ得なかつたのは、彼れの失策である、乍併、此戰に依つて、佛はサヴォア及ニースを得た。

又墺太利は、伊太利なる一大獨立國の成立よりも、佛伊聯合なる、一大强力の

隣接地方に實顯するのを寧ろ怖れたのである、是故に墺國は、速に佛國と握手するを利益と考へたのであつた、寧ろ是れ賢である。

一八六六年に到つて、所謂七週戰爭が始まつた、其の結果、偉人ビスマルクの指揮せる、普魯西國の大勝となり、老大國墺太利は、全然敗北した、其の間に於て、伊太利は、ビスマルクに誘はれ、ベネチヤを伊太利に回復せんが爲めに、普魯西と同盟し、而して伊太利は、クストッツア及リッサに於て、海陸共に墺軍の爲めに破れたけれ共、奈翁三世の干渉と、且つビスマルクの注意深き周旋とに依り、其の目的を達することが出來た、此際にも、伊太利人は、普國に賣られ、單獨講和の締結となつたけれども、伊太利人は、普國に同情するに到り、爾來久しく伊太利人に對して、眞實の同情を持つて居た佛國民に對しては、反つて野心ある危險なる隣人の如くに眺めた、共に國民的統一を欲するの民として、伊、普両國人が、全氣相倚るは自然の趨勢である、乍然、伊太利人は、未だ決して奈翁三世を棄てたのではなかつた、佛伊二國は普佛戰爭の中ば迄、親善であつたのである。

一八七〇年乃至七十一年の普佛戰役に際し、佛兵は兼て其の守備せる、羅馬を引き揚げたるに乘じ、伊太利人は、巧みに之れを占領して、名實共に茲に伊太利は、全然統一が成つたのである、乍然、尙ほ依然として、伊太利人の間には、イルレダンチズムの說は、唱道せられ、其の希望は益々大となつて來た、此の時代より伊佛は、其の利害の衝突より反目するに至り、殊にチュニス問題を以て、全然仇敵國たるに至つたのである。

之れより先き、一八六九年に、墺太利、佛蘭西及伊太利は、三國同盟を形成せんとした事がある、此の同盟の言議の進行しつゝある間に、其の年は暮れて、佛の忘る可らざる、一八七〇年の新春は來た、年初此の相談は將さに纏らんとした、此の新三國同盟の條項の重なるものは、即、佛の羅馬徹兵、及伊の國境擴張であつて、殊にトランタンの割讓は、注目すべき一であつた。

乍然、佛國巴里のチュイルリー王宮に於ける、舊敎僧侶の勢力は、當時甚た熾んなるものがあつて、殊に皇后ユーヂェーヌの如きは、熱心なる信徒であつたが爲めに、佛兵の羅馬徹退に關しては、極力之れに反對した、茲に於てか同盟

の談は行き惱んだ。

普佛戰役の結果は、當時の佛國陸軍の日頃の不整備から、佛の大敗北に終り、其の間、伊太利は確實に羅馬を占領した、乍然、之れより佛國と反目するに至れる伊太利は、終にトランタンを占領することを得なかつた、奈翁は其後年、確かに其の政策を誤まつたのである、而して伊太利も亦之れか爲めに、其の目的の全部を達するを得なかつた、壠を得て蜀を望むは、何れの國に於ても然り、伊太利は最近、ダルマチヤ、クロアチヤ、アルバニア、トランタン等の領土を回復せんと欲し、這回の大戰爭前既に全地に於ける伊太利人は、此の運動を起しつつあつた、今や伊太利の外務大臣は、アルバニアの一角に其の兵を出し、之を伊太利の手に占領するのを「伊太利の傳說的政策」だと揚言して居る、伊太利人か、アドリアの海岸に於て、其のイルレダンチズムを實顯せしめんとする希望は、國民として甚だ多とす可きものがある、伊太利人が、クリスピー時代の如くに、西に向つて、コルシカや、サヴオアを窺ふよりも、東に動ひて、アドリヤの沿岸を領有した方が、伊太利の傳說に合し、國防上、經濟上、利益の著大なることは、識者の言を俟たずとも明白である、而して伊太利の未來の大統一は、斯くして完ふせらるゝのである。

二、伊太利統一の歷史

今少し詳しく伊太利統一の歷史に付て述へて見ると、實に左の如くである。

甲、伊太利統一の國民的精神

一千八百四十八年二月、ネープルス、及シヽリーに革命を興し、其の影響は羅馬にも及んだ、此の革命は、疑もなく佛國革命の餘波であつて、全歐洲の人民に、自由平等友愛を愛好する觀念擴充したる結果である、而して、此革命の叫は墺國々內に於ても亦揚けられたのであつた、是に於て此機會を利用してサルジニヤの王シャルヽ・エンマニユエルは、革命派を煽動し、革名派國民の盟主となり、仝年三月墺國に對して、伊太利統一を名として開戰するに至つた、洵に機宜を得たるの處置と云ふ可きである、斯くして伊太利統一の精神は

現實的に國民の間に固く結はれたのである。

當時の佛國政府は如何なる態度であつたかと云ふのに、伊太利の統一は、佛國の爲めに危險也として、此事を欲しなかつたのである、乍併、佛國々内にも仝しく革命起り、佛國政府は伊太利の統一的革命に對しては、干渉し得なかつたのである。是れ一千八百二十三年の西班牙に於ける革命壓服に從事した時代と、大ひに其の趨を異にして居た所である。

當時の墺國は固より伊太利の統一を允す可き國柄ではなかつた、是に於てか、則ち墺國は兵を進めて伊太利の革命軍を討伐し、サルジニャは之れが爲めに容易に屈服し、遂に伊太利の革命運動は仝く平定せらるゝに至つたのである。伊太利の革命は、斯くして不成功に終つた、乍併、既に發芽したる統一の精神は、之が爲めに決して亡ひなかつたのである。

乙、カブールのクミリヤ戰爭利用政策

クリミヤ戰爭は、英佛對露國の權力爭に基げるものであつて、サルヂニヤの爲めには何等の利害關係あるものではなかつた、但し一千八百四十八年サルヂニヤが、墺國に對して開戰したりし際、露國は當時墺國の爲めに好意を表して居つたが爲めに、露とサルヂニヤとは、之れより以來、其の外交關係斷絶せられて居つたのである。

英佛二國は、クリミヤ戰爭に關し、身方の力を强大にし、露國を壓服するが爲めに、墺國を身方に引き入れんとしたけれども、墺國は巧みに形勢を觀望して、容易に英佛の誘ふに應しなかつた、是に於てか、英佛は墺國の全然敵手たるサルヂニヤに對して、同盟に加入せんことを勸め、斯くして以て墺國をして急遽、英佛側に左袒せしめんとするの政策を採つた、即ち英佛のサルヂニヤを誘へるは、全く英佛の爲めに此の小國を利用せんとしたのである。

此事件に關し、サルヂニヤに於ては、英佛に與みするのを以て、頗る冒險的にしてサルヂニヤの爲に甚しく危險也と云ふ說を唱ふるものがあつた、而して若し英佛に身方して、出兵するとするならは、少くも初めより、ロンバルジーをサルヂニヤに併合するの保証を英佛より得て、然る後に英佛に同盟す可し

と云ふものがあつた、洵に是れ適當なる意見と云ふ可きである、然るに、カブールは此等の意見を排斥し、唯だ單純に英國に身方し、先つ此の二大國の仝情を買ひ置くの必要なるを唱へ、若しサルヂニヤにして此際此の同盟加入を躊躇し、其間に若し墺國にして、英佛に同盟し、英佛をして墺國の現狀維持を確約せしむるが如きことあつたならば、サルヂニヤの爲めに永久の不利益也と稱して、急遽英佛の勸言に應し、唯だ英國に於て伊太利の公債引受を諾せられん事のみを條件として、終にクリミヤ戰爭に參加するに至つた、當時カブールは其の戰費の支給を英佛より無償に仰かずして、英國に於て伊太利の軍事公債を募集したのであつて、其の主旨は英佛の傭兵たらざらんことを欲したのであると云はれて居るけれども、冷靜に評すれば、是れ寧ろ無用の遠慮と評す可く、或は彼れカブールの外交は、未だ眞に巧みならずして、唯だ單に英佛の爲めに、巧みに利用せられたものとも云ひ得るのである、

カブールの此の政策は、一時英佛兩國政府の同情を買ひ得たるは事實である、然し乍ら、クリミヤ戰爭の終局に於ける巴里會議に於ては、唯だ單に英佛大使の口舌上の仝情を得たに止つて、サルヂニヤの爲めに、何等現實上の利益を得る所なかつた事は、爭ふ可らざる事實である、世人は往々にして唯だ弱者に對する同情の点より、或は英人の利己的贊辞を其の儘傳唱して、カブールの此の政策を以て、用意の周到なる對外政策の如くに贊歎するものがあるけれども、結局他國の利益の爲めに、無辜の國民を犧牲に供して戰ふ如き外交政策は、外交政策と云ふ見地より之れを觀れば、決して巧妙なるものと云ひて大ひに賞贊することは出來ないのである、

丙、サルヂニヤと佛國との同盟

奈翁三世は、維那條約を廢棄せんとし、本來國民主義を持する政治家であり、且つ野心滿々として、少しでも佛國の領土を擴め、佛國の名譽を顯揚せんと努めたる政治家であつた、是故に伊太利人の爲めに伊太利の統一運動を援助し、其の間に乘し、伊太利より墺國の勢力を排除し、佛國の勢力を深く伊太利の內部に建立せんことを欲したのであつた、

一千八百五十八年一月十四日、奈翁三世は皇后と共に遇ま巴里のオペラ觀劇に趨かんとし、途中奈翁一世の會せしが如くに、三名の伊太利人の爲めに爆彈を投せられたことかあつた、此等伊太利人の斯る暴舉に出でたる主旨を討ぬるに、蓋し、奈翁三世が、法皇の爲めに、革命黨員をローマより遂ひ出したるを不當として、奈翁を殺害せんとしたのである、彼等は其の目的を達せずして拘へられ、獄に投せられた、然るに彼等は奈翁三世に一書を捧げ、其の愛國的思意を述べ、伊太利人の爲めに、伊太利を救はんことを奈翁三世に哀願した、奈翁三世も、亦凡庸人にはあらず、此の機會を善用し、彼れ深く此の書に感したりとなし、之れより愈々伊太利を援助するの意を固ふしたと傳へられて居る、然らば此の暗殺者は、多數の伊太利人を犧牲とせるカブールよりも、寧ろ佛國皇帝を動せるの点に於て、功績のあつたものだとも云ひ得る。

是に於て奈翁三世は其の志を達せんとし、先づカブールを招き、彼れと密かに佛國のブロンビエール温泉場に會見し、同盟條約を結ひ、密かに左の如きことを約束した。

一、佛國はサルヂニヤを助けて墺軍を伊太利より驅逐す可し

二、開戰の期日は佛國に一任す可し

三、伊太利はサルヂニヤ、ネープルス、ダスカニー、及法皇領の四國聯邦を形成し、サルヂニヤはロンバルヂーを併合す可し

四、佛國は援助の報酬として、アルプスに於ける自然の國境を畫定す可し

但し此等諸項中、佛國の併合す可き地方に關し、サヴオアに付ては、何等の異議はなかつたけれども、ニースは志士ガリバルヂーの生國たる所より、カブールは之れに對し、初めは不全意を唱へたと云ふ事である、然かも後ちには此地を終に佛國に割き、「余は佛國と共犯也」と迄云つたのである。

此の同盟に由つて、伊太利統一の事は、初めて其の曙光を認め得たのである、カブールは此の同盟を締結したる後、歸途、獨逸のバーデンに立ち寄り、當時、來遊中の普國攝政ウヰルヘルム親王に會見し、其の際サルヂニヤにして若し墺國と開戰することあるも、普國は墺國を助くることなしとの事を確めて、彼れは其の意を安んした、蓋し這は普國の態度としては當然の事である。

カブールは其の任務を果して、サルヂニヤに歸り來り、志士ガリバルヂーと會見し、彼れに對し、佛國と同盟の事成れるを語り、彼を激勵した、乍併、ガリバルヂーの鄕國は、終に佛國に割かさる可らさるに至れる事に付ては、未だガリバルヂーには明白に告けなかつたと云ふ事である、此事に付てはカブールニ對するよりも、ガリバルチーに對して全情なからざるを得ない。

一千八百五十九年一月三十日、奈翁三世の從弟ナポレオン、ジェロームと、ヴ＊クトルエンマンエル二世の王女クロチルドとは結婚式を擧げ、佛英兩國の皇室は益々親近し、此事は歐洲諸國の國民をして、其の耳を聳てしめたのであつた、而してブロンビエール會見の事は、自然廣く世に洩るゝに至り、之れが爲めに歐洲の天地は、濃き戰雲を以て滿さるゝに至つたのである。

墺國は之れを知つて大ひに狼狽した、此間、英國は墺國の爲めに調停を試み、佛帝も亦英國の調停に對して、成る可く平和解決を告けんことを欲する旨を英國に答へた、英は卽ち露國を誘ふて公然調停を試みんと欲したけれども、露國はクリミヤ戰爭時に於ける墺國の態度に不滿にして、爾來大ひに佛國に親近し來り、英の誘引を受けたれども之れに應じなかつた、然れども英は益々調停の歩を進めた、佛帝は英の調停若し功を奏して、墺國の爲めに利益の解決あるが如き事出來せば、佛國の爲めに不利となし、密かに露國を誘ふて、露をして事件を列國會議に附せしむるの意見を各國の間に提出せしめた、而して奈翁三世は該會議に際し、巧みに墺國を失敗めしめ、英の提案を挫き、自己の兼ての目的を達せんことを計畫したのであつた、彼れは、一千八百五十六年の巴里公會の大成功に鑑み、到國公會に於ける成功の自信を有して居たのである、當時の英國は、佛國の餘りに權威を振ふに至らんことを虞れ、曾て全情せる伊太利には全情せすして、却つて其の敵たる墺國に全情して居たのである、卽ちカブールのクリミヤ戰爭參加政策は、英に對しては、實際何等の効果をも奏しなかつたのであつた。

列國會議說は將さに成立せんとした、然るに墺國は、事の當さに成らんとするに際し、サルヂニヤを會議より除かんことを主張した、カブールは之に對し、斯る會議說の不當なるを唱へ、之れを排斥した、之れが爲めに墺伊二國

の關係は之れより愈〻切迫し來つた。

英國は列國會議を開くに先ち、三國共に其の動員を舊に復せんことを主張した、佛國は之れに應し、サルヂニヤも亦佛國の勸告に從つて、之れに應した、然るに墺國政府は、佛伊の國力判斷を誤り、且つ先きに伊太利の革命黨を鎮壓し得たるに氣傲り、加ふるに英國の仝情と、獨乙聯邦の後援ある可きを信し、進んで開戰の手段に出で、最後通牒をサルヂニヤに送り、三日以内にサルヂニヤの軍隊を平時の情態に復し、伊太利人の義勇兵を解散せしむ可きことを要求した、英は之れを見て驚きたりしも、佛とサルヂニヤとは、寧ろ此の要求を手にして密かに欣喜した。

カブールは、三日を經過したる後、徐ろに拒絶書を墺國に送り、開戰の責任は、墺國に在ることを告げた、今や墺國の外交は極めて拙劣にして、自ら好んで奈翁の欲するが儘に動いて居るのである。

事既に茲に至る、是に於てか佛國は、四月二十六日維那駐劄の佛國公使を召喚し、若し墺軍にして、チヽノ河を渡ることあらば、佛國は此事實を以て、墺國の佛國に對する宣戰と見做す可きことを宣言した、然るに墺國は四月二十八日サルヂニヤに對して宣戰し、二十九日其の兵をして、チヽノ河を渡らしめた、是に於て佛國は、五月三日を以て、墺國に對して宣戰し、「佛國は伊太利を伊太利人の手に復歸せしめんとする」ものなる旨を天下に聲明した、伊太利人は之れを聞いて欣喜雀躍せざるを得なかつたのである。

丁、奈翁三世の單獨講和と統一の頓挫

佛砂の同盟軍は其の總兵力十五万にして、墺の兵は二十万であつた、奈翁三世は親ら軍に將として出征し、先づ墺軍をマゲンタに破り、佛軍は初めより光輝ある大勝利を博した、佛軍は先きにクリミヤに露軍に勝ち、今は又古來、勇兵と云はるゝ墺軍を破り、世人をして過去に於ける佛國の强兵を追想せしめた、伊太利の統一は最早確實疑ふきに至つたのである。

然るに奈翁三世は、トスカーヌ、モデーヌ、パルム、並に法王領が、皆共にサルヂニヤ王の王權の下に統一せられんとするの形勢あるを目擊し、斯くてはブロ

ンビエールに於ける會見の主意に反し、佛國の目的は之れを達する能はざるを惟ひ、且つ露國はポーランドの統馭の爲めに、伊太利人の國民主義を喜ばず、又英國は其の競爭國たる佛國の成功を嫉視し、尙ほ普國政府は、墺國の勢力失墜は、聯邦の爲めに危險なりと稱して、其の邊境警備の爲めに、動員せるを以て、此等の情況に鑑み、戰爭を繼續するは、佛國の爲めに不利なる可き事を慮り、ソルフェリノの大勝利を段落として、平和を締結せんと欲した、蓋し奈翁三世としては、佛國の自衛の爲めに適當の見解であつた。

一千八百五十九年七月七日、奈翁三世はサルヂニヤに謀る所なく、單獨墺國軍と休戰を約し、仝月十一日墺國皇帝とヴィールフランカに會見し、終に單獨仮平和條約を締結した、此條約の要旨は實に左の如くである。

一　墺國はロンバルヂーを佛國に讓與し、佛國は之れを伊太利に讓與す

二　法皇を名譽首長とする伊太利聯邦を形成せしむ可し

三　ヴェニシヤは依然之れを墺國領となし、而して之れを伊太利聯邦の一に加へしむ可し

四　モデーヌ及トスカーヌは、之れを其の舊君主に還附す可し

サルヂニヤは斯くしてロンバルヂーを併合する事を得て、ブロンビエール會見の主旨は茲に達せられしと雖、奈翁が當初開戰に際し宣言したる、「伊太利人はアドリヤ海に至る迄領有せさる可らす」との言の實行せられざりし所より、カブール初め伊太利人は、大ひに奈翁三世の爲せる所に不平であつた、カブールは講和の議に參せず、總理としての面目を潰された、即ち彼れは直ちに其の職を辞するの已むを得さるに至つた、十一月に至り、ヴーリツヒに於て、三國の間に本條約は締結せられた、即ち佛墺間、佛砂間、及墺砂間に三箇の條約は締結せられたのである、斯くして伊太利人の爲めに、伊太利全土の統一は成らなかつたけれども、奈翁の初志は斯くして到達せられ、サルヂニヤも亦其の兼て望める大なる領土を得たのである、此際に於ける奈翁三世の對外政策は、全然佛國本位である、然るにサルヂニヤは小國なる所より、初めより佛國に依賴して、其の對墺的行動を起したのである、夫故に政策としては奈翁の專恣的行動は當然であつて、サルヂニヤが此の一戰によつて、全伊太

利を豫期以上に迄統一し得なかつた事も亦當然の事である、此件に關し情を以てカブールに全情し、情を以て奈翁を識るのは、多く世人の爲す所であるけれとも、第三國人としては公平な見解とは云ひ難いのである、蓋し外交は自主を本領とするからである。

戊、伊太利王國の建設

ヅーリッヒの條約、現に存在せるに拘はらず、モデーヌ、パルム、及トスカーヌの三地方は、各々自らサルヂニヤに併合せられん事を宣言した、是れ實に伊人自覺の勢である、奈翁三世は此事に關しては、列國會議に依つて、此の問題を解決せんことを欲した、列國も亦之れに全意した、然るに奈翁は列國會議に先ち、密かに其の腹心の人に旨を授けて、「法皇と列國會議」なる一書を無名を以て世に公にせしめ、其の中に、モデーヌ及トスカーヌを其の舊君主に還附するの困難なるを說き、且つ法皇は其の領域を縮少するに由つて、寧ろ其の自由を保持するを得可き所以なりと論し、暗に伊太利の統一に贊同し、先の宣言を修正するの意を洩したりしを以て、列國は、「列國會議に於て、佛國は該著書に示さるゝが如き意見を提出する事ある可きか」を佛國に對つて問ひ、之れに對し、佛國は斯ることある可きを答へたるか爲めに、墺國は廢王の爲めに不利に歸す可き列國會議に列席するを欲しないと稱して、會議の開催を拒み、列國會議の事は之れが爲めに終に無期延期となつた、蓋し奈翁の意思は、斯くして伊太利人の歡心を買ひ、之れをして佛國に親近せしめ、伊太利人をして獨り英國にのみ賴るか如きと勿らしめんと欲したのであつた、奈翁は本來伊太利の爲めに全情者である、夫故に伊太利の不平を緩和せんと欲したのも、情の上にも至當なことである、是故に此場合に於ける奈翁の變心を嘲るのは、適當なる批評とは云へないのである、奈翁は初めより、モデーヌ及トスカーヌ公等が、武力に依り、其君位に復することには反對したのであつた。

カブールは一千八百六十年一月を以て再ひ首相の位に復した、而してカブールは、中部伊太利をサルヂニヤに併合することは、人民の意思に基くものにして、是れ既成の事實也と主張し、奈翁の全意を求め之れを得た、英も亦直ち

に之れに全意した、是に於て中部伊太利の小國は、投票に依つてサルヂニヤとの合併を決議し、サルヂニヤ王は之れを承認せらるゝことゝなり、四月二日北伊太利新王國の第一回議會を、チュリンに召集せらるゝに至つた、是れ既に統一の大半は成つたものである、而して之れに關しても、奈翁の全情は、其の要件であつたのである。

三月二十四日、サルヂニヤはニース及サヴァアを佛國に割讓するの條約を締結した、是れ奈翁三世が中部伊太利の併合事件を承認したるに對する報酬であつて、茲に奈翁の素志は到達せられ、プロンビエール會見の約束は、斯くして遂に果されたのである、公平に批評する時は、是れ正さに佛國外交の勝利であつた、此地方の人民は、即ち投票を以て、佛國への併合を議決した、乍併ガリバルヂーは、其の故郷の地を失ひ、大ひに之れを不快とした、ガリバルヂーの爲めに誰れか全情なきものぞ。

當時英國は、佛國の利益を得たるを嫉視し、露國を誘ふて、佛國に反對しようと試みた、けれども、露國は爾來佛國と親近して英國の提言に與せず、英は如何ともすることを得なかつた、是れ英國の失敗である。

一千八百六十年四月、シヽリーに於て遇ま反乱が起つた、ガリバルヂーは即ち千餘名の同士を率ひて之れが討伐に向つた、此際カブールは勿論之れを知つて居つた、乍併、彼れを阻止せず、而して事若し成らざれば、ガリバルヂー一箇の責任となし、事若し成功せば、伊太利統一に便せんと欲したのであつた、カブールは常にガリバルヂーをして、犬馬の勞に服せしめて居たのである、ガリバルヂーは容易にシヽリーを平定し了つた、而して勢に乘し、ネープルスに迄進擊せんとした、カブールは此事態の容易ならざるを察し、國王をして一書をガリバルヂーに送らしめ、列國の物議を招かさらんが爲めに、ネープルスの侵入を思ひ止らんことをガリバルヂーに告けしめた、然るにガリバルヂーは、既にネープルスの人民と約束せる所あるを以て、此の企畫は中止する能はさるも、事若し成功の曙は、國王に權力を奉呈す可きことを以てした、而してガリバルヂーは其侵擊を斷行し、ネープルスを占領した、而してガリバルヂーは、更らに其の兵を進めて、法皇領地にも入らんとした、カブール

は之れを見て、佛國の干渉の至らんことを憂へた、而して奈翁三世の意思を探り、奈翁はサルヂニヤが寧ろ自ら進んで、法皇領を占領するを可となすものなるを知り、サルヂニヤの兵を出して法皇領を占領せしむることとした、カブールは確かにガリバルヂーの行動の妨害者である、其の志は共に國に存するけれども、兎に角ガリバルチーの爲めに冷酷なる友人であつた、カブールは法皇領の占領に付ては、其の口實として、法皇領に於ける、雇外國兵の存在は伊太利の安寧を害するものなるが故に、之れを解放す可しと云ふに在つて、法皇の之れを拒絶するや、直ちに其兵を法皇領内に侵入せしめ、ローマを以て、首府とせんとしたのである。

露國は此の處置を見て憤つた、而して之れよりサルヂニヤと外交關係を斷つに至つた、乍併、英國はサルヂニヤに仝情した。

十一月七日、サルヂニヤ王は自ら進んでネープルスに這入つた、是に於てガリバルヂーはサルヂニヤ王と會見し、尙ほ一年間ネープルスの總督たらんことを王に向つて乞ふた、然るに王は前約に從ひ且つ秩序に害ありとして之れを拒絶した、是に於て伊太利統一の功績者ガリバルチーは一切の名譽を拋擲して、一農夫となり、カプレラ島に退隱するに至つた、其の心事や洵に憐れむ可きである、然れども彼れの功は永久に不滅である。

一千八百六十一年、南北及中部の伊太利代議士は、チューリンに集り、サルヂニヤ王ビクトル・エンマニエルを以て伊太利王と呼ふことを決議し、是に初めて伊太利王國なるもの再建せられ、伊太利の統一は畧ほ成つた、而して仝年を以てカブールも亦逝ひた、カブールの事業は、ビスマルクの事業と異り、常に他力主義であつた、偉大なる光彩の輝はないけれども、然かも彼れ亦伊太利の統一を成就せしめたる一偉人たるを失はないのである。

癸、普伊兩國の同盟及普國の單獨講和

ビスマルクは北獨逸聯邦を建設せんと欲し、其の墺國を征討するに先ちて先づ墺國多年の仇敵たる、伊太利と同盟を締結するの必要なるを認めた、是に於て彼れは、一千八百六十六年四月八日、二國の間に左の如き條約を締結し

た。

一、普伊二國の間には同盟の關係存在す

二、若し普國にして、聯邦制改革の爲めに兵力に訴ふる場合には、伊太利王は普國よりの通知に接するや否や、墺國に向つて宣戰す可し

三、普伊二國は相互の同意なくして、講和又は休戰すること、なかる可し

四、三月以内に戰爭起らざる時は、本條約は無効とす

普伊の同盟に付ても、歴史の示す所に依れば、奈翁三世の仝意を要件としたものであつた、即ち伊太利が後ちにヴェニシヤを併合するに至れることに付ても、佛國皇帝の仝意を要したのである。

普墺の愈々開戰するに至るや、伊太利も亦仝盟の義務に從つて墺國と開戰した、普國は此戰に於て、一戰直に墺國兵に多大の損害を與へたにも拘はらず、伊太利軍は海陸共に不幸にして墺軍の爲めに敗北したのであつた。

普墺の戰は七週間にして全く結了した、ビスマルクは其の間、墺國の反抗と佛國の干渉を受くることを危險となし、急遽墺國と講和を締結し伊太利をして毫も講和談判に參加せしむる所なかつた、乍併ビスマルクは約の如く、伊太利の爲めに、ヴェネシヤを併合せしめた、即ち伊太利は、戰爭には敗北したけれども、仝盟の効果と、佛帝の援助とに依り、多年望めるヴェネシヤを此際に回復したのであつた、乍併此際トリエストは、尚ほ墺國の領土として墺國の手に留められた。

庚、羅馬府の占領

伊太利は、普佛戰爭の初期迄は、佛國に仝情して居つた、然るに八月六日、マクマホンの兵、普軍の爲めに大敗するや、機を見て聯合中立の案を作つて、全然佛國を見棄てた、而して奈翁三世のセダンニ降服するや、此の機會を利用して、佛國並に法王の手より羅馬を奪はんと欲し、九月六日、在巴理の伊國公使ニグラをして、佛國に對し、「伊國はローマに關し、最早現狀を維持する能はず」と聲明せしめた、伊太利は機を捉ふるには極めて敏であつた、乍併之れか一の原因となつて、全然佛國と敵視するに至つたのである、七日、伊國外相は、

「ローマの現情は伊太利の平和を害するか故に、伊太利は之れを占領するの必要あり」との旨を列國に宣言した、而して羅馬政廳に對しても、「羅馬と共に法王の領土を占領す可し」と通告するに至つた、當時の佛國政府は、伊太利の後援を得んとして、伊國政府の首府をローマに遷すことを承認した、去れど羅馬政府は、伊太利政府の通告に反對した、是に於て伊太利政府は、兵力を以てローマを占領す可きことを以て法王廳を脅かし、且つ實際兵を進めた、全政廳は已むなく之れに屈服し、法王は恰も伊太利の虜の如くになつた、是に於て伊太利王國は、爾來羅馬を以て、伊太利の首府となす事となり、伊太利全土は全く統一せらるゝに至つたのである。

五、伊太利の亞弗利加に於ける失敗と英獨佛露

伊太利は其の初め對亞弗利加關係に於ては、全然ビスマルクの爲めに翻弄せられたものであつた、クリスピーの時代は勿論の事、其以前に於ても初めから、ビスマルクの狡獪なる政策に載せられたものである。

一千八百七十八年、伯林會議の際、ビスマルクは、佛と伊とをして、向後永く相ひ反目せしめ、獨乙は此間に漁夫の利を攫まんとして、先づ最初に、伊太利の全權委員に對して、伊太利と古き歴史的關係あり、且つ現に伊太利の深き利害關係を有するチユニスを、伊太利に併合せん事を勸告した、然るに當時の伊太利の全權委員は、當時伊太利に斯る野心もなく、從つて準備もなかつた所から、極めて單純に之れを拒絶して仕舞つた、是れ既に伊太利が比公に翻弄せられたものである。

ビスマルクは、是に於て直ちに之れを佛國全權に向つて捧けた、佛國全權は喜んで之れが後日の占領を承諾した、比公の計畧は即ち其の圖に當り、後年佛國が愈〻チユニスを占領するに至るや否や、伊太利人は此計畫の張本人たる比公を怒らすして、却つて其の恩人國たる佛國を怨み、終にビスマルクに載せられて、堅く佛と爭ひ、深く獨と親しむに至つた。

伊太利は獨墺と親しんだ、而して伊太利は英國にも援けられて、愈〻亞弗

利加に於て、チユニスに代へたる他の領土を得んと焦慮するに至つた、伊太利の眼は先つ紅海の邊りに注かれた、之れより先き紅海の邊りに於けるアサブ灣には、未だスエヅ運河の開通せさる以前より、伊太利人の一拓植會社が設立せられ、航海に從事し、其の會社は次第に土地を得、其の權力を着々擴張して居つた、伊太利の政府は之れに着目し、一千八百八十二年、政府自ら此會社の權利を讓り受け、此地に伊太利發展の根據を作つた、而して伊太利は益々侵畧主義を發輝し、英國の承認を得て、一千八百八十五年には、マツスーアを占領するに至つた、此事に付ては、土耳古も埃及も、又アビシニヤも、之れに抗議し、佛國も亦治外法權問題に付て、大ひに邪魔を入れたのであつたが、結局伊太利は之れを占領して仕舞つた、此点は伊太利の成功とも云ひ得可きものであつた。

然るに伊太利は、獨英の後援に乘して、更らに進んでアビシニヤを保護國とし、是所に其の權力を樹立せんとした、然るに此事は全然失敗するに至つた、一千八百八十九年、伊太利は、アビシニヤに內亂起り、王位相續の爭より、前王の子メネリックが伊太利の保護を得んとしたるに乘し、伊太利はアビシニヤと一種の保護條約を締結した、之れを世にウッチャリ條約と呼ふのである、此條約に依れば、全國外交の事は、伊太利を經由して行はる可きものと定められたのであつた、然るに其の土語を以て認めた條約文には、輕く「伊太利政府を經由することを得」とあるに止まり、必すしも經由せさる可らすとは認められなかつたのであつた、斯く條約文の意味が土語のものと伊語のものとに依り異る所から、アビシニヤ國王は、其の地位の確實になるに從つて伊太利を排斥するの志を起し、伊太利を介せすして王位に登れる事柄を、列國に直接通告するに至つた、是に於てか、伊太利とアビシニヤとは反目衝突するに至つた。

此間、英獨は依然として伊太利に全情し、グリスビーは亦相變らず、强硬政畧を採つた、然るに露佛の二國は、英獨に反對の地位に在り、且つ共に伊太利を喜ばさる所から、アビシニヤを密かに助けた、其れ故にアビシニヤには、兵器も軍隊も充分に準備せられてあつた、伊太利軍は終にアビシニヤ軍と衝突

し、孤軍万里救援至らざるの地に在りて、アドゥアに於て、アビシニヤ軍の爲めに擊たれて大敗し、之れが爲めに伊太利は二万の兵を失ひ、アビシニヤは之れより全然獨立するに至り、伊太利は折角得たる其の保護權を失つて仕舞つた、實に是れ伊太利の爲めに大なる損失であつた。

伊太利は斯くしてアビシニヤに於ける政治上の根據を失つた、乍併英國は連りに伊太利に仝情し伊太利の爲めに、アビシニヤに於て、商業上及礦業上の利益を獲得せしめたのであつた、英國は當時は常に伊太利に仝情し三國仝盟側に立つて居たものであつて、アサブを伊太利が完全に占領するに至つたのも、實に英國が埃及に說き、其の抗議を徹退せしめたからであつた、當時英國が伊太利に仝情せるは、露と好からず、又佛と反目しつゝあつたが爲めであつて、從つて英國は三國仝盟と甚た親近したる形を示して居つたのであるが、英と佛露とが協商するに至つた後ちに於ても、英と伊とは親善關係を離れなかつたのであつて、伊太利は其の海岸の防禦を、英國に托せんとするの希望を持つて居たものである、蓋し伊太利は英を敵としては其の國防不可能であつたからである。

五、伊太利と佛蘭西との關係

此題目は、伊太利を說かんとする者の、一樣に見逃す可らざる題目である、伊太利建國の歷史、及其以前の歷史は、一として、佛國と密接なる關係に存在せざるものはない、又若し、最近十數年の歐洲外交史を繙いて見るならば、隨所に両者の興味ある關係が存在するのである、両國の激しき反目の熄んで以來、資金の關係に於ては、伊太利は佛の尠からざる援助を受け、政治上に於ては両者の接近は、佛に對する三國同盟の危險を和げて居た、貿易關係に於ても亦、両國貿易は双方に多大の利益を供して居つた。

一八九六年、即ちクリスピーの政界を去つて以來、伊佛間の關係は、大ひに接近し來つた、即ち一八九六年には、チュニス問題及航海問題に關する第一回の協商が成立し、一八九八年には、伊太利側の提唱に基き、通商に關する重要の協約が調印され、一九〇二年には、モロッコ及トリポリに關する、政治的條約が締

結せられ、一九〇四年には經濟上の條約が成立し、仝年デルカッセ、ルーピエー、リュザッチ氏の間に、財政上に關する協力の案が議せられたが、遂に實行さるゝに至らなかつた、又一九百〇六年には、佛蘭西銀行をして伊太利の國債を引受けしむるの命令が、佛國政府から發せられた。

斯樣な有樣であるから、兩國間の感情は、頗る友愛的であつた、殊に伊太利の方面に於ける、親佛熱は、昂まつた、而して、一千九百〇九年に催された、「マゲンタ」、及「ソルフェリノ」、戰役の五十年紀念祭の祭には、佛伊兩國民は、互に親交友愛の意を表し、往時を追懷し、佛國なかりせば、彼の伊太利統一の大事業は、到底出來なかつたことを、深く〻〻伊人に感せしめたのである、又伊太利側は巴里の大新聞及名ある雜誌の代表者を招待して、伊太利觀光をなさしめた彼等到る所に大歡迎を受け、双方の好感は恰も同盟國民であるかの如き觀があつた、又伊太利の好感を刺激したのは、伊土戰役に際して、伊太利の行動に關し、自己の同盟國たる、獨墺の新聞雜誌が、攻擊を逞ふしたが爲めに、伊太利人たるもの、怒らざるを得なかつたので、其の反動は益〻親佛熱を昂め、從來親獨主義たりし人でさへも、親佛主義に傾ひたのである。

斯の如き傾向であるから、トリポリ事件の際に於ける、伊太利人の親佛熱は大ひに騰まつた、乍併佛國人の方では、未だ夫れ程にも、親伊說は盛んに發表されなかつた、蓋し如斯なる所以のものは、一方は現に、一の實際的事件に遭遇して、困難を感じて居る場合であるのに、他は何等特殊現實の大問題に遭遇したのでは無く、既定の一事實として濟して居たからである、乍去、兎に角、兩國々民間の同情は、伊太利メッシナに於ける、大震災の時と、一九一〇年の佛國洪水の時とに於て、充分に表証され、又其の度を一層高めたのである、「メッシナ」の震災のありし折の、世界の同情は、頗る大なるものであつたが、就中、佛國の同情は列國の群を拔ひて、目覺ましいものであつた、唯た單に其の義捐金の額の、莫大であつたことのみではなく、上下擧つて晝夜種々の仕事に從事して、伊太利人の爲めに働いたものである、伊太利も、忘恩の國民では決して無い、即ち一九一〇年の、有名なる佛國セーヌ河の洪水の時には、巴里市街迄も、下町は大半水に浸つた、勿論、其の損害は、人命に付ても、亦財產に付ても、到底メッ

シナの比では無かつた、夫れにも拘らず、伊太利では直に義捐金の大募集を始め、又義捐演藝會は、隨所に催され、大小の學校職員學生は、夫れ〳〵出金して、一樣に温い同情を、物質的に、無形的に、佛人に對して表はした、又特に、伊太利國王陛下が、義捐金中の最高の額を支出せられたのは、佛國人上下をして感激せしめたこと少々では無かつた、當時の事件に關して、大ひに盡力せる、カブリエル・ダンスンチョ氏は、左の如き挨拶を佛國に爲した。

「我々に最も近接せると云ふよりは、寧ろ最も親愛なる佛國に對し、敬意を表す、今日悲慘なる災害を蒙りたる佛國に對し、云々」と。

伊太利人が、佛國人に對する友愛の度は伊太利政府の政策の如何ではなくして、實に一般人民の輿論である、例の有名なる、マルセイエーズは、佛國の國歌であるが、此の國歌が伊太利人によりて、常に喜んで歌はれ、又好んで唱へられて居ることは、佛國夫れ自身に於けるよりも、比較的盛んであることを見ても、其の全情の一端が知らるゝ、唯に此の歌が面白いとか、或は音調が好いとか云ふ理由のみではないものゝ樣である、而して又、伊太利人の宴會の席上に於ける國旗は、伊太利國旗に次いでは、常に佛蘭西國旗が、多數であると云ふことも注意すべきである。

又佛國の旅行者が、伊太利に來て、若し佛國人だと云ふことが知れると、愉快な調子で、急に優遇するのが普通てあると唱へられて居る、此れ等は、伊太利を知る者には、一般に知れ渡つたことではあるが、此の一事を以ても、伊太利人が、佛獨の何れに對し、戰前己に好感を以て居たかが分る。

又左の樣な話がある、或る伊太利の素樸な老爺が、或る獨逸人と、話して居たが獨逸人は、爺さんに問ふのに、一体貴君は獨逸の同盟國民だから、當然獨逸が好きだろーねと、云つた處が、爺さんは頗る眞面目で、同盟國、そは洵に結構だが、併し自分の好きなのは、佛國である、何故と云へば、パンを我々に供給するものは佛國であるから、と答へたと云ふ事である。

然し乍ら、佛伊両國間の、親密なる同情も、両國人の間に、少しく等差が存在して居る、伊太利の方では、一般に各階級を通じて、親佛熱が盛んであるが、佛國の方では、智識階級の人達に、親伊熱が熾んであつて、一般には、伊太利人を稍や輕

蔑して居る樣な風も見へる、佛人と云ふものは、自國程文明な國はないと云ふ自信が强く、從つて他國民を心中には侮つて居る風がある。

今日の佛伊の友情も過去には三ッの大障害に遭遇したものである、其の先づ第一は、佛國內の宗敎的熱狂者の感情である、此れ等熱狂者は、自分等の宗敎の最高支配權を有する、羅馬法王の領地を、伊太利が佛國兵の不在に乘じて、沒收して仕舞つたことに對して、大ひに憤を有して、兎や角と、伊太利との親交には故障を付けんとして居たのである、第二の障害は、伊太利氣風なるものが、一部人士に好まれて居ない事である、尤も伊太利氣風は、瑞西でも、獨逸でも、白耳義でも、決して好かれては居ないが、特に佛蘭西の一部には毛嫌ひされて居る、特に勞働者仲間には最も多く嫌がられて居る樣子である、勞働者なる者は、大抵は飲酒に耽り、浪費を爲し、一度酒興に乘ずれば、數日の給金も一夜で盡して仕舞ふものであるが、佛人の言に由ると、佛蘭西の勞働者は特に此の風がある、之れに反して、伊太利勞働者は、貯蓄の爲めに出稼するのであるから、誠に勤儉である、之れが爲めに、兩者の氣風及利害の合はぬのは當然のことである、而して勤儉なる勞働者の當然の性質として、仕事に精勤である、之れが爲めに雇主から見れば、伊太利勞働者を重寶がる、是に於てか伊太利出稼人は佛國の多數勞働者から、危險なる競爭者として嫉視さるゝは已むを得ないことである、第三の障害は實に例の獨墺伊の三國同盟であつた、乍併、今日は伊太利は協商側に同盟して、戰を開ひたから、此点は除かれたが、戰爭前迄は、伊太利は政治上の見地から、一般佛人より國として深く信賴し得る友達とは、思はれて居なかつたのである。

右の內、第一のものは、政敎分離の今日となつては、重きを置くには足らずして、夙に佛人の識者も、之を唱へて居る、第三は今日は旣に問題とならぬ、第二の原因に到つては、稍や重要なるものである、伊太利の生存の或る部分を占めて居る所の、伊太利出稼民の性質上のものである、併し、若し此の善良なる性質が無いなれば、伊太利の出稼民は、意味をなさない、出稼民が其の國勞働者から排斥を受くるは、當然の事であつて、之れを巧みに解決して行く事が政治家の任務である、日本の外務省の、曾てのやり方の樣に、對者の云ふ儘

に引き下つて來るのは、國家を本位としたやり方ではない、米人に紳士と賞められた我國の當局者は、我國勞働者の顏を踏み、其利益を剝いた人であつた、之れを全体より見ても、伊太利人が、佛國人に對する同情は、佛國人が伊太利人に對する同情よりは、大である、それには種々原因もあるのであるが、伊太利人の佛國に來る者は、其の數頗る多く、其の大多數が、生活上の爲めである所からして、非常に佛國に賴よるのである、之れに反して佛國人は伊太利には左程多數は出掛けない、又出掛けて行つても、伊太利人に依つて衣食するが爲めに、行く者は殆どなく、其の多くは、有福者が、伊太利見物の爲めの旅行である、從て佛人の伊太利に對する觀念と、伊太利人の佛國人に對する觀念とは、自ら差が存するのである、一は生活の爲め又は研究の爲めである、他は嬉樂又は浪費の爲めである、伊太利人が佛人を重要視し、佛人が伊太利人を差のみ尊敬せさるは、當然である、是れが兩者の仝情に厚薄の差を生せしむる所以である。

伊太利人と佛人とは、常に必すしも親和し得ると云ふものではない、乍併、二者に利害の共通あり、同情あり、思想觀念の似寄つた所のあるは爭ひ得ない。

此の兩國人は前述の如く、巧妙なるビスマルクの政策の爲めに、一時は全く反目するに至つた、(此事は伊太利と三國同盟との關係の所に述へてある)乍併、此の反目もクリスピー去り、ビスマルク逝ひてより、漸く緩和せられ、佛の「デルカッセ」と、伊の「リユザッチ」とは、相呼應して伊佛の親近を顧念し、二國は終にモロッコ及トリポリの問題に關して協度を遂げ、伊佛の協商なるもの茲に始めて成立した、而して此の協商關係の堅實なることは、アルジェシラス會議の際、伊太利の仝權によりて、明白に天下に表明せられた、然るに第二バルカン戰爭の中葉後に至り、伊國人は再ひ佛國に對して、反對の態度を取り來り、兩國の新聞は時々論戰を試みたが、佛國の新聞は常に堂々の言辭を構へて、佛國は伊太利に對し、好意を示すに於て何等變ることなきに拘はらず、伊太利が佛國に反感を示すは不心得なりと唱へ、之れより伊太利新聞の論調は、漸く柔くに至つた、蓋し當時伊太利は既にトリポリを占領し了りて、伊佛協商の目的を達し、再び墺獨と結合を堅ふして、佛露同盟に對抗するに至つたからである、乍

併伊太利は墺國とはアドヤリ沿岸の問題に關し、土耳古とは小亞細亞沿岸島嶼の問題に關し、全然親和し難き關係に居つた、茲に於てか、這回の戰爭開始せらるゝや、伊太利は墺國を見棄てゝ中立し、彼終に英佛に身方して墺土に宣戰するに至つた、故に今日に於ける伊太利は、實に佛國の同盟國であつて、從前久しく採り來れる反佛的態度とは、全然反對の姿勢に存するのである。

獨逸人種の歐洲に於ける總數は、各國を通して實に一億以上に達するのである、是故に向後此の大勢力ある獨逸に對抗するか爲めには、佛伊の如き重なる羅典人種の結合は、當然の必要となつて來る、佛伊の結合は、恐ぐ戰後に於ても繼續することであろうと思はるゝ、今の獨逸にはビスマルクの如き天才的外交家なく、而して伊太利にはクリスピーの如き所謂天才的愚人は居ないのである、（ヴァランタンド、ゴルロフの「露佛同盟の根原」に此の字句あり）、若し歐洲に、獨逸、羅典、スラーヴの三大人種を基礎とする競爭團が、新に產れ來つて、此の三大民族を基本として、各々其の特長を發輝したならば、歐洲の文明は更に興味ある發達をなすことであろうと思はるゝ。

六、伊太利と三國仝盟

伊太利が、獨墺と仝盟するに至りし所以のものは、二箇の重なる理田がある、即ち其の一は、一千八百七十年の戰爭に際し、伊太利は佛國が羅馬法皇の守護者たる佛兵を羅馬から引揚げたるに乘じ、之れを占領したが爲めに、佛人の不快を買ひたるに對し、孤獨の危險を感したることと、其二は、佛國が伊太利人の比較的多數居住し、且つ羅馬時代以來の歷史的關係あるチュニスを占領したりしが爲めに、伊太利人が佛國の此の行動を憎みたることゝの二原因である、伊太利は若し冷靜に判斷すれば、當時必すしも獨墺と仝盟して自國を防禦するの必要はなかつたのである、何んとなれば、佛國は羅馬府の占領を承認して居り、此事に關しては、伊太利を敵とする迄には至つて居らなかつたからである、伊太利は、畢竟比公の巧妙なる外交に乘せられたのであり、伊太利は之れか爲めに、ビスマルクに哀願して仝盟するに至つたのである、チュニスを佛國に與へて、伊佛をして反目せしむる事が、抑も比公の政策であつた。

伊太利は其の舊誼ある佛を嫉視して、獨と新に深く接近せんことを欲した、比公は即ち伊太利に對して、若し伊太利にして、獨と結はんことを欲するならば、墺國と親近するを要すとなし、「伯林に來らんと欲せば、先づ維那を通して來れ」とは、當時比公の伊太利人に對して喝へた巧妙な言辞であつた、伊太利は此の通りになした、蓋し縱令伊太利と獨逸と仝盟するとも、伊太利にして、依然墺國と反目るすに於ては、獨逸の爲めに危險であるからである。

伊太利は、獨墺と仝盟したが爲めに、多大なる軍備の負担を受け負はされ、多年之れが爲めに、伊太利は財政窮乏した、而して又佛國からは、之れが爲めに其の資本を引き拔かれ、且つ伊太利の佛國に輸入せられたる物品に對して、重税を課せらるゝに至り、伊太利は經濟上に大なる打擊を受け、其の貿易は遽かに半減した、之れのみならず、伊太利は、アビシニヤ問題に付て、密かに露國の爲めに妨害せられ、アドワに大敗し、終に全くアビシニヤを失ふに至つた、（スラッドのハプスブルグ王國第二七四頁）、唯た英國の援助に依り、辛ふして經濟上の利益をアビシニヤに保持することを得た、（ド、ランナー黑き歐洲參照）

伊太利は獨墺と仝盟せるが爲めに斯くも多大なる損害を蒙つたのであつた、極端に此の政策を執つた所の、クリスピーは、確かに伊太利の爲めに、愚なる政治家であつたと云はざるを得ない。

乍併、其の以後、伊太利の經濟社界は、獨逸から援けられた、三國仝盟の利益は、纔かに之れあるに過ぎないと云つても好いのである。

本來ビスマルクは、伊太利との仝盟を以て、重要なるものとは考へて居なかつた、此事はビスマルクが、伊太利は獨佛事あるの時、「一名の伊太利下士が、伊太利の國旗を持し、其の側に太鼓を置き、西方即ち佛國に向つて對すれば足る」と云つたので明白である、（ビュー！ロー公著獨逸の政策中、伊太利に關する政策參照）伊太利がビスマルクの爲めに翻弄せられて居たこと、察するに難くない、其の後、伊太利は、引續き三國同盟の一員であつた、乍併、一九〇二年に、佛と協商してから、漸く獨逸と離れ來つた。

一千九百六年に、アルヂェシラスの會議の際、伊太利の仝權、ヴ#スコンチ、ヴェノスタ侯は、佛蘭西の提案に贊成して、一千九百二年の伊佛協商を墨守した、是れ佛

人の當時大ひに伊太利を德とした所である。（國際政策雜誌中、エルネスト、レモノン氏の伊太利と佛蘭西參照）、乍併、此事に關して、獨人特にビューロー公の如きは、之れを否認し、伊太利は枝葉の小問題に付て、佛國に好意を表したのであつて、伊太利は決して獨逸と離れんことを欲したものではないと、辨護して居る（ビューロー公の前著參照）、去り乍ら、此辨解は、正直なる自白とは認められないことは、全じクビューロー公が、ボヘ二州合併問題の事を述ぶるに當つて、此時こそは、三國同盟は確實なることを世界に示したと云へる詞に依つても察せらるゝのである。

ボヘ二州合併問題の際には、伊太利は、無條件には贊成しなかつた、伊太利は伊太利に對して、之れが交換問題として、トリポリの占領を承認せんことを要求し、且つ墺國がノウ#バザールより撤兵せんことを以てした、此事は、英人ステッドの、其の著「ハプスブルグ王國」中に明記して居る所である。

其の後バルカン戰爭の中葉以後、伊太利はアルバニヤ問題に付て、三國同盟を利用し、墺國と歩調を一にした、乍併伊太利は、之れに由つて、墺太利をして、アルバニヤに於ける伊太利の權利利益を確實に認めしめた。

近來に至り特に伊太利は、益々其の地位を高め來り、全然獨墺の願使に甘んせず、而して這回の戰爭發生するに至り、主我的に自已の地歩を維持し、墺國の塞耳比亞に對する積極的態度は、三國同盟の主旨に反するものなりと稱して、冷然として同盟國の外に立ち、暫くにして、終に墺に宣戰し、伊墺同盟を破壞して終つた、蓋し伊太利は、其の政治上、社界上、人種關係上の、自然の地位に立ち戻つたものと云ふ可きである。

七、伊太利の東方政策

甲、伊太利の東方政策一般

一千九百年以前には、伊太利の進出目標は、甚た曖昧の觀があつた、否な事ろ其の敵として睨んで居た方角は主として、西邊即ち佛國のコルシカやサヴァア及ニースであつた、然るに一千九百一年以來、伊太利の外交的着眼は、全然

東方及東南方に轉せられた、即ちアドリヤ海及其の南方々面である、一千九百一年現王ヴィクトルエンマニユエル三世の伊太利に君臨せられてより、伊太利の政策は變化し來り、從來其の敵視したる、佛蘭西とは親近するに至つた、而して又スラーヴ人種及希臘人とも親和するに至つたのである。

伊太利の國論が、スラーヴ人種と親しむ事を、其の國是となすに至つたのは、伊太利人及スラーヴ人の爲めに共同の敵たる獨逸人をバルカン及アドリヤ沿岸より排斥して、アドリヤ沿岸に、伊太利の利益を収めんとするに在つた、而して伊太利人の其の初め最も親近したるスラーヴ人は、即ちセルビヤ人種であつた、此故に伊太利は、墺國の利益に反對して、露塞二國を連結せしめんとしたる、彼のダニユーブアドリヤ間の鐵道敷設案に贊成し、一千九百十一年七月、土耳古は此の建設權を認むることゝなり、伊太利と露西亞とは、之れより握手し、接近の端緒を開くに至つたのである。

其の後、伊太利は、其の東南方進出の方策を實行して先つトリポリを占領するや、伊太利は其の海軍を以て土耳古領たる多島海の重要の島嶼、ロード及スポラードノ二島並に其他の島嶼を占領した、此の二大島嶼には、多年多數の希臘人が居住して居るのである、之れが爲めに、希臘人は伊太利人の此の占領を大ひに歡迎し、救ひの神の降臨の如くに考へた、伊太利も亦、巧みに希人の歡心を買はんとして、占領後間もなく、此等の島嶼に土工を起して、道路を修理し、電燈を点し、希臘の古代の紀念物に對しては、之れが保全の方法を取つた、之れより二國民の感情は甚た良好となつた。

此の行動は勿論墺國人の爲めには喜ばれなかつた、蓋し是れ伊太利人とスラーヴ族との連結に依つて、墺國多年の政策たるサロニカ南下の途を障かるゝからである、當時墺國新聞の如きは、伊太利人を以て無慮慮にも、海賊と呼び、國讎と呼んだものである、乍併、獨逸は、伊太利を三國同盟より失ふの危險なるを慮り、餘りに伊太利を攻擊せず、其の爲すが儘に委したのであつた。

伊太利は斯くの如く、一時塞耳比亞や、露西亞や、希臘と接近して、而して墺國と反目した、乍併、バルカン戰爭に於て、土耳古が同盟軍の爲めに、痛く敗北するや、其の態度は又一變して來た。

伊太利人が、先つ希臘人と感情阻隔するに至つた所以のものは、實にロード、スポラート二島の問題に因するのである、蓋し希臘人は、此二島が、古へ希臘國人の領有する所なりしより、土耳古に對して宣戰したるに乘し、之れを希臘國に併合せんと欲したのである、然るに伊太利人は、伊土戰爭以來、引續き之を占領して離ず、且つ島民に對して、伊太利の國旗を揭揚す可きことを命したが爲めに、希臘人は其目的を達する能はさるを怒り、却つて伊太利人を嫉視するに至つたのである、是れ二者反目の一の原因である、尙ほ他の重要なる原因がある、其れは希臘が、土耳古に宣戰して勝てるに乘し、希人がヴ′ロナを占領し、且つオトラント運河の東岸をも、占領せんと欲したりしに對し、伊太利人は、是れ伊太利の國是に反し、伊太利の爲めに、アドリヤ防禦の政策上危險なりと稱して、之れに反對した事であつた、又伊太利は三國同盟に對する態度を復舊し、墺國とアバニヤに協商し、アルバニヤの共同保護を約し、新進氣鋭の塞希兩國をして、アルバニヤに進出せしめさる可しとの事を確約した、是れ伊太利と希臘及スラーヴ人と反目するに至つた重なる原因である。

墺伊の二國は、斯くして共同の步調を取るに至り、倫敦の列國會議に於ては、二國は、其の親和の態度を示したのであつた、然かも伊太利は、アドリヤに於ける其の特殊の地位に付、列國をして、之れを承認せしめたのであつた、今の伊太利の爲めには、アドリヤ海方面に其の力を盡す事が、最も大切なのである。

乙、アドリヤ海に於ける列國の競爭

伊太利と對岸のアルバニヤとは、古き關係を有して居る、而して伊太利は、之れが全部又は少くも其の一部の要地を領有するに由つて、其のアドリヤ海に於ける地步を固ふし、其の自衛を全ふし得るのである、此故に伊太利は、第二バルカン戰爭以前より、其のアドリヤ政策上から、打算してアルバニヤに注目し、スクタリ及デュラッツオに、伊太利の學校を建設し、新聞紙を發行し、銀行を設立し、種々の企業をも爲した、而して此地方に伊太利人の移住民を送つたのである、此行動は、アルバニヤ王國の建設せられて以來、各地に益々其の步を進めたのであつた。

伊太利が、アルバニヤに活動するに關して、其の南方に於ては、有力なる競爭者はなかつたが、其の北方に於ては、墺國の政策と衝突せざるを得なかつた、而して兩國の共に力を盡した所は、即ちヴァロナであつた、ヴァロナはアドリヤ海に於ける兵事上及經濟上重要の地点であるが故に、伊太利は之れを自國の勢力下に置んと欲したのである、現に一千九百十三年九月下旬の頃、伊太利は、多くの技師をヴァロナに派遣し、アルバニヤに於ける鉄道の建設に付て、種々視察研究せしめ、又農業視察團を派遣し、各地を視察せしめ、又郵便に關する設備の材料を輸送して其の準備を爲し、又銀行家や學校教員をも派遣したのであつた、是れ恰も、アルバニヤを以て、伊太利の被保護國扱ひをなすが如きものである。

伊太利は之れのみならず、尙ほ、アドリヤ沿岸の各地に然かも希臘のユルフ島や、多嶋海の諸島にさへも、伊太利語を普及せしめんと努めて居たのである、伊太利は言語の上から、アドリヤ沿岸の人民を、伊太利化し、斯くして其の勢力、其の利益を進めんとしつゝあるのであつた、

墺太利及匈牙利は現に、アドリヤの東海岸に於て其の領土を有し、其の海軍の根據地はアドリヤに在つて、アドリヤに於ける海權の把握は、墺匈の爲めには實に重要なる問題である、一千九百十三年の春、墺匈國は維那にアドリヤ博覽會を開設し、アドリヤ沿岸の情況を詳しく國民に知らせて、國民のアドリヤに對する海事的注意を促した程である、而して墺匈國は、伊太利とは其の政策を異にして、主として宗教に依つて、アドリヤ沿岸の人民を墺國化せんと努めて居る、之れをアルバニヤに付て見ても、アルバニヤの北部に於けるカトリック教徒の數は、大約二十万人ありと稱せられて居り、墺國は此等に對して、宗教上から其の勢力を扶植して居るのである、墺國は此等を墺國に仝化する方法として、寺院を建て、宗教學校を作り、フランス、ヨゼフ皇帝を以て、大皇帝と呼ばしめ、彼れを以てアルバニヤ人の救濟主と崇めさせて居た、即ち精神的仝化の点に於ては、伊太利人よりも墺國人の方が成功して居たのである、墺國人は、アルバニヤ人に對しては、伊太利人の如くに言語上の同化を强ひないのである、而して墺國人は、ヴァロナが伊太利の勢力下に入らんことを恐れ

て居つた。

伊墺二國が、斯くアドリヤに爭つて居る間に、又他の競爭者が顯はれて來た、其れはスラーヴ人種である、此のスラーヴ人は、未だ一國の政治上の指揮下に、統一したる運動をして居るのではかなつたけれとも、事實として大ひなる勢力があつた、即ちボスニヤ、ヘルゼゴビナ、ダルマシヤ及クロアシア等に於ても、覺醒せるスラーヴ族の優秀なる勢力は事實である、而して其勢力は主として其の居住民の數の上の勢力である、例ば、イストリアに於ては、伊太利人は十四万五千人であり、獨逸人は數千人なるに過ぎざるに對し、スラーヴ人は二十二万三千八百人の多きを有して居り、又匈牙利の唯一の港たるヒユメに於ては、伊太利人は二萬三千人なるに對し、スラーヴ人は既に一萬九千五百人も定住して居るし、又トリエストに於ては、伊太利人は、一千九百年には、全人口の七割七分を有して居たのにも拘はらす、一千九百十四年に於ては、六割三分に減して居ると云ふ情態があるに對し、スラーヴ人は、既に五萬六千九十六人も居る、斯の如くに、アドリア沿岸に於ける墺匈國の領土には、今や多數のスラーヴ人が、漸々勢力を占めて居り、墺匈國は、古き伊太利人以外に、此の新進人種の壓迫を受けつゝあるのである、塞耳比亞と露西亞とが、アドリヤ進出に向つて、大野心を有して居るのは、決して無謀の企畫ではない事が了解せらるゝのである。

此間に處して、獨逸は又近來、アドリヤに於て、大ひに野心を有して居たのである、獨逸は地中海に進出するのを以て、其の覇權策上必要と考へて居た、之れが爲めに、獨逸は土耳古と結び、アレキサンドレット港を浚渫改善し、之を以て、獨逸海軍の根據地とした、乍併、此地点は、地中海の覇權を握らんか爲めには、餘りに中央に遠くて甚だ不便である、是故に獨逸は、一千九百十二年十月三國同盟を更新するに當つて、同盟を地中海に於ける共同動作の事に迄延長し、而して伊墺の二國が、ヴァロナを爭ふに乘じ、其の仲裁役となり、漁夫の利を占めて、獨逸自身に之れを占領せんと欲して居たのである、獨逸が、ウヰード公を以て、アルバニヤの君主としたのは、實に此間の消息を語るものである、又一千九百十三年の夏にも、獨逸皇帝が久しく、希のコルフの別莊に留つて、避

暑の名の下に、希王と親みつゝ、種々研究して居り、續てアルサスに至つて示威的行動を取つたのも、恐らく此れが爲めであつたであろう。

伊太利と、アドリヤ海との關係は、傳説的のものである、既に覺醒し、且つ既に發展せる伊太利は、其の利益、其の名譽の爲めに、此の海を失つてはならないのである、然るに其の競爭の多きこと右の如く、而して墺國は塞人を逐ふて此地に侵入するに至つた、伊太利たるものゝ此に對する苦心は察す可きである、乍併恐らくヴァロナは永久に伊太利の據る所となるであろう。

丙、小亞細亞沿岸の島嶼と伊太利との關係

前述せる如く、伊太利は、小亞細亞沿岸の、ロード及スポラートの島嶼を占領して、之れを離さない、這は蓋し伊太利の爲めに、軍事上重大視せられて居るが爲めである。

之れに關し、英國の外相グレーは、之れを土耳古に還附し、自活の一地方として存在せしめんことを主張して居た、之れに對し伊太利のギオリッチ、及サンギュリアノは、之れを放棄するを好まず、而して若し伊太利にして、此等の島嶼より其の兵を引き揚げるに於ては、伊太利の憲兵を以て、秩序の維持に任せんことを欲して居ると傳へられて居る、即ち伊太利は、永久に此の地方を占領せんとして居るのである、此口實は、這回の戰爭に依つて、益々確實にせられたのである、伊太利が土耳古に對して宣戰せる理由も、之れに由つて知らるゝのである。

此島が伊太利に占領せらるゝことは、他の國の爲めに重大なる國際關係を及ぼすのである、先づ希臘に付て云へば、希臘は、之れが爲めに、全く伊太利より包圍せらるゝことゝなり、其の大希臘西の希望は、恐らく之れを達し得られざるに至るのである、墺太利の爲めにも、ドラッグ、ナッハ、オスラン、即ち東方進出の宿望は、之れが爲めに制せらるゝのである、又英國の爲めにも、此の二島を占領せらるゝことは、サイプラスの爲めにも危險であり、又地中海政策の爲めに一つの障害である、何んとなれば、サイプラスと、マルタとの間に在る、重要なる地点を他國に委することゝなるからである、又土耳古の爲めには、

小亞細沿岸の防禦力を失ふに至るものである。

伊太利が、英佛側に反對なる、獨墺側に存屬して居る時は、此の問題は、英國の爲めに重大であるけれども、今日に於ては、寧ろ伊太利に與へた方が、獨墺の不利となる形に在て、佛蘭西は、小亞細スミルナ附近に鉄道權を有して居るが故に、伊太利と親近せる今日に於ては、此の島が其の與國の手中に在ることは、却つて其の利益とする所であろう。

小亞細沿岸諸島の軍事上の必要に關しては、一千九百十四年一月十五日發行、巴理雜誌（ルヴュー、ド、パリー）中、無名士の「伊太利の海軍及ドデカネーズ」に詳說しあり。

八、伊太利領土の擴張

甲、トリポリ占領の原因及占領に至る經過

トリポリ占領に關するローザンヌ條約は、實に歐洲列强の亞弗利加北部に關する最后の行動であつた。

歐洲各國は皆な、伊太軍の、トリポリ出征の急激なるに一驚を喫したのである、勿論、何人も、伊太利は多年、トリポリに望みを囑して居たことは、知つて居たのであるが、乍然、左程急遽に此の希望が達せられ樣とは思はなかつた、唯だ單に歐洲のみではない、實に伊太利人自身でさへも、豫想外であつたろうと思はるゝ、伊太利人の愛國心は、此の時、充分に發揮されたのである。

トリポリテーヌの占領は、事餘りに急遽にして、一般に信ぜられぬ迄に喫驚せられた、併しながら、識者は伊太利が經濟上並財政上、決して貧弱でないと云ふことを、知つて居た、最近の豫算表を見るときは、英、佛二國よりも、寧ろ其の財政の强固であることが分る、但し夫れは、トリポリ占領前の財政情態である、其後トリポリに關して、伊太利政府は、種々の費用を要し、一億フランを年々本國から補給せねばならないことゝなつた、それにしても、兎に角、伊太利はトリポリを占領することが出來たし、伊太利の財政が此の占領を許したのは、伊太利の財政情態の順調であつた事が知らるゝ。

伊太利がトリポリを占領したことに關し、世上では直に伊太利の虚榮心、或は尊大心に歸するけれども、其れは甚しく皮相の見解であつて、要は列强に後れすして、アフリカ分割の共同の分け前に與り、且つアビシニヤに於ける、アドウア敗戰の不名譽恢復を目的とし、且つ移民政策上の必要に基たものである、即ち此占領は伊太利の自存の上に、抗すべからざる必要から生じたものに外ならないのである。

伊太利は、又自國の商工業の發達と共に、其の生産物の捌け口をも必要として來たのである、但し此事は、未た左程の必要に迫られなかつたとしても、伊太利の人口の激增に到つては、外國に於ける出稼のみにては充分に其の要求を充すことが出來ないのである、若し伊太利全土か、皆な悉く相應に價値のある土地であるならば、好都合であるけれども、不幸にして、事實は決して、左樣ではない、伊太利の內地は、多く荒蕪せる土地である、而して地方によりては、出稼によりて、內地に於けるよりも、更らに一層有利なる方法に於て、彼等の技能を、提供し得るのである、それであるから、伊太利としては、有利の土地を占領し茲に其の人民を移住せしめて、伊太利國民として、幸福に發展せしむる必要があるのである、伊太利は之が爲めに、チュニスを欲して得ず、アビシニヤを求めて失敗し、終にトリポリを得んと欲した、之れか即ちトリポリ占領の眞目的である。

然らば、トリポリは、土地整備せる殖民地であるかと云へば、不幸にして、そうでは無い、初めは、アラビア人が、トリポリに居住し、其の後に至り、土耳古人が之れを占領して居たが、何れも全く放任の形ちで、何等の開發を圖らなかつたが爲めに、トリポリの價値は、甚た僅かなものであつた、然るに此の荒廢せる地方も、一度伊太利農民の手に要せらるゝや、此の地方は、僅かの歲月を以て、生産に適する樣になりつゝあるのである。

トリポリを以て、之れをチュニスに比するに、大樣全一なるが如くである、氣候にせよ、雨量にせよ、皆な大差はない樣である、唯だ其の土地に向て施さる可き政府の方針如何によりて、其の効果に自ら差違か生するのである。

シレナイカ地方は、爾來每年多大の大麥を輸出して居るが、其の耕作方法た

るや、頗る幼稚であつた、即ち先つ初めに、土地に種子を播いて置くが、土地は少しも耕さないのである、種子を播いた後は、其の儘にして置いて、農民は暫く何所かへ去つて仕舞ふのである、而して收穫の時期が到來するときは、農民は歸り來つて、之れを收穫する、斯くの如き有樣であるが故に、一旦此の地方が、リギュリーや、ロンバルヂーや、ピエモンの如き、不毛且つ峻險なる山間地方に於て、農業上の好き成蹟を擧げたる、農業勞働者の手に歸したなら、蓋し、其の効果の如何は、識者を俟つて後知るべきではない。

リビア地方の地層は、礦石の脈に富んで居る、此事に付ては、獨逸及伊太利の二研究家の合致せる發表に依つて世に知られた、最近又ロールファ氏及クリスピ氏が、發表せる所によれば、ラグランド、シルト地方及ひペンガジ背地の地方には、硫黃脈、燐酸塩脈、異極礦、鐵、鉛、銀、亞鉛の礦脈が存在して居つて、其の量は莫大なるべきものゝ如くである。

トリポリの占領は、恰もモロッコの占領と同じく、有利なる事業を新領土に求めんとする投機業者、及資本家に依りて、誘導されたものであると云ふことも出來る、然し之れありしが爲めに、新領土の擴張が、非難すべきものであると云ふことは、取るに足らない事である、占領前から、伊太利の銀行家は、トリポリに出資して居た事は事實である。

獨逸、白耳義、及ひ伊太利の社會主義を唱道する一派すら、殖民地擴張の事は、勞働階級に對して、特に効用があると唱へて居る、即ち一は、彼等の製作品の捌け口が出來たが爲めに、其の物品の價値の增加することゝ、又一には、或る貨物に就ては、非常に廉價に買入るゝことが出來ることゝの爲めである、其の一例を擧げて見れば、伊太利の領有に歸したる、シレナイカ地方の工業發展が、南部伊太利の下等勞働社會の爲めに、幸福を與へた事は、大なるものであるとせられて居るが如くである。

抑々伊太利人は、其の占領に先ち、非常なる忍耐を以て、先づトリポリに平和的侵入を試みた、トリポリ、ベンガジ、デルナの三港は、月二回の航海を以て、シシリー島に聯絡されて居た、ベンガジには、夙に伊太利の郵便局や貯金局が建てられ、又學校も設けられた、而して學校は、全く無月謝であつた、其他、此地

方には、諸般の設備が、一通り整うて居つた、トリポリも亦略々同樣である、

ローマ銀行は、トリポリ及ベンガヂの両市に、其の支店を出して居つて、經濟上の發展の爲めに、大ひに力を副へて居た、而して其の中の、最も銀行の庇護を蒙むつて居たものは、即ち漁業場であつた、斯くの如く伊太利人は、諸方面に於て、活動して居たが、此事實は、一九一一年に開催された彼のチユーリンの博覽會、即ち伊太利國外に於ける、伊太利人の成功を表はした博覽會に於て、其の詳細は、之れを知ることが出來た。

チユーリンの博覽會は、伊太利人の發展的事業に付き、最近數年の功績を証明して居ると云ふ点に於て、特色があつた、伊太利人は、日頃六百萬の出稼民の事業を整頓し、其の出稼民を團結せしめ、彼等の精神の中に、伊太利國民主義なるものを、吹き込むことに意を用ひたのである、又伊太利政府は、殖民協會殖民信用組合等を設立し、民間に於ては、私設會社を建設し、相呼應して殖民の目的の爲めに、奮勵したのである、一九一一年六月、外國に於ける、伊太利人會は、既にトリポリ占領の必要を、議決したのである、而して一九一四年、ゼノワで催された殖民地博覽會は、一九一一年より、一九一四年に到る伊太利移民の經過を表明したものである。

土耳古政府は伊太利の移民事業に對し之れを妨ぐるに就て、種々の手段を講じた、土耳古としては、不當の處置と云ふ可きものではない、乍然、土耳古は恰も米人や、支那人が日本人に對してなす如くに、暴横の方法を取つた、而して之れが爲めに、伊太利人に好乎の口實を與へた、一例を掲けて見ると、即ち土耳古政府は、自國臣民が土地を伊太利人に賣却せる場合には、之れを拘禁し、又若し賣らんとする場合には、之れに强迫を加へ、若し之れに從はざる場合には、之れを逮捕したのである、是れより二國の間に先づ言論戰が開かれた。

一九〇八年以后に於ける、伊太利土耳古兩國の言論界は、大ひに沸騰して、伊太利の一新聞紙の如きは、當時左の如き記事を掲載した、即ち、「元來トリポリの土地の賣買は、一定の手續さへ履めば、全く自由であるにも拘らず、土耳古はトリポリ人が伊太利人に、土地を賣らんとする場合には、政府は、一種不法の行爲を行つて、此等を拘禁するのである、ハメット、シセリフの如きは、其の土

地を、バルダツなる、伊太利の一技師に賣つた所が、其の技師は、ローマ銀行の代理者であつて、且つ最も有利なる事業たる、オリーブ油採取所長であつた所から、ハメット、シェリフ氏は、遂に有罪を宣告せられ、無期徒刑に處せられた、一方買主のバルダツ氏に關しては、仝氏に對し直接には危害を加へなかつたけれども、一人の憲兵と、數名の兵卒とは、一人の將校に引卒せられて、直に仝採取所の勞働者たる、トリポリ人の執務を禁止妨害したのである」と。

「千九百十一年、伊太利は土耳古との爭議に引き續き、多島海に於ける、六島の稅關を差押ふる爲めに、艦隊を派遣した、土耳古は、遂に屈伏して、コンスタンチノーブル、サロニカ、バロナ、スミルナ、ゼルサレムに、伊太利郵便局の建設を認許した、且つオットマン帝國海岸の、沿岸航海と同じく、トリポリとミスタ間に於ける、伊太利船の航海をも許した。

此等の事件は、一先づ落着したが、又其の次ぎに、數多の事件が起つた、土耳古の爲めには、誠に同情せさるを得ない、伊太利は終に土耳古に對して、急遽暴戾の處置に出で、一九一一年九月二十七日の、最后の通牒を發するに到つた、若し夫れ、日本と米國との關係も、米國人にして、依然不當の處置を續け、極力日本人を排斥し、而して我等にして、從來の如き、外國崇拜や、商買外交やの卑屈な態度を拋つたならば、必ず伊土戰爭と、同一の結果に立至らさるを得ないであろう、平和を欲するならば、米國は宜しく愼む可く、國家の正當なる權利を維持せんと欲するならば、伊太利の心は、即ち日本の心たらさるを得ない事となる。

當時伊太利政府の出した最後通牒とは、左の如きものであつた。

「土耳古の無爲政策の爲めに生したる、トリポリ及シレナイカに於ける、不秩序並に放棄の事態を終結し、此地方をして、北部亞弗利加の他の部分に實行せらるゝと仝一の文化に浴せしむることの、絕對必要事たるは、伊國政府が、多年土耳古政府に對して提言し未た曾て中止せさる所なり。

一般の要求に基き、文化の命する此の革新は、此等地方と伊國海岸との距離の近接する所より、伊太利の爲めに、最も重要なる利害を構成す。

近來各種の政治問題に關し、常に公正に土耳古政府を援助したる伊國政府

の態度に拘はらず、又伊國政府が、今日迄証明したる穏和と忍耐とに拘はらず、トリポリに關する伊太利の見解は、土耳古政府の無視する所となりしのみならず、該地方に於ける伊太利人の事業は、最も強硬にして最も不正なる不斷の反對に遭遇したり。

如斯、トリポリ及シレナイカに於ける、伊太利の正當なる行動に對し、今日迄斷へず敵意を示したる土耳古政府は、最近に至り、最後の瞬間の手段として、現行條約並に、土耳古の威嚴と優越なる利益に背反せさる限り一切の經濟的讓與をなさんとするの意思を表明し、妥協せんことを伊國政府に提案したり。

然れとも、過去の經驗は、斯の如き交渉の無益なるを証明し、又此の商議は、將來に對する擔保を構成するの力なく、却つて紛議の不斷の原因となるに過さる可きを惟ひ、伊國政府は目下の形勢に於ては、斯の如き商議を開始す可き狀態に在るを信する能はず。

伊國政府が、トリポリ及シレナイカニ駐在する領事より得たる報告に依れば、土官並に其他の官吏に由り、明かに挑發せられたる、排伊太利人的動亂の爲めに、今や事態當さに甚た重大なることを明にす。

此の動亂は、獨り伊太利人のみならず、各外國人に對して焦眉の急を告け、彼等は其の安寧を危虞し、遲滯なくトリポリを退去するが爲め、乘船を開始したり。

伊國政府は、土耳古軍用運送船の、トリポリ派遣に關する、重大なる結果に付て土耳古政府に豫告する所ありしが、該運送船のトリポリ到着は事態をして益々重大ならしめ、之より生する危險に備ふるが爲め、嚴正且つ絶對の義務を伊國政府に命じたり、故に將來其の威嚴と利益との保護を考慮せざる可らざるに到りし伊國政府は、トリポリ及シレナイカを、軍事的に占領するに決意したり。

右は伊太利が熟議決定し得る唯一の措置なるが故に、此の措置が、土國現在の代表官憲の爲めに何等の反抗をも受けず、又之れが必然の結果たる手段を、困難なく行使し得るが如くに、土國政府より命令せられんことを、伊國政

府は期待するものなり。

之れより生ずる最終事態の解決に關しては、両國政府今後の協定に讓る可し。

在君府伊國大使館は、本通牒を土耳古政府に提出したる後、二十四時間以内に土耳古政府より、本件に關する最後の確答を要求す可きことを命ぜらる。

右回答なきに於ては、伊國政府は占領を確保するが爲めの手段の實行に直ちに着手するの必要を見る可し。

前記二十四時間の期間内に、土耳古政府の回答は、在羅馬土耳古大使館の仲介に由り、伊國政府に通告せらるゝを要することを茲に附言す。」

右の如く伊太利の最後通牒は、甚だ亂暴なものであつた、乍然戰爭と云ふものは、本來が亂暴なものである、英國の如きは、七年戰爭の時分には、出し抜けに佛國の船舶を横領したものである、最後通牒を巧みに認めた所で、要するに一時世間を瞞着せんとするに過ぎないのである、日本では開戰の口實を如何にするか、ナゾの言を屢々聞くことがあるが、開戰の口實の如きことは、如何樣でもなるものなる事を歐洲の外交史は、世人に敎へて居るのである、

シシリー島選出代議士、フェリース氏は、此のトリポリテーンの獲得が、如何に南伊太利に影響するかを、說ひて居る、彼れは曰く、「十八年以來、即ち余が初めて、トリポリに旅行した時以來、余は、トリポリ占領の贊成論者の一人であつた、蓋し余の意見たる、シシリー島と、南伊太利との間に存在する、重要問題を解決せんとするの精神に基くものであつて、我が貧困なる農民を救ひ其の生血、其の筋肉を賣ると云ふ事から免れさす爲めである、特に南亞米利加に人肉を賣に行く移民の窮狀を救ひ、之れをして幸福なる狀況に置く可しと云ふことは、重大なる問題であるからである、ロンバルジア州の、政治上及經濟上の大發展をなせる原因は、即ち全州が各地各方面に於て、夫れ〳〵其の出口を持つて居るが爲めである、凡ての商業及凡ての工業が、一旦は必ず、ロンバルヂアを通過するからである、而るに南部伊太利及シシリー島は、伊太利なる、一の身体の内の、重要ならざる、一の末端に過ぎないのである、好乎の出入口あるが故に、北部は經濟上の有福、政治上の進歩、社會上の幸福を有するけれど

も、南部は社會上及政治上に不幸である、若し伊太利にしてトリポリを獲得するならば、伊太利身体の重要点は、變更せらるのであるし、又變更せられねばならない、シシリー島、及南部伊太利は、之れより伊太利全半島の商業の通過橋を形成し、且又トリポリテーンの發展に趣くべき、商工業の通過橋を形成するのである」と。

伊太利のトリポリ占領の行動は、夫れ故に、趨勢上最早、免るべからざるものであつた、乍然、茲に、世上に餘り知られさる、而かも重大なる裏面がある、夫れは、獨逸の脅迫である、三國同盟の一角として、伊太利に親善なるべき筈の獨逸が、佛國のモロッコ併合事件に對すると同じく、伊太利のトリポリ併合に對しても、同しく裏面から壓迫を行つたことである、是に於て伊太利は、之れが、占領を急がねばならずとし、妨害者の入らぬ内に、之れが占領を完ふせざれば、多年苦心の願望が、九分通り迄既に順調に進行し來つて、殘る所僅かに一分なるに、若し此事水泡に歸するが如き事あつたならば、是れ伊太利王國の名譽國威に關する譯である、本來獨逸が、トリポリテーンに對して、野心を起したのは、日の淺いことではなく、殊にシレナイカには、頗る垂涎して居たのである、一九〇四年に、ヒルデブランド氏が、「將來の殖民地としてのシレナイカ」と云ふ書物を著して、トブルーク灣が、軍事上、重要なる地点であることを注目せしめた、又其の時、獨逸の新航路が、新にトリポリ、エジプト、及シリヤの間に開かれ、又無線電信の設置が、土耳古より獨逸に委任せられ、獨逸の此の陰謀的行爲は伊太利人の心を騷かせた、而して遂に、一九一一年の初め、獨逸探險家は、土耳古の許可を得て、トリポリの地を周遊し、資本家リュクコーウ氏は、鑛山の大地積を買ひ占めたのである、此等の事實は、皆な獨逸政府の指金であつて、又土耳古の對伊政策から、割り出されたのである、是に於て、伊太利は一刻も猶豫す可らざる事情となり、斷乎たる決心を持たさる可らざる境遇となつた、此機を失する時は、又々トリポリを占領し得さるに至るのである、トリポリの内に、他の列强、特に獨逸の一指を染むるをも、好まざる伊太利は、不法な通牒を送つて、無理に土耳古と、戰爭を初めたのであつた。

乙、トリポリ出征と伊太利人の準備

トリポリの獲得は、アラビヤ人の、精神に、大なる刺激を與へた、乍併、占領の事業は、容易に且つ迅速になすことが出來た、其の以前に、伊太利は、國際の情況を察し、前例を調査し、手落ちの無い樣に充分準備が付いて居た、其の第一は、外交的準備である、英國及佛國の同意は、十年前に既に得て居つて、其の用意や頗る周到であつた、又殊に、外國の妨害に會せない樣に、氣を附けて、居た、當時獨逸の如きは、伊太利の同盟國でありながら、伊太利の最も不安に思ふた所であつた、當時リュザチ内閣は仆れ、次で成れるギォリッ内閣、か此の問題を解決する者であるとは、一般に考へられて居た、而して、愼重に注意を加へて機會を窺つて居た、伊太利は、獨逸と佛國とが、例のモロッコ問題に關して、條約を結び、獨逸はコンゴウの一部を得た時機を握つたのである、而して一方、土耳古が、バルカン問題の爲め困難の立場に居り、トリポリテーヌの事を顧みるの遑なき好乎の機會を巧みに促へたのである、墺太利は、其の以前、ボスニヤヘルゼゴビナ併合の際に、伊太利外務省が、表明した意見に對する修正と交換の條件を以て、トリポリ占領を默認することゝなつて居た、又墺太利内に於ける、伊太利人の伊太利民族主義が、トリポリテーヌの伊太利人に依り開拓されると共に、多少緩和さるゝ事ある可しと、墺太利は考へて居た、何れにもせよ、今が即ち絶好の機會である、若し此の好機會を逸したならば、伊太利は決してトリポリテーヌを占領することは出來なかつたであろう、是れ伊太利が、斷乎たる處置に出でたる所以であり又國家の爲めには、云ふ迄もなく國民の愛國心は必要であり又、武備は、必要である、國家の富も亦無論必要である、乍然、機會を捉ふる事を知らない爲政家が居たならば、此等の貴重なるものは、終に其の用を爲し得ないのである、伊太利の發展が、伊太利の外交家に負ふ所多きことは、云ふ迄もない、外交と箇人間の道德とを、混同して居る樣な論者には、伊太利の巧妙は理解し得られないのである。

出征軍隊に對する準備は、遺憾なく整つて居り、彈藥は無論、糧食、衛生、飛航隊等は充分に準備せられ、皆な各々迅速に命令地点に到着した、其の秩序の整

然たること、感歎に値した、伊太利軍隊の整々の秩序を見て、當時世界一位の陸軍だと、賞賛した人が、外國にはあつた樣だが、夫れは少しく褒め過ぎの觀がある、乍然、兎に角、其の堂々たる隊伍には、外國の觀戰武官等も、大分に意外に思つた者があつたのである、英國のトリポリ駐在武官リチャードソン氏は、倫敦に歸つて下の樣な事を云つて居た、「伊太利軍隊の威風堂々たる事は、大なる感動を余に與へた、伊太利兵は、姿勢良好にして、食料粗なれども、頗る長途の行軍に耐へ快活の氣に充ちて居る、北部伊太利兵は、堅忍不拔の精神に富み、南部伊太利兵は、熱血的である、共に軍隊として、武裝申分なく、訓練亦行き屆ひて居る、」……又獨逸の某參謀將校は、自身親しく、伊太利兵の、祖國出發の光景を見て曰く、「斯樣な美はしい、出發の光景及上船の模樣は、未だ歐洲の何れの國にも、見ざる所であると……」、如何に、當時の伊太利が、此の戰爭に付て豫め注意し、其の準備が整つて居つたかゝ分る。

伊太利軍隊の行動は、些の支障も無く行はれ、選拔隊を擇び、且つ此の戰鬪に關しては、最も利害得失の關係深き、南部伊太利人の軍隊を、第一線に立たしめた、而して守備兵としては、豫備兵が專ら其の任に當ることゝなつた、參謀本部は、「トリポリテーヌに於ける、將校に對する注意」なる、五十六頁の小冊子を印刷して、之れを各將校に配附した、該書物は、誠に其の頁數は少ないけれども、然し乍ら、要点を良く摘記して有る、其の內容は、トリポリの地理、及ひ特殊地点の詳細なる說明、氣候、病氣に對する注意、衛生に關する諸規則、水源地、及飲料水、駱駝の用法、農業、交通、商業、トリポリ政治組織、人口、民事上及宗敎上の習慣等を說明し、次ぎに土人との關係に就て、守るべき規則、貨幣、回々敎の曆等を、も述べ、終りには、土耳古軍隊の兵力、及土人軍の兵力と、戰術の注意、星に關する注意、アラビア及土耳古の方言、交通及土耳古の電信符号等を記したものである。

斯くして開始された戰爭も、伊太利の爲めに、着々其の目的を達することを得たが、併し向後に於ける、トリポリ維持の問題が少なからず、困難の問題である、佛蘭西が、アルヂェリーを征服し、此地に佛國の支配權を確立する迄には、四十年を要した、然らば伊太利はトリポリテーヌに侵入したのであるが、其の

勢力の萬代不易となる迄には、幾多の智能と、財力とを費さねばならぬであろう、又相當の年月を要することであろう、伊太利たるもの、極めて愼重に、改良同化の地歩を進むべきである、何れの國の歴史に依るも、此の殖民地獲得に關しては、其の國人の一揆に關する事件が、引續き諸所に、起るものであるけれども、今日迄の處では、トリポリには反逆事件も起らず、イスラム敎徒も、極めて、温順なるものゝ如くである、乍然土耳古又は獨逸の煽動に依つて、如何なる事が出來するとも限らない、蓋し、トリポリの平和なる所以は、種々なる原因があるけれども、其の重なるものは、土耳古人が、全地に於ては、全然土人より歡はれて居らないことである、只土耳古人に對し、好感を有して居るのは、同地名物の、爭鬪好きな、掠奪を半ば業としてし居るアラビア人の一部分に過ぎないのである、又トリポリ海岸の都市部落では、アラビア人、猶太人、マルタ人、貴族、商人、農民、と云ふ如く、種々の階級の人民が、集合して、地方人の大部分を占めて居るが、六七十年以來、土耳古は、唯た單に、本國として、存在するのみであつて、實際の權力は、トリポリに於けるアラビア人の酋長に歸して居つて、土耳古の支配權なるものは、到底永く支ゆることの出來ない事情であつた、斯樣な事情であるが故に、伊太利は、此の点に注目して、先づ、アラビア人の酋長を懷柔することに努力した、蓋し適當の政策である、殊に其の中で、最も勢力のあるカラマンリの子孫たる、現酋長を手に入れて、「是非伊太利の統治を受けたい旨」の請願書を他の酋長等と共に、出さしめた、蓋し何處の國も、執る所の手段であるが、必要の事である、新領土を統治するには、先つ其の土地の民心を得ることが必要である、特に勢力ある酋長を懷柔する事は、最も適當である、勿論人民より嫉視せられたる君主の如きは、毫も懷柔する必要はない、人民より怨まれたる土人官吏の如きも全してある、此等は斷乎たる手段を施す方が却つて民心を得る所以である。

トリポリ占領以來、直に伊太利政府は、アラビア人に對し、伊太利統治の、有り難味を示さねばならぬと考へた、是を以て、先づ工部大臣は、技師を派遣して土人の爲めに、最も緊急事たる、鐵道敷設を調査せしめた、幾干もなく、トリポリテーヌ、及びシレナイカの鐵道敷設案は、伊太利の議會に提出せられた、伊

太利が此の施設を急いだのは、前述の如く、アラビア人の甘心を得んが爲めではあるが、又他方に、伊太利のトリポリテーヌ占領は、之れを國際法上から、觀察すると甚たしく無理な点も、ある爲め、伊太利も此の点に關しては、是非之れを辨護するの必要がある、茲に伊太利は、トリポリテーヌの、占領はトリポリ人の文化の爲めであると云ふことを、世人の眼に示さんとする政策を取つたのであつた。

丙、トリポリの占領と國内の議論

何れの國に於ても、其の兵を、外國に出す場合には、或は政爭の爲め、或は國家を想ふが爲め、或は杞憂の爲め、國内に贊否の両派に分れるのである、トリポリテーヌ遠征の當初に於て、戰況は先つ順潮に進み、且つ之れを占領することが、利益あるものなることは、一般に了解されて居たにも拘はらず、矢張り、反對があつた、即ち勞働者の一派は、此機會を利用して、同盟罷工を起し、又社會主義の一派は、戰爭反對の運動を試みた、併し乍ら、當時に於ける、伊太利國内の全般的一致は、頗る堅固なものであつて、忽ちにして、反對運動に對する、示威運動が行はれ、又輿論は一齊に、此の非國民的態度を攻擊したが爲めに、直に此種反對論者が屏息して仕舞つたのである、殊にミランに於ては、社會主義者の一派が、戰爭に反對して、非戰論を稱へた所が、之れと同時に、此の一派に反對する、主戰論者が現はれて、而かも殆ど國民上下の一般が、猛烈な勢を以て、之れに反對したが爲めに、再び戰爭に反對する聲は揚げらるゝに至らなかつた、

伊太利の輿論は、トリポリ占領の問題に關しては、既に夙に確定して居つた、それであるから、トリポリーテヌ占領の事實が發生せる、數年以前に、伊太利人の國家的觀念は、既に熾烈となり、主戰的議論が盛んに稱へられて居たのである、然るに此の時、墺地利に在る伊太利人に由りて、イルレダンティズムが、連りに唱道せられ、最早墺國とは、血を見ずんば、解決到底困難なるが如き有樣であつた、若し両國の交戰が事實に起つたとしたならば、伊太利の運命は、勝敗の如何に拘らず、或は頗る危急に陷つたかも知れない、是に於てか、伊太利も之れを察し、墺國も亦之を惟ひ、墺地利は、伊太利人のイルレダンティズムを他

の方面に轉せしめんとして、伊太利のトリポリテーヌ占領に關し、暗に同意した、但し尙ほ墺の新聞紙中には、伊太利を以て海賊と罵つた程である。

斯くの如く、伊太利では、全國の民擧つて、主戰論者であるから、軍隊がトリポリテーヌに向つて、出發するに際しては、全く狂熱の態あり、伊太利統一以來、斯る國民的熱狂の情態を表はした事はないと云はれて居る、當時の國民の意氣以て知る可しである。

ローマは云ふ迄もなく、ナポリ、チューリン、ミラノ等に於て、愛國的示威運動が到る所に行はれ國民は此事に日も亦、足らないと云ふ有樣であつた、又劇場に於ては或は戰爭劇、或は戰爭に關する歌舞が、歡迎せられて、左のみ巧妙ならざるものでも甚しき人氣を得た、而して或る劇場に於ては、伊太利の國旗にトリポリの字を大書して、之れを舞台に持ち出した所が、群衆は歡呼して手を拍ち、足を踏み鳴らして、之れを迎へ、遂に期せずして、一齊に伊太利進行曲を合唱し之れを繰り返す事數度に及んで、終に止む所を知らず、舞台監督も亦興に乘じ、群衆の前に顯はれて、出征軍人の成功の爲めに、一場の演說を試みた所が、拍手堂を動し、群集は、最早其の家に歸るを忘れて、知ると知らざるとを問はず、狂喜して打ち談ひて居つたと云ふ事である。

トリポリ遠征は、土耳古國內に政變を起さしめたのであるが、尙ほ伊太利國內の社會主義者の間にも、內紛を起さしめたのであつた、戰爭の初期に、伊太利の全主義者は三分して、ビソタリ氏の一派は、政府に左袒し、少しも反對行動を採らなかつた、然るに全じ改革派の、チユラチ氏の一派は、全然此の遠征に反對した、而し前にも述べた如く、トリポリ戰役は、伊太利全國民の企望意思であるから、此の反對の爲めに、大なる反響を來さなかつたのみならず、反而チユラチ氏を以て、土耳古人なりと呼び、全盟罷工の煽動者と罵る者すら、生ずるに到つた。

如斯情況であつて、モデナに於て、開催された社會主義者の會合に於ては、當り觸りの無い樣に、トリポリ遠征には、反對せずして、現時の外交政策は、國民の意思に非さる旨の、漠然たる決議をなせるに止めた、以て、當時の平和論者の無勢力を察す可きである、トリポリ問題に付ては、改革派の內にも、斯く分れて

居たが、又平和を主義とする革命派一派の中にも、戰爭贊成者を有し、反對者に向つて、贊成の意見を闘はしたのである、之れには原因が存在するのであつて即ち此の派の大部分は、南伊太利人であることである、南伊太利が、トリポリ戰役の結果、利益を得ることの、僅少でないことは、前述せる如くである、是を以て、彼等は、平素は人道正義平和を唱道せるに拘はらず、伊太利の國利及箇人の利益を主として、贊成したのである、此派に屬する、或者は公然と贊成の理由を述ぶる者多々ある狀態であつた、其の内でも、特に世人の注意を惹いたのは、羅馬の陪席判事で、社會主義者たる、ロシドリア氏であつて、仝氏の如きは、宣言して曰く、「此の戰役は、伊太利下級民の爲めに、必要にして有用なるものである」と、又進歩的意見を有し、平和主義者として有名なる、彼のギュセップ、セルギ氏の如きは、左の樣な事を云つた、即ち「伊太利は、確かに持兒器强盜の行爲を爲したものである、併し余は此の戰に、贊成である、蓋し土耳古から、此の土塊を取り去ることは、土耳古政府の統治の下に、不幸なる生活を送りつゝある人類の爲めに、全く、幸福を持ち來すからである」と、又ラブリオラ氏の如きも、國民主義者の機關紙上に、社會主義者を非難して、「彼等は、此の伊太利創立の、革命的價値を了解せざる徒輩である」と罵り、且曰く、「若し社會主義が、實現するとしたならば、そは他人の權利を顚覆し、且つ革命の慘事をなすのみである」と、又或る獨逸の社會主義者が、伊太利の暴虐政策なる題下に痛烈に伊太利を攻擊したのに對し、伊太利の、ラブリオラ氏は、一八四七年の日附ある有名なるカールマルクスの、刊行書冊とせられざる、論文の一句を拔いて、之れを發表し、之れを以て答へとした、其の文は即ち左の如くである、「同一の權制を以て、佛蘭西は、先づ、ブランドル、ローレンヌ、アルサスを攻略し、續ひて白耳義をも征服した、之と仝しく、獨逸も、其れと同一の權利を以て、シューレスウイヒを占領したのである、即ち此の權利は歷史上發展の權利にして丁秣と結へる條約よりも尊く、そは文明が野蠻に對し、進歩か退歩に對する權利である」と、獨逸も之れには、一言もない次第である、

當時社會主義者の、從軍の感想に付ては、面白ひ逸話がある、此事は、當時の新聞に掲げられたもので、筆者はシシリー島選出の代議士である、即ち左の

如し。

「余は今ま元氣に滿ちたる人々の中に引き込まれて仕舞つた、余は初めて會つた陸軍の將校に握手した、余は又全樣に、初めて會つた海軍將校に抱き付いた、余は思はず叫んだ、「勇敢なる青年よ、諸君は諸君の本分を盡された、是れ誠に崇高なことである」、と、余か此の言葉を終ると間もなく、前方に當つて、土耳古兵の悲慘なる死傷者が、算なく散亂して居るのを目擊した、すると余は急に我れに歸つて、自分は社會主義者であつたことを忘れて居たのを想ひ出した、斯う氣が付いて見ると、余の心を引き込んだ熱狂せる此の戰爭が暫くの間に、嫌ひになつた」と、

社會主義者としては、さもあろう、蓋し彼等は迷ひの人である。

右の樣に、伊太利の社會主義者の人々の內でも、大部分は、トリポリ戰爭に贊成であつたが、其の一部分に反對論者があつた、此等の人々は、政府の內的政策の攻擊に向はんとして居た所、政府も之れを知り、社會主義者に對して油斷せず、內閣議長は議會に演說を試み、民主的改革、普通選擧、及保險官營を贊成する旨を述べて、彼等を出し拔ひた。

又羅馬法王も、此の戰爭に對しては、切に伊太利の戰勝を祈られたのは、決して輕々看過することは出來ない事實である。

斯くの如く、伊太利のトリポリ遠征は、輿論の大贊成を得たのである、之れに付て、注意す可き事は、社會主義者なるものは、決して絕對的平和論者でない、と云ふことであり、且つ彼等も歐洲以外に發展する事に付ては全然贊成者である、と云ふ事である。

丁、トリポリ問題に對する外國の態度

トリポリ遠征ニ對する外國の態度は、如何であつたか、之れを述ぶるに當りては、先つ佛伊の關係を、大略述べねばならぬ。

外征の當初、伊太利人の考ふる所では、佛蘭西の新聞紙は、伊太利に對する反對的記事を掲げまいと信じて居つた、實際其初めは、佛人は伊人に全情して居つたのである、然るに程なく、獨逸、墺太利は勿論、英國の新聞紙も盛んに伊

太利の行動を非難し、而して、佛蘭西の新聞紙も亦其の論調が變化して來た、乍然、久しき以前より、兎も角も、トリポリ占領に關して、主として伊太利を助けたのは、佛蘭西である、其れ故に博覽會開設中、チュリンに於て、佛國々旗は、各所に飜つて居たにも拘らず、同盟國たる、墺太利獨逸の國旗は、之れを見る事、甚た稀であつた、而して、チュリンに於て、ギオリッチ氏は、マルセイエーズノ曲佛國々歌)に依つて歡迎せられ、伊太利國歌と、交々吹奏せられ、両國々民の情熱は、冷かなる三國同盟を他所に見て、相ひ通つて居つた、蓋し伊のトリポリ占領は、佛國人には佛國の爲めに利益であると認められて居たのである。

然りと雖、前述せる所の如く、トリポリ事件に就ては、佛國内に、全然反對者がないと云ふのではなかつた、乍然、伊太利に對し、單に反省を促がせるのみに決して中傷的のものではなかつた、伊太利の最后通牒の、餘りに暴横であつたことは、平和主義の佛人を怒らしめたのは、事實である、又一方には、伊太利人の殘酷なる行動が、アラビア人中に、排歐人熱を起さしむる事なきか、若しこの傾向を生せしめたとせば、此影響は、直ちに佛國殖民地に波及する事であろうと憂慮せられ從つて、重大なる結果を來さしむるであろうと云ふ事は、佛人の憂ふる所となり、眞面目の人士によりて、伊太利に對し、警告せられたのである、現に、チュニス(佛殖民地)に於ては、此の虞か、縱令一時ではあつたが、生じたのであつた。

然るに伊太利政府は、一切此等の警告に從ふ事なく、敢然として、土耳古に對して、不遠慮に行動し、遂に暴力を用ふる事となつた、されど從來の關係上伊太利は、依然として、佛國は大体に於て、伊太利に反對するが如きことはないと信じて居た、此の事は、確かに伊太利の、外交政策の勝利であつた。

一九〇二年の伊佛協商、一九〇四年の西佛協商は、共に佛國の、モロッコに對する、優先權を承認したものであるが、伊太利と西班牙とが、佛國に對する好意の差は明かに存在して居た、一例を擧ぐるならば、モロッコ問題に關して、獨逸の故障があつたが爲めに、佛獨の關係が、頗る切迫し來つたけれども、遂に戰端を開く迄には、到らずして解決し、アルゼシラス條約が、締結さるゝに至つた時に、佛國の優先權を、率先して承諾したものは、實に伊太利であつた、實際伊

太利は、両國間の一千九百二年の條約を、忠實に守つたのである、斯くして后ちの両國は、愈々益々接近し來つた、是故に、トリポリ問題に關しては、義として佛國は、伊太利を援助せねばならぬのである、モロッコと、トリポリの相互承諾は、蓋し天下既知の事實である、歐洲の二大均勢たりし、三國同盟對二國同盟の両々對立して居る際に、三國同盟中の一國が、二國同盟中の一國と、同盟國も及ばぬ親善關係は、唯た單に、之れを隣國の故を以て、説明することは困難であり又人種の同一を以て解くことは出來ない、二國をして、斯くならしめた大原因は、畢竟利害の一致である、二國は、チュニス及ローマの問題より、全然反目して、久しく仇敵視した、乍然、モロッコ及トリポリの問題から全く親善の國となつたのである、蓋し此一致は両國人の爲めに種々の点に於て必要なのである。

伊太利と佛蘭西との利害の一致は、尚ほ幾多の点に發見せられた、若し伊太利のトリポリティヌの占領が、獨逸によりて反對さるゝとなると、之れを不滿に思ふ者は、唯だ單に伊太利のみではない、前にも述べた如く、獨逸は、トリポリテーチに於て、大野心を包藏して居たが故に、若し伊太利が之れを取らぬとすれば、獨逸が即ち之れを奪ふのである、斯くなるときは、佛國は、比較的親善なる伊太利を、チュニスの隣人とする代りに、大敵たる獨逸を、其の隣人とせざる可らざる事となり、佛國人の爲めには、一大痛恨事である、是れ亦佛の伊を助けたる所以である、之れを佛蘭西より見れば、トリポリ地方の發達することはチュニスの商業を、大ひに活潑ならしむる所以であつて、殊に南チュニス人は、大ひに恩惠を蒙むる次第である、此の点より考へても、佛國の爲めに、伊のトリポリ占領は、大ひに利益である、之れに反して、獨逸は、トリポリを伊太利に占領せらるゝことは、北部亞弗利加に、殖民的立脚地を得んとする希望を全然失ふものであつて、伊太利の占領を欲せぬ事は、獨逸としては當然である、伊太利が佛國に接近するに至つてより、三國同盟に對する、伊太利の熱心は、冷却して居たのである、其の以前からも、三國同盟脱退の勸告が、人民より伊政府に申請されたのは、事實であつて、新聞紙も時々、此の点には論及して居たのである、夫れにも拘はらず、兎に角、三國同盟は、更新されたのであつた、

乍併、クリスピー時代と、伊太利の政界は全く變化して來て居つたのである、

戊、トリポリの占領と黑人の救濟

伊土兩國間の戰鬪も、土耳古對バルカン同盟諸邦の戰鬪が、將に起らんとし、たが爲めに、兎も角も、土耳古は、伊太利と講和するの、必要なるを認め、之れが爲めに、戰爭は、割合に早く、終結するに至つた、

久しく眠れる、地中海濱のラテン民族たる、伊太利人の活動は、着々其の功を奏し、伊太利は、今や、物質的の强味は勿論、精神的の强味をも表明した、即ち伊太利は、トリポリを占領し、而して、之れより、トリポリに於ける、奴隷賣買を禁止し、人道の上に貢献するに至つたのである、モロッコの佛國領有と共に、亞弗利加に於ける奴隷賣買は、東方に追ひ込められたのであつた、爾來亞弗利加內地の奴隷隊商は、回路を採つて、トリポリテーヌに至り、此地に奴隷賣買を營んで居た、其の回路は、一は、ティベスティ、クフラ、ベンガジ、二は、ビルマ、チュニモ、ムルズーク、トリポリ、三は、アイル、ガー、ムルズーク、トリポリ、四は、北サハラ、ガダメー

トリポリであつた、

而して此等の奴隷隊商により、捕へられたる不幸なる黑人は、奴隷として、云ふに忍びざる殘虐を受くるのである、多くの黑人は、途中運搬せらるゝに際し、疲勞して、當に死に瀕するのである、隊商等は、充分の飲用水と乘物を備へて居るに拘はらず、黑人には、水も充分に給與されず、食物も充分に與へられず、而して彼等の家には妻も子も彼等を待つて居るのである、此の憐れなる黑人は、疲勞の結果、終に步行に堪へざるに至るか、又は疾病にでも罹るときは、隊商は、之れを途中に拋棄し去るのである、彼等の最後は如何なるか、蓋し想像するに難からずして、廣漠たる砂漠の海波の中に、斯く無慈悲に捨てられた彼等の運命は、猛獸に喰はるゝか、將た又鳥類の餌となるのみである、此等不幸の土人の運搬は、全く四人以下の取扱であつて、木製の首械を、二人に一個つゝ宛てがわれて聯結せられ、其の手足は、鎖で連かれ、若し少しく其の步行の、鈍る時には、鞭で打たれるのである、自ら紳士と稱する英國人は、久しく此の商賣を營んで、莫大の利益を得たものであつた、此の隊商は、途中、歐洲人に出逢ふ

事を非常に恐れて居つて、若し歐洲人に是非逢はねばならぬ時は、即ち酷烈なる手段を採るのである、即ち或は之れを袋に収めて、駱駝の背に荷積にし恰も或る種の荷物の如くに見せ掛けたり、又若し之れを船に乗せる時は、箱の中に押し込んで、積み込むのであつて、只た小なる穴を、箱の各處に開けて置くのである、斯る場合には、該黒人に付ては大抵其口は、布類を以て之れを覆ひ、聲音の出でさる如くにするのであつて、食物の如きは、殆んと與へないのである、而して之れを船に積む時には、奴隷商と船員とは、相連絡して、之を行つて居る事であるから、船が陸地を離るゝ迄が、大事なのであつて、要するに、港さへ離れ得れば、彼等の大事は成るのである、永い航海を要する場合には、海上にて僅かに食物を與へるのみである、斯る取扱であるから、多くの黒人は死亡するのであるけれども、其れにも拘はらず、賣手は莫大なる利益を得るのである、回々教徒は、或は此の奴隷中の美婦を妾となし、又は農業勞働者として、使用する所から、社會上の必要物として、之れを考へて居た、是故に、歐洲人等は人道上から見て、土耳古の領土が、亞弗利加に存在することは、人類の不幸だと唱へ、トリポリテーヌは、伊太利又は、其他の強國が、之れを獲得するを要すると云つて居たのである、歐洲人の云ふ所も、甚た勝手ではあるが、一部の理由がないでもない。

如斯伊太利が、トリポリを占領して以來、奴隷輸出の最終の港にして、且つ他に比類のない二三の港を、斷然奴隷輸出に對して、閉鎖したのであつた、而して、リビヤの春地一帶に、奴隷の賣買を禁止した、是れ當然の處置ではあるが、良い事であつたに相違ない。

斯くの如くして、暗黒大陸の、掠奪、放火、暴虐、等の、野蠻歴史の最后の頁を閉ぢたのは、伊太利の功蹟である、伊太利も亦、亞弗利加黒人の一恩人である。

癸、伊土戰爭の結果

戰の當初、伊太利は、果して、トリポリテーヌを、併合し得るや否やは、世人から疑問とせられた、蓋し當時の土耳古は、未た甚しい弱國とは、思はれて居なかつたからである、歐洲に於ては當時、伊土戰爭は、永續的のものとなり、結局、何

十年かの、休戰條約締結にて結末が付く可きかと、豫言した者もあつた、是故に、愈々両國の媾和條約が、發表せられたときには、世人は聊か驚いたのであつた、條約の結果、伊太利は、永年の目的を達して、正確にトリポリテーヌを獲得する事を得た、

今ま、伊太利の、トリポリ占領の結果に關して、同國の一般的意見を、少しく調べて見るのに、抑も伊太利軍隊は、伊太利に名ある、カヌバ將軍に率ひられてトリポリテーヌに上陸し、其后は、一九一一年十月二十三日、及二十六日の、アラビヤ兵の伏兵に破られて、不覺の敗を取つた以外に、大なる敗北はしなかつた、然し乍ら、軍隊は甚だ多數に送つたのである、伊太利は、初めより、戰爭を起すの覺悟を以て、種々畫策して居り、其の準備の期間は、可成永かつたが爲めに迅速に動員を行ひ、直ちに出兵すると云ふ運びに到つたのである、如斯の次第で、陸では、機先を制して、花々しくはなかつたが、占領は着々奏功した、又海軍の方は、如何なる情態であつたかと云ふに、其の艦隊は、ダーダチルヌの港外に在つて、大ひに活動したのであつた、

土耳古は、甚だ拙であつた、軍事上にも失敗したが、又内政上及外交上に於ても、失敗と云ふことを、免るゝことは出來なかつた、固より其の自業自得ではあるが、土耳古が、斯く屈辱的媾和をなさゞるを得ざるに至つた事は、甚だ土耳古の爲めに悲しむ可き事である、土耳古は初めには、戰勝の虛報を傳へた爲めに、内は、人民をして虛傲ならしめ、外は、列國の仝情を失し、而して獨逸も、伊太利に氣兼して、土耳古を救ふに至らなかつた、一は頗る巧みで、他は頗る拙であつた、

土耳古は、事ある毎に、常に外國に依賴する慣習のあるのは、大なる過りであつて、之れあるが爲めに、伊土戰役も、又續ひて起つた所のバルカン戰役にも、散々な敗北を蒙むつた上に、實際條約の締結に於ても、損失を招いた、

土耳古は、伊土戰爭に際會しても伊太利に於ては、此の外戰の結果、國内には、社會主義者の徒之れに反對し、政府は之れが爲めに、不人氣となり、其の極、内亂爆發するか、又は縱令夫れ迄には至らないとしても、軍隊のトリポリ出征に反對する者が、續出する位の考へを持つて、頗る樂觀して居た、又多島海に於け

る伊國海軍の活動、及バルカン半島内の暗雲の蒸せるにも拘はらず、土耳古は、戰前、伊太利に對して、平和的希望に基き、交渉を遷延させつゝ、曖昧の間に、利得せんと欲した、是れ土耳古の慣用手段である、

此の土耳古の病的外交は、総てに惡結果を來した、土耳古が、伊土戰役に際して、若し三ヶ月早く、伊太利と媾和を締結したならば、ブルガリヤの脅迫に會ふこともなく、又例へ、ブルガリヤが、脅迫しても、之れに對する、相當の準備は、出來たのである、然るに土耳古は此の方策に出でずして、終に數箇の小邦を敵となすに至つた、而して如何に、土耳古は無謀なりと雖も、數國を相手として戰を有利に搆ふることは不可能である、終に伊に對して、屈辱的講和となつた、洵に憫む可き次第である。

媾和條約に際して、伊太利は、唯た單に、トリポリテーヌの完全なる獲得のみを以て、滿足した、伊太利の輿論は、隨分過激であつて、是非、多島海中の、二三島嶼を領有す可しと叫れたが、政府は速かに講和した。

講和締結以後、トリポリテーヌに於ては、酋長等の從順なる申出でもあり、又伊太利も、彼等の自由を出來る丈け許容したので、両者の間は、滿足なる有樣であつた。

庚、戰爭の損害及經濟界に及ぼせる影響

此の戰爭に關し、土耳古は、其の出征人員に付ても、又其の戰費に付ても、隨分夥多のものであつた、而して土耳古は、戰爭の爲めに大なる打擊を受け伊太利も亦之れを被つた、即ち伊太利人の、土耳古より退去せるもの二万近くであつて、其の大部分は、商人及勞働者であつた所から、伊太利の事業界に於ける、運轉を妨げた、而して一方、伊太利艦隊は、多島海を警戒巡遊して、海上輸送を妨げたが爲めに、貿易に打擊を與へた、加之、此戰爭の結果、土耳古の公債をして下落せしめ、其の外債募集をして、不能ならしめたのである、當時の土耳古は、外は伊太利と事を搆へ、内は政爭絶へず、而して特にバルカン諸邦の脅迫の手は、迫り來りつゝあつて、其の財政は全く窮乏し、大ひに土耳古の爲政家をして、苦ましめたのである、土耳古は、實に此の戰爭に依り、大なる損害を受けた

次第である。

伊太利側に於ける、此の戰爭に因る、兵士の損害は、土耳古に比すれば、輕微であつた、十八ヶ月の間の統計に依れは、伊太利に於ては、死者の數は、將校九十二名、兵卒一千三百九十一名に過きなかつた。

此の死者の統計は、殖民地獲得戰爭中には、亦其の比を見ない少數である。

出征軍隊の數は、初め、約五萬であつたが、其の后逐次に增加せられて、遂には十萬の多數に達した、此点から云ふと、伊太利の陸軍は、未だ弱兵である。

伊太利の戰費は、之れが爲めに非常に高まつたが、元來伊太利は、最近の財政狀態に於ては、基礎堅確、洵に大盤石であることを示した、數年以來、伊太利の財政は頗る安固で、收支を比較すれば、常に、收入過剩の結果を示して居た、例へば、一九〇八―九年間の會計年度に於ては、九千萬法、一九〇九―一〇年の會計年度には、約八千萬法、一九一〇―一一年の會計年度に於ては、約壹億四千萬法の剩餘を見たのである。

戰費は、ローザンヌ平和條約迄に、四億フランであつた、仝時に、國家は、此外に國民に種々の負担を課したのである、即ち鐵道買收、初等教育制度改革等に因る諸經費、及天災地變に因る臨時費等の如きは、即ち其の重なるものである。

財政當局者は、一九一一年十二月迄は、其の儘となし、其の以後は、順次に其の豫算額を增加した、其の結果、一九一二年一月十三日の調査によれば、前年の當月當日よりも、壹億四千萬法の增加を見たのである。

戰爭に由りて、伊太利經濟界は、多少影響を蒙むつたが、乍然、毫も其の堅固を傷けるものはなかつた、尤も、土耳古在住伊太利人の一時的引揚は、相當に經濟界に變動を生じ、且又ロンバルジャ地方の織物業者は、平素の顧客が、土耳古であつた所から、初めは苦痛を受けたが、伊太利軍隊の動員せられ、續ひて出征と云ふことになるや、何れの國に於けると仝じく事業界は、却つて景氣付き、戰爭開始后未だ幾ヶ月にもならずして、諸種の事業が、製造者に與へられ、經濟界は、何處も同じき好景氣を來したのであつた。

右打擊の事は、一部分の事實であるが、全般より之れを見れば、該戰役により

て、打擊を受けなかつたと云ふても、差支へない位であつた、現に戰爭開始后四ヶ月の調査によると、ミランのロンバルヂヤ貯金局にては、十億法の貯金を有し、比較的貧しいパレルム地方の貯金局でさへも、一億法の貯金を有したのを見ても、當時の民間の財力の程度が分るのである。

又一九一一年六月三十日より、一九一二年同月同日迄の間に、船舶噸數は、五萬八千〇七拾四噸の增加をなしたのである、是れ此間に於ける海運の發達を示すものである。

戰爭にも拘らず、爲替は又少しも變化を來さなかつた、但し後には一分程上騰したのであつた、然らば公債の景氣は如何であつたと云ふに、宣戰の布告によりて、少しも影響を受けず、却つて現時の一般的傾向として、國債を賣り拂つて、他の有利事業に向けんとする、一般的原因の影響を受けて、少しく下落したのである、此の下落に付ては、戰爭の結果、伊太利財政の信用が、多少は關係がある如く、云ふ者もあるが、勿論其れも一原因には相違はないとしても當時は、佛蘭西の、公債も下落して居たのであつた、茲に注意すべきは、伊太利公債の、殆ど全部は、伊太利國内にある事で、此事は、伊太利財界の順況を報するものである、併し國際的信用を維くには、外國債も必要であつて、信用の試驗をなす徵証となるのである、其れ故に伊太利が、其の公債の大分部を國民が有することは、必すしも國家の利益でないと云ふ説もある、一理ある説である。

戰爭開始以來、新航路は、シシリー島と、トリポリテーヌとの間に開設された、既に、シシリー島の農産物、殊に葡萄酒及果實の類の捌け口が、リビヤ地方に見出されて居つたから、此事は大ひに便利であつたに相違ない。

申、新領土上の新事業

伊太利のトリポリテーヌ併合は、伊太利の爲めに、數多の新研究の問題を與へた、其の内でも、特に鐵道敷設の如きは、急を要するものであつた。

トリポリテーヌを、土耳古が領有する前には、久しく此地方は、アラビア種族の領有であつた、其の當時には、此地方は相當に隆盛を示して居たが、土耳古

が之れを領有してからは、放任主義であつて、施設の見る可きものは一つもなかつた、之れが爲めに、トリポリは、次第〳〵に荒癈に趨いて居た、羅馬時代の橄欖茂生地は、既に荒れ果てて、又交通路としての道路は、殆んど無く、鐵道の如きも、無論無かつた、教育制度も勿論無く、唯た單に、コーラン即ち回教の經典を教ゆる初等學校が、少し計りあるのみであつた、農業も古來の習慣の儘に附せられ、全く原始的耕作法であつた、而してアラビア人は、唯だ自己の生活に足る丈けを、収穫するのみであつた、耕作の器具の如きは、疎末なる木製で、人間自身が之れを動し、牛馬を使用せず、從つて、其の効果は、憐む可きものであつた、皆な是れ惡政の結果である。

又之を商業上に見るのに、古への、美事な繪の樣な隊商も、衰凋に趣き、最近の調査によれば、一年に、隊商の通過すること、八回乃至十二回に過ぎずして、其の駱駝を伴ふものも、千頭を越へない、之れを以前の如く、隊商の往復其の數を知らず、駱駝を卒ゆるもの、三千頭なるに對比すれば、其の差は實に多大なるものである。

此の隊商の目的とする所は、即ち、奴隷、砂金、海棗子、駝鳥の羽、羊皮、粗末な滑し皮、角、護謨、樹脂、香料、等の賣買であつた。

戰爭前年の統計に依れば、トリポリテーヌから、海路によりて、大麥、家畜、紙の原料たるアルファ、及海綿を輸出し、而して製造品、砂糖、茶、麥粉を輸入して居た、乍併、其の數字は、餘り大したものでない、又船舶の出入は、トリポリ港は、九百十三艘、四十一万六千噸、ベンガジ港、が四百五十二艘、十五万二千噸であつて、之れを、船籍によりて區別すると、船舶數は、土耳古船最も多く、トリポリに出入するもの、三百四十九艘、ベンガジに出入するもの、百六十六艘であつて、船舶數では、即ち土耳古が第一である、併し噸數に依ると、伊太利が第一である、即ちトリポリに、十九万一千噸、ベンガジに、十一万五千噸出入するのである、夫れであるから、土耳古は、トリポリに於てさへ、第四位乃至第五位に下り、英佛獨以下である、戰爭前、數年此方、伊太利及獨逸の貿易額は、非常に增大し、之れに反して、佛國の貿易は、ベンガジに於て減少した。

トリポリテーヌに於ける諸港は、設備頗る不完全であつて、風波少し荒きと

きは、船舶の、荷揚げ及荷卸共に、不能となる有樣であつた。

斯樣な有樣であるから、トリポリテーヌは未だ不整備の土地である、乍併、此等の欠点を改良することは、不可能ではない、伊太利は今や、此の地を得たが、併し未だ軍事的に之れを得たと云ふに過ぎない、此土地を以て、眞實の伊太利となすには、大ひに資本と勞力と智識とを要する、トリポリに於ける、砂漠中の森林地も、今は早や、大部分熱砂の侵入を蒙むつて居る、隊商の凋落と共に、住民は次第に此の地を棄てゝ、其の後は、次第々々に荒廢したものである、此の荒廢は、永い年月の結果であるから、之れを以前の如くに回復するには、莫大なる勞力と資本とを要するのである。

即ちトリポリテーヌを以て、美はしい殖民地とするには、先づ大資本と共に、多數の農民を必要とする、然し伊太利には、多數の農民あるを以て、此事は可能である、又商業に關しても、港灣の修築、產業の發達に伴ひ、漸次に進歩す可きことは、疑ふ可らざることである、併し、何れにせよ、大なる熱心と、不拔の精神とが、有形的要素と共に、必要である。

尙ほ又リビア地方に於ける、南伊太利人、殊にシシリー島人の、無思慮にして且つ無秩序なる動作は、伊太利人の間に、問題とせられて居る。

此等の人民は、大部分は、小作人及下級勞働者であるが故に、深く國家を顧みない弊がある、乍併、戰後トリポリテーヌに渡航したる射利の徒は、國家の爲めではなく、唯た單に自已の利益を得んと欲して、新領土に渡つたものであるから、其の動作に不秩序なるものあるも、固より已むを得ない、彼等の多くは只譯もなく、何物か儲かると云ふ考へで出掛けたのであるが、中には、利益も得られずに困窮して居るものもある、又家賃は、二、倍三倍或は四五倍となり、食料品も亦、之れに伴ひて、騰貴したのである、去れど、相應な勞働の需要もあつて、南伊太利に於けるよりも、二三倍の賃金を得らるゝのである、併し、其の勞働たる、一定の秩序はなく、臨時仕事の類に過ぎない、斯樣な風であるから、伊太利は一九一三年三月、リビア地方の、出稼民を、一時差止めた事もあつた、何れの國に於ても、占領の後の情態は、全樣である、新領土は、本國人民の勞働場である、無職業者や、貧人の集まるのは、當然な事であつて、之れを差止めるのは、

占領本來の目的に反して居る。

乍併、伊太利は、前にも屢々述べた如くに、征服前より、既に大体の標準は、立てゝ居つたのである、故に今后は、只、具眼的政治家と、有力なる實業家とが、相ひ協力して努力したなれば、伊太利の國益は、増大するであらう。

トリポリに於ける、公共事業は、戰爭終結前より、政府によりて、既に企てられて居た、特に港津の修築の爲めに、調査技師は、全地に派遣せられて居た、例の七港、即ちトリポリ、ホムス、ベンガジ、デルナ、ボンバ、トブルーク、マカベに、關する工事、特に積上機、積荷荷卸の道路、及埠頭等の建設、又マカベ港の浚渫、トリポリ、ホムス、ベンガジ、及デルナ港の機橋及波止場等の新設改設は成つた、殊にデルナ港の如きは、六米突の吃水の船舶を、自由に出入さすることが出來るに至つた。

軍事上の要港としては、トブルーク、又はボンバに、決定さるゝ筈である。

以上の大工事に用ひらる費用は、四千万法にして、此れ等の工事は大略既に出來上つたのである。

兎に角、緊急工事は、官民一致の努力によりて、急速に出來上つた、而して政府は、電氣事業の一部、鐵道、電車の、獨占權を留保した、蓋し是れ、斯くの如きは、事、營利問題よりも、政治上、經濟上、殊に當時は、軍事上の必要もあつたからである、併し其の建設其のものは、無論私人をして、之れを請負はしめた、其他目貫の場所の道路には石を敷き詰め、又家屋の整頓等は、瞬く間に、一通りは出來上つた、此の戰亂と大工事の多忙の間に、伊太利演劇場は、トリポリに於て、盛大なる開場式を催ふしたのである。

鐵道線路は、先づ第一に、トリポリの、西部より東部、即海岸に併行して、建設されたのである、其の營業中心点は、無論此の新領土の首府たる、トリポリである、其の後取引の必要に應じ、シレナイカ港迄、海岸線を延長し、其の次ぎに、高地方面へ及んだ、此の工事も地勢の關係上、大なる難工事には出會しなかつたので、豫定の如くに渉かどつた、遺憾の事にはエジプト、チュニス等の、鐵道との連絡が、未た不完全である、但し此工事も恐く、遠からずして起さるゝことであろう。

斯かる有樣であるが故に、トリポリに於ける、商業の發達、生活の向上等は、誠に目覺ましきものがある、之れを、戰爭前の狀態、即ち土耳古領時代と、比較するならば、隔世の觀がある、是れ伊太利の成功である、又トリポリ地方の、アラビア人も、意を安んじて、各々其の業に就き、各自の勞働、各自の取引に從ふことは、土耳古領時代と、少しも變らないのである、

學校の建設に關する問題は、當初より、識者の間に、論議された所である、而して程なく、一般の注意を惹ひた、一九一二年二月、伊太利アラビア學校は、戰時占領の地方に於て、建設せられた、其の內、高等學校は、トリポリに設立せられ、當時の生徒は、約六十人であつて、男女合併敎授方を取つた、即ち生徒の中には、黑人もあれば、アラビア人も居る、又混血族も在ると云ふ風に、種々雜多である、而して茲に見逃がすことの出來ないことは、彼等の多くは、父母を持つて居ないことである、彼等は全く無敎育の子弟である、故に敎師は、彼れ等に、朝は「御早ふ」の挨拶から、夜は「御寢み」の挨拶迄敎ゆることを要した、又敎室に、彼れ等が入來るや或は佇立せるあり、或は座するあり、種々樣々であるから、彼れ等に對し、一緒に立つこと、一緒に座ることをも敎へさるを得なかつた、彼れ等の多くは、歲月の事をも知らないものが多いので、之れを敎へ、又一時間の終りには、必ず敎師は「生徒は何處の國民なりや」を問ひ、「伊太利人なり」との答を得て、而して後ち、國王の名を問ひ、之れを答はしめ、斯くして、課業を終るのである、斯樣な風にして、伊太利人は新領の人民を、仝化するに努めたのである、新領土の人民に對しては、何れの國に於ても斯くあらねばならない、

戰爭前には、トリポリに在る伊太利學校には、約千名の生徒を收容して居たのであつたが、戰爭の開始と共に、其の數は減少した、アラビア人は、好んで伊太利學校に通學せんとしたけれ共、ホム港に於ては、土耳古は特に之れを妨害して居つたが、土耳古としては當然であつた、

戰爭後、伊太利人一般の希望としては、伊太利アラビア學校の、建設を望んで居たが、乍併、基督敎徒たる伊太利人と、回々敎徒たる、アラビア人とは、到底一朝一夕には、之れを混合敎育することは出來ない、又宗敎的傳來の風習の何れかを、打破する結果ともなるので、此事は、双方信者の好まざる所である、アラ

ビア人は、要するに、コーラン即ち回教々典によりて教育するを必要とする。是に於て、一學校内に級を分ち、アラビア人に對しては、別個の授業をなすことゝなつた、アラビア人の授業には、二人の教師を以て之れに充て、一人は伊太利、他の一人はアラビア人とした、而して伊太利人の教師は、專ら、歴史、數學、地理、等を教へ、アラビア人の教師は、專ら宗教的學問のみを教ゆることゝなつた、斯くの如くして、伊太利人は回教を尊敬し、反感を買はぬ事に務め、漸次に彼等を伊太利風に同化せんとして居るのである。

斯樣に、土人に對しては、伊太利人は、佛人が亞弗利加人に對する政策の如くに、種々の好意を表はてし居るから、土人も伊太利を憎まない、否な大部分は喜んで居るのである。

伊太利は、既に戰爭中、即ち一九一二年の末頃、トリポリに於て、兵士の募集を始め、二千人の土人兵を得た、譬へ彼等には、眞に忠順の心はないにせよ、戰爭中、既に斯くの如き成蹟を得たのは、伊太利に對する、土人の信頼又は歸服を語るものである、彼等の給料は、少額であつて、其の内より、食費及一箇人として

の一切の費用を辨せねばならぬ、併し、一週間に一度は、四人の土人兵に對して、羊一頭宛の御馳走が、一般に支給せらるゝのである、又兵營内に住居する場合には、自己に供與された室内に、妻子を伴ふことを許される、彼等は斯くして伊太利の兵士となり、之れを喜んだのである、佛國も此点に於ては、アルゼリア、チユニス、モロツコ、セチガル等の各地に於て成功して居るから、伊太利も、必ず順次に成功することであろう。

トリポリテーヌの、一般的制度に關しては、戰爭の開始と共に、新聞雜誌に關し論議せられた、一般の輿論は、佛英の歴史に省み、佛國の其の初め、アルゼリアに於ける失敗と、英の一般殖民地に於ける成功とを比較し、トリポリテーヌに於ては、畫一主義及官僚主義を排斥した、是れ適當の着目であるが、乍併、英國流の不統一主義、放任主義は決して適當なる殖民政策ではない。

當時の殖民大臣、ベルトリニ氏は、トリポリの旅行より歸來し、左の言をなした、曰く、

「吾人は、當初より、吾人の戰爭に關して、土耳古の爲め及土耳古の人民として

戰へる、トリポリテーヌの人民より、好意を得ることは、望むべくもあらず、又望む所に非ず、然れ共、伊太利は、アラビア人の敎育者たり、又協力者たらんとする者也、伊太利の富を發展せしめ、新方面に於ける開拓をなさんとせば、先つ土地の所有者たる、土人を善導し、一層之れを良好なる地位に導く可きものとす、斯くして、彼等の幸福は、增進せらる可し、今若し現狀を以て、之れを舊制度の下に於ける情態と比較せんか、土人に對する恩惠は、蓋し大差あり、此の新占領者の忠實なる協力に依りて生ずるものは、實に土人自身の利益其のも、の也云々、」

此の一事は、以て伊太利の賢明なる殖民政策を明にするものである、

壬、戰爭と愛國心及國民主義

「愛國心の觀念が、伊太利に益々熾んになつた事と、トリポリテーヌ遠征とは、密接な關係がある、之れに關して、スキピオ、シゲール氏は、左の如く云つて居る、

「戰爭以來、伊太利は、精神的に以前と全く異れる伊太利を現出した、即ち嘗ては存在せざりし、幾多の現象を生じたのである、又嘗ては滑稽として笑はれたる熱心を以て、國民は戰爭に從事した、又一般に、感情的のものを一掃し、殊に地方の利益のみに着眼せる人士や、又は社會の特殊階級の利益、或は政黨の利益のみに着眼せる人士を、此の國民主義によりて一掃した、唯た大なる祖國、即「伊太利」なる單純の叫びの爲めに、此の部分的の利益は、犧牲に供せらるべきものてある、今日の伊太利は、數年前の伊太利と、同一視することは出來ない、今日の祖國は其の考慮を一轉したのである、此の變化は、如何にして來たりしやは、余の疑問の一である、恰も是れ、一人の年若き婦人は、何時から、又如何にして、可憐のものとなつたかを問ふのと同してある、伊太利も亦此の婦人も、全一の色彩を有し、全一の容貌を有し、全一の特長を有するけれとも、扨て其の者が、過去とは、全然全一ではないのである、過去の物其れ自身は、變しないのである、乍然今ま伊太利は、過去には存在せざる、內部の精神的輝きが、外形に表はれて來たのである、……」と、

實に伊太利に於ける一九一一―一二年の重要なるものは、何ぞやと云つたなら、何人もそは、トリポリの事件であると云ふであろう、乍併、そは外形的であつて、内的ではない、内的のものを討ぬるならば、其は實に、愛國心の熾烈である、先づ伊太利に於ける各階級を見るに、一様に國家的に結合して、其の結合は蓋し永久的のものとなつた、此の感情は、當時先づ南部伊太利より始まり、北伊太利に及んだのである、其の愛國的光熱は蓋し、伊太利統一の時代と、仝一又は其れ以上であつた、筆を執るものは、筆を振つて、戰の爲めと愛國精神の爲めに氣を吐き、一般的感情は、實に緊張したのである、是れ當時の伊太利人の面目であつた。

愛國心は當時、軍人社會に實に盛んに輝いた、其の結果、トリポリ事件の際、内地に殘されたものは、不平の餘り、騒動も仕兼ねまじき有様であつた。

又左の如き例がある、それは伊太利人の佛國在住者に、召集令が下つたとき、命に接した者は、一齊にモデヌの停車場に集合し、列車の來るのを待つて居た、適々波蘭土の社會主義者があつて、起つて彼等の爲めに、國際同胞主義を演説し、土耳古に對し、武器を執るは不可なりと、熱心に主張した、然るに伊太人中の一兵士は、直に之れに對し、自分は滿足を以て戰爭に趣くものであると答へ、又他の一兵士は、大に憤慨して、汝はトリポリ問題の原因を知らずして斯る言をなすの資格なし、又例へ理由の如何なるに係はらず、一旦宣戰せる以上は、吾等は敵を倒す以外に、何物も眼中になしと答へ、又他の兵士は、汝の如きものあるが故に、汝の國は亡びたる也と呼び、最后に顯はれたる兵士は、熱心に此の社會主義者の言を聞き、又質問して居たが、夜營の夢に憧がれて居た彼れは、鐵拳を以て、彼れポーランド人に答へたのである、此事實は、伊太利の戰爭に對する眞面目を語るものである、又其の愛國熱の熾烈を示すものである、

又、此の戰爭中、危險を冒して、水雷攻擊を、ダーダネルス海峽内に行つたことは、伊太利海軍としては、國家に對する犧牲心及愛國思想なくんば、到底出來難いことであつた、伊太利水雷艇は、敵の十字砲火を冒して、其の任務を全ふし、本隊に歸つた事は、彼等からは、一奇蹟として傳へられて居る、我國旅順攻擊其の他海陸軍人の勇敢に比すれば、無論比較にはならぬけれども、兎に角、彼等

の犧牲心を窺ふことが出來る、當時の伊太利人は、實に大ひに愛國精神を發輝したものであつた。

伊太利に於ける、愛國心の發生は、一層廣き意義を有する、民族主義の發展と關聯して居る、伊太利民族主義の最も明白なる特質は、戰鬪的色彩を帶びて居ることである、此の色彩は、歩一歩、其の範圍と內容とを進めつゝ、イルレダンチズムの精神に影響を及ほして居る、從て、此れ等の精神の爲めに、第一に影響と恐怖とを受くるものは、即ち墺太利である、然し伊太利人は、其の內心は、兎に角、外面には、唯た單に、此の主義を以て、防禦的のものであると說明して居る、乍併、足一度、伊太利に入るなれば、其處には、此主義に關する國民の熾烈なる觀念を見るのである、又トリポリ戰役によりて、伊太利の愛國精神の益々昂まつたことは、前述の如くである、戰前同盟の關係にありし時に於てすら、伊太利人は、既に墺太利方面の防備を嚴重にし、アドリアチック海ニ於ケル諸設備及海軍の充實等、一として墺太利に對するものに外ならざるはなかつた、戰前既に斯くの如し、是故に、墺伊戰爭を以て、唯た偶然的にセルビヤ事件に因る波動となし、又は偶發的伊太利の背信に歸すとなす者あらば、其は、甚皮相の觀察たる誹りを免るゝ事を得ないのである。

伊太利の民族主義は、伊太利現在の國境よりも、尙一層廣大なる伊太利人の領土を有すべきものとして、多年伊太利人により主張せられ、其の範圍は、現在伊太利民族の居住する、範圍に及ぼさんとして居る、其の範圍の重なるものは、アドリヤ沿岸であるが、其の詳しき事は、歷史の說明する處を聞く必要がある、兎に角、此の民族主義は、舊領回復觀念の活動を盛んならしめ、伊太利の領土の範圍を擴張せんとするにある、伊太利民族主義の有力者、シビヲ、シゲレ氏は、伊太利民族主義問題に由りて、伊太利外交は、終結すべしと主張し、昔のイルレダンチズムたる、祖國的ローマ主義は空想也として居る、是れ適度の見である、今や其の機は遂に來つた、多年、伊太利の上下が、未た回復されざる伊太利として、墺領の南西部に對する抑へ難き野心、並に墺領內に於ける、伊太利人の同樣の熱望は、現時の伊太利人の努力如何により、今や實顯せられんとして居る、伊太利の協商側に立てるは、蓋し大ひに理由ある所である。

九、伊太利と這回の大戰爭

這回の大戰爆發すると共に、伊太利は直ちに中立の態度を取つた、獨帝は大ひに之れを怒かられ、後日之れに復讐す可しと傳へられた、而して日本の新聞紙の中には、當時伊太利の態度を背信として大に非難したものもあつた、乍併、伊太利としては、其の國の自存的利益を保持せねばならない、或國人の如くに、同盟の條文は別とし、道德的に唯た同盟の誼に依つて起つと云ふのと、彼れ歐洲人等の外交に關する、觀念とは異るのである、伊太利人は、其の中立を保てる理由を說明して、却つて三國同盟の主旨に基くものと辯明した、即ち塞耳比亞に對する墺匈國の態度は、三國同盟の主旨たる、防禦的ならずして、却つて挑戰的であつた、是れ伊太利に共同作戰の條約上の義務生せざりし所以であると辯明した、是れ中立に關する法律的解釋である、

今の伊太利の國是は、彼のクリスピー時代に於けるものと異り、東方に其の權力を樹立するに在ることは、前述した如くである、是故に、伊太利は、墺匈並に獨逸と共同して、佛英と交戰するは、其の國是に反する所である、是れ唯た單に國是に反する所たるのみならず、地中海に於ける、英佛共同の優勢なる海軍に當ることは、伊太利本國の爲めに、頗る危險なるのみならず、新に得たる、トリポリの爲めに、非常に危險であることは又甚た明白である、是れ伊太利が、開戰に際し、政治上の意味より、先つ中立の態度を持したる所以である、本來伊太利が、獨墺と同盟したる所以のものは、佛國より羅馬還附の難題を提出せらるゝのを虞れたのが、其の一理由である、又チユニスを佛國に奪はれたる怨恨が、他の一理由である、然るに、羅馬府の問題は、既に確定して何等事なきのみならず、佛國は既に宗敎を餘りに重要視せざる國となり、斯る問題は國民一般の念頭にないのである、又チユニス問題は、トリポリの占領に依りて、夙に明白に解決せられたのである、是故に伊太利が佛國に對して開戰するのは、何等理由の存在せざる所である、之れに反し、アドリヤの問題は、伊太利の生存の爲めに、重要なる問題である、恰も日本の爲めに、對馬や、朝鮮が、必要なるのと同じである、是れに由て之れを觀れば、伊太利が、獨墺に與みせなかつ

たのは、事、素と當然である、是故に伊太利に對し、人若し其の背信を責むるものがあつたならば、そは、同盟の法律的解釋及外交の要義を解せないものと云ふ可きものである。

伊太利は斯くして中立した、而して伊太利は、其の間巧みに、英佛の同意を得て、アルバニヤのヴアロナ港を占領した、ヴアロナは、伊太利が、年來矚目せる所なるは、前述せる如くである、而して此占領は、獨墺に對して挑戰したにもあらず、去らばとて、英佛に味方したにもあらざりしが故に、伊太利は、斯くして尙ほ巧みに其の中立を持續した、伊太利は、初めには海軍を以て、全港を占領したが、一千九百十四年十二月二十八日に至り、第十射擊聯隊をして、全港に上陸せしめ、其の占領を確實にした、伊太利の外交は巧妙なりと評す可きである。

其の後、獨逸は、ビューロー公を伊利太に派遣して、伊太利に說き、伊太利の爲めに、墺國に於ける、伊太利人の居住する、トレント地方を、戰后に伊太利に分割するを條件として、獨墺側に與せんことを提言した、乍併、伊太利政府は戰後に於ける分割の約を以て、甚た危險なるものとなし、且つ獨墺に與して、其の海軍を以て地中海に英佛艦隊と爭ふの危險なるを惟ひ、又チュニスに出兵して佛軍と戰ひ、埃及に出兵して英兵と戰ふの負担の危險なるを慮り、之れを拒絕し、又伊太利國民の一般は、熾んに示威運動をなし、英佛に身方して、墺國と開戰せんことを主張したるを以て、伊太利は一千九百十五年五月四日、終に墺國に對して、最后通牒を發し、両國は愈々開戰することゝなり、ビューローは、其の策成らずして伊太利を去つた、但し伊太利は、未だ獨逸とは、明に交戰國の關係には存在しないのである、其れより伊太利の軍隊は、墺太利に向つて進擊したアルプス山間に戰ふ事となつた。

伊太利は、一千九百十五年八月二十一日に至り、土耳古に對しても宣戰した、其の理由とする所は、亞弗利加のリビアに於けれ土人に對し、土耳古が密かに之れを煽動し、土民をして反亂を起さしめたのを不法となすと云ふに在つた、伊太利は、斯くして土耳古と交戰情態に入つた、乍併、伊太利は、英佛軍と共に、ガリポリに兵を出さず、又サロニカにも出兵しないのである、伊太利として